

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第 2 期第 33 号-通巻第 45 号)

発行：2025 年 8 月 30 日

櫻井毅特集：宇野理論と生産価格論

パート 1 講演と論考

櫻井毅

(武蔵大学名誉教授 t.sakurai@piano.nifty.jp)

『資本論』第三部におけるマルクスの困惑と混迷-生産価格論を中心として

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-33-1

http://www.unotheory.org/news_II_33

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

E-mail: contact@unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>

目次

配付資料	i
櫻井毅講演	1
ご挨拶	1
報告	2
はじめに	3
リカードとの出会い	4
リカードの研究を始める	6
リカード全集のこと	7
転形問題との出会い	8
リカードとジェームズ・ミル	11
リカードの困惑	13
生産価格論と転形問題	15
マルクスとエンゲルスの出会い	17
マルクスの経済学研究の形成	18
『国民経済学批判大綱』の効用による需給調節論とカテゴリー批判	19
マルクスの「23冊ノート」	21
『剰余価値学説史』から読む生産価格論の形成	23
『資本論』第三部と「23冊ノート」	24
宇野理論と鈴木原理論	25
マルクスの生産価格論	26
交換価値、使用価値そして価値	27
生産価格は価格形態である	29
生産価格と価値の次元の相違	31
『資本論』とリカード	34
マルクスと経済学原理	37

マルクスの労働価値説	38
価値は生産価格の本質	40
質疑応答	45
転形問題：物量体系と経済原則	45
唯物史観と労働価値説	54
資本家の労働	64
高須賀義博氏と「次元の相違論」	66
謝辞	67
論文 1 『資本論』 第三部におけるマルクスの困惑と混迷	69
論文 2 『資本論』 第三部における生産価格論の混迷について	99

配付資料

1. マルクスの経済学研究の道筋　ブルジョワ経済学のカテゴリー批判（経済学批判体系）から「資本論」体系へ転回
 - ① エンゲルスの問題提起。本質と仮象の顛倒、その逆転による解明。マルクスによるエンゲルスの初期問題意識の継承とその創造的展開。マルクス経済学の発展。
 - ② ヘーゲルのトリアーデの活用（有論、本質論、概念論）——『資本論』第一部第1、2篇、および第3篇以下の第二部と第三部の全体、それぞれ独立の三部分として分割する。
 - ③ 著作名も「経済学批判」から「資本」へ、また内容もイギリス人の古典経済学に似た「経済学原理」の構成を目指す。J. ミル、リカードなどの影響著しいように思う。
2. 転換の契機——「23冊ノート」執筆の過程での生産価格の概念化～第三部9章での明確化
 - ① 価値の生産価格への「転化」の不十分性—マルクス自身の方法の不徹底さ
 - ② マルクスの「価値」規定の曖昧さ—価値と交換価値、あるいは第一部冒頭の価値論における第三部への言及（理論の進展によって再び交換価値に戻るが、ここではその関わりなく価値で考察される、などという）の意味は？
 - ③ 「内的規定」、「内在的本質」とは何か。価値と価格の世界の次元の相異に言及か。
 - ④ マルクスはすでに第一部の価値論で、第三部での価値の交換価値への回帰に言及しながら、何故自らの方法を一貫できずに、価値と生産価格に投下労働量の変化という問題を付け加えてしまったのか。戦前ソ連のローゼンベルグの『資本論注解』においてすら、生産価格が価値の価格形態であることを明記していた。
3. マルクスの労働価値説へのこだわり
 - ① 古典派以来の伝統
 - ② マルクスの「自然法則」（宇野のいわゆる経済原則）の前提になっている唯物史観がその根拠になっているのではないか。宇野『原論』、鈴木『原理論』など、私自身の反省も含めて、すべて共通であったように思う。
 - ③ マルクスが初めて明らかにし、宇野がそれを分かりやすく説明した資本主義的商品経済のもつ特異な客観的性格が、なお主張者自身においてもなお十分に認識され切れていないのではないか。いわゆる「経済原則」なるものについての詳しい再検討が必要であるように思う。

櫻井毅講演

ご挨拶

櫻井 毅

準備にあと 10 分ほどの時間が必要ということですが、みなさんすでにお集まりくださっているのとおりあえず何かお話したいと思います。

今日はわざわざここまで来ていただいて申し訳なかったと思います。

私も何しろ 93 歳を過ぎまして、だいぶ歳取って、頭ももちろんおかしくなっているのですけれど、身体もとにかくもう動かなくなりまして、歩くのもちょっと不自由になって、さっきも女房に送ってきてもらったのです。

そういうわけで十分準備ができなかったので今日の話も十分にはできない、準備したところでたいしたことないと思いますけれども、いろんな点でまだ不十分なんですね。一つは本をだいぶ整理しちゃったものですから、手元に本がない。だから調べようとしても『マルクス・エンゲルス全集』を、ここにはいらっしやらないと思いますけど、若い研究者に全部あげちゃったものですからね。

それでマルクスの手紙やなんかについて主として記憶に頼っているのですが、部分的には他に引用してある文献を使って再引用したりしましたけれども、現物に当たることができていないということがありますし、また、マルクスの主要な文献とエンゲルスの文献の中には『マルクス・エンゲルス全集』にしか載っていないものもあるので、それらも改めて見るということもできなかった。そういう点で引用には非常に不自由しました。図書館で見て調べればできることなのですが、図書館に行くのには交通機関を使ったり、歩いたりしなくてはならないので、図書館も利用できない。

そういう点で非常に不十分で、過去の記憶に頼っている部分もあるし、二次文献に頼っているところもあります。誤りもないとは言えないので、そういう点をご承知の上でお聴きいただきたいと存じます。

今日お話しすることは、マルクスの生産価格論ということなのですが、それについては、最近の2、3年ぐらいの間に、大昔にやったことにまた戻りまして、それをさらに一歩進めるというつもりでやってきたのですけれども、昔の今から60年あるいは70年近く昔の修士論文の時から始めた研究なので、それを読み直してみたらもうほとんど8割ぐらいすでに書いてしまっていることが判りました。

その頃は正確に理解できていないことが結構あり、詳しくはまだ書けなかった点も多いんですが、それでも大体の方向は書いているんですね。だから今さら何だろうと思って、自分でも最近読み直して、呆れたのですが、でも決定的なところで欠けている。今日のお話は、その決定的な部分をどこまで埋められるかという問題を、昔の研究をなぞりながら行ったものでもあるのです。

だから、多少前進したところもないことはないですね。そういうわけで、蒸気機関車で引っ張っていたのが電気機関車になって、新幹線とは言わないけど、多少は進みかたが早くなったってところはあるかもしれないけど—まあ大体同じ線路、軌道の幅は多少広がっているかもしれませんが—を走っている、そういう感じがしたにはしたのです。

それで、多少は内容も考え方もちょっと変わってきた点とか、その結果、あるいは良くなってきたのか、あるいは悪くなってきたのか、いずれにしても、変化があった点がありますので、今日はそういうことを全部お話ししておこうと思うのです。

私の考え方は、マルクス経済学から逸脱している、そういうご意見もあるかもしれませんが、逸脱していてもしていなくても、そういうことは私は全然気にしてはいないので、自分の考えた通り進んでいくしかない。ただ、もうこれ以上進めないかもしれませんから、今日せっかく与えられた機会なので、今まで考えてきたことをお話ししたい、そういうように考えております。

報告

司会：小野成志

遅くなりましたが、準備ができましたので始めさせていただきます。

櫻井先生はこれから2時間半喋りたいとおっしゃっています。実際にかかる時間がどうなるかはわかりませんが、先生のお話が終わってから質疑に移りたい

と思います。

今日のような研究会の司会をさせていただく資格など、私にはないのですけれども、櫻井研究会の世話人を長らくやっていた関係もあって、今日の研究会を準備してきたのが私ですので、成り行きから司会を務めさせていただきます。

研究会を始める前に、今回の研究会が開催されることになった若干の経緯について述べさせていただきますと、実は先だって、10月4日に仙台で開催されました「大内秀明先生を偲ぶ会」に私が出席させていただいた折りに、岡本先生と亀崎先生と私の三人がたまたま隣同士に座ることになって、その席で、私が、櫻井先生の生産価格論に関する研究会をやりたいと申しましたら皆で意気投合して、それが今日の研究会を開くきっかけとなりました。

私は運命を信じる方じゃないのですが、この点では、大内先生が櫻井先生に「生産価格についての研究会を開催してほしい」と思われたからかな、というふうに思っています。

そのことだけお伝えして、研究会を始めたいと思います。

はじめに

櫻井 毅

そういうわけで今日お集まりいただいたんですけども、わざわざここまで来ていただいて本当にありがとうございます。先ほどちょっとお話ししたので、あれでご挨拶に代えさせていただいて、早速本題に入りたいと思います。

みなさんには何度か文章をお送りしましたが、みんな不出来なものばかりなので分かりにくいかと思ひまして、昨日改めて急いで目次だけの資料を作りました（当日配布資料）。でも、これまた分かりにくい目次になってしまって申し訳ないと思うのですが、その昨日お送りした目次に大体そってお話をすることにします。

私は緑内障の末期になってしまっていて、今はほとんど目が見えなくなっています。もともと20年くらい前から左目が完全に見えなくなっていたのですが、いまは右目もそうですね、2割くらいしか見えなくて、虫眼鏡でやっと見える程度なので、文献が手元になくなったのがむしろ幸いではあるのですけれども、あってもあんまり利用できないし、読んでお話することもできない。そういうわけで不十分ですけども、だいたい昨日お渡しした一ページの目次ですね、そこに書いた順序に従ってお話をしたい。

本当はもっと詳しくお話ししたいのですが、そうすると2時間半あるいは3時間になりかねない。先ほど「2時間半」と小野さんが言われたのは、なるべく質問を封じるために私がそのようにあらかじめ申し上げたからです。他意はないので、話はなるべく早くまとめたいという気持ちではおります。

それでは、足腰が悪くなってしまったので、失礼して座ったままでお話をさせていただきます。

お手元の配布資料に掲げてありますように、今日は生産価格の話をするんですけども、その前に、その前史というか、なぜこういうアプローチで私が生産価格論に入ったかという事情を、やっぱり知っていただかないと分かりにくいかなと思いますので、その点をちょっとお話しておきます。

リカードとの出会い

私はやっぱりリカードが出発点なのですね。私がリカードから出発していることを最初に申し上げたい。そして、マルクスもやっぱり、リカードっていうよりもリカード学派の研究から経済学を始めているということを、同時に指摘しておきたいと思います。

後でもうちょっと詳しくお話しますが、私は実は、この今講演会をしている武蔵大学8号館の建物の隣の武蔵高等学校が母校なのです。

武蔵高等学校の3年の時に、卒業間際だったのですが、12月頃に急に原因不明の熱が出ましてね。10日間くらい40度近い熱が続いたのですが、原因が分からなかった。それでも大変だった。原因が分からないで困っていたのですが、間もなくなんとなく治って、お正月を無事迎えられた。しかし、正月が過ぎて2月頃になったら、また同じように40度くらいの熱が出て、10日間くらい続いた。僕が生まれた時からかかっている小児科の医者も原因をなかなか究明できなかったのですけれど、レントゲンをとったら両方の肺が真っ黒だって言われたんです。

結局いろんな診断を受けて、要するに肺浸潤、肺結核だという診断を受けた。そのときもまた10日ぐらいでなんとなく治って、3月の大学の入試の時期を迎えて、私の能力がなく、また勉強をすることができなかったという事情も重なって、ある意味で当然なんですけど、大学受験に落ちたのです。その頃には何の病気かがはっきりして、卒業と同時に清瀬の結核研究所の附属病院に入院することに決まった。それで、僕はまあ子供だから病気の話をしてくれないし、親も何も説明してくれないから軽く見ていたのですけれど、1年浪人してまた受験しようと思っていました。そうしたら父親に「まだ若いのだから大学に行くなんてことを今は考えないで病気を早く治すこと

に専念しろ」って厳しく言われまして、それに抵抗して「勉強したい」なんて殊勝なことを言っていたんですけど、実際にはできなくて……。

ちょうどそのころですが、武蔵大学が前年の昭和 24 年に開学していたのですね。武蔵大学に限らず、日本の大学制度が昭和 24 年に全国一斉にできたんですけども、旧制の私立の 7 年制高等学校、私立で 4 校日本にあったんですけど、武蔵、成蹊、成城、甲南、これがみんな大学になったんですね。1 年遅れたところもありましたけれども……。それから府立では、東京府立、大阪府立、県立では後に国立に変わりましたが富山県立高等学校、これも 7 年制です。旧制高等学校から新制大学ができて、武蔵にも大学ができた。1 年前にできたばかりですからね。学生も少ないですから、我々高校生は「あんなとこ」って言っていて、自分と関係ないと思っていたのです。でも、あんまり僕が言うものだから、父親は「そんな勉強したいんだったら、じゃあそこに入っている、そして医者が良いと言ったら時々は講義にでも出てみたらどうか」って言って、僕は、妥協して武蔵大学に入ることにしたのです。その時は、入学試験は終わってしまっていたんですが、幸い二次試験っていうのがあって、4 月初めに入学しました。受験生が少なかったということもありますから、武蔵大学の経済学部に入れたのだけど、その後、在学中のはじめの 3 年間は、休学の手続きはしなかったものの、ほとんど大学に行かなかった。試験だけ受けて単位は少し取りました。

経済学は全然勉強もしないで、家で自分の好きな本を読んだりレコードを聞いたりして安靜な療養生活を送っていました。入学当初は、結核療養所にいたこともあったのですが、1 ヶ月くらいいたんですが、まだ若いし病気もそれほど深刻でないから、自宅で療養しなさいということになったのです。

結局、1 年留年して 5 年目、5 年間でよく卒業できたと思うのですが、5 年目に出席絶対しなきゃいけない科目、ゼミとかがあって、そうした科目の一つだった「外書購読」を受講したら、その時にリカードの『経済学原理』*1がテキストだったんです。それが、今思えば僕の経済学の研究の出発点になった。

その講義では、価値論の章、つまり『経済学原理』の始まりから読むのですが、学生が訳して、それを岡茂男*2先生が説明解説してくれるスタイルなのですが、それがなかなか進みが遅い。僕は我慢ができなくて、自分で先へどんどん読んでいくことにしました。さらに戦前の訳本がうちにあったものだから、まあ英語も読みやすくはなかったんですが、とにかく訳をいくら読んでも、意味が全然分からない。

*1 Ricardo, D. (1821). *On the principles of political economy*. London: J. Murray.

*2 岡 茂男（おか しげお、1920 年 9 月 30 日 - 1992 年 12 月 14 日）は、大分県出身の経済学者、九州帝国大学法文学部卒業。武蔵大学第 5 代学長（1976 年 2 月 5 日-1984 年 2 月 4 日）

それで、私としては珍しくまともな経済学の本を初めて読んだんですけども、堀経夫さんの本だとか、森耕二郎さんの本だとか、波多野鼎さんの『価値学説史』*3かな、第一巻『正統学派の価値学説』っていう本も結構一所懸命読んで、やっとある程度理解できた。その時に気がついたのは、ほとんどの本がみんなマルクスの生産価格論を下敷きにして解説していたことです。

そういうふうにして初めて経済学らしいものをちょっと学んで、結構面白いものになって、初めて感じた。そんなことがあったのです。

それで5年間武蔵大学に在籍して、単位をやっと、単位だけを集めて卒業資格を得て、そのまま、東大の大学院を受ければ、幸い入学できた。武蔵大学には在籍しただけで授業もほとんど出ることができなかったのもので、教授会でそんな人間を卒業させていいのかと問題になったらしいのですが、正直、病気から快復した最後の2年間は大学で新しいクラブを作って部誌を発行し、各種評論を執筆し、研究会や様々な催しを開催して、それなりの活動はしていたし、ゼミなどいくつかの授業には顔を出していたので、私の人生の出発点を与えていただいたという意味でも本当に有難かったと思います。

リカードの研究を始める

大学院に進んで、1年半ぐらい経った時に、修士論文を書かなくちゃいけないということで、テーマを何にするか、いろいろ探したけれどもいいテーマが見つからなかったのです。

その頃、1年先輩に降旗節雄さんとか岩田弘さんとかいたんですけど、降旗さんなんかは、もう1年早くですね、降旗さんが大学院に入学して1年半経った夏休みに貨幣取扱資本に関する論文を書いていた。貨幣取扱資本についてももう書きちゃった。宇野（弘蔵）先生にもう読んでもらったという話があった。これ伝説ですけどね。

そういう話を聞いて羨ましいなと思っていたんですけど、自分の番になって、何かできないかと思っている間に夏休みに入っちゃった。

岩田さんの方は、*Grundrisse**4がちょうど出た頃で、*Grundrisse*の蓄蔵貨幣論とか資本蓄積論のあたりで何か書くってことでやってたんだけど、なかなか結果が出なくて書けなかった。ずっと悩み続けて、ついに最後まで修士論文は書けなかったんだけど、宇野先生が岩田さんの未完成の論文をですね、その頃は岩田さんのことを宇野先生は

*3 波多野鼎. (1918). 『価値学説史』. 巖松堂書店

*4 Marx, K. (1857-1858). *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf)*.

高く評価していましたから、その可能性を信じてかどうかは知らないけれども、未完だけど修士論文を通した、って言うのは伝説ですから本当はどうかかわからない。

そんな話を聞いて、自分はどうかかなと思って親しい間柄の大内秀明君に聞いたら、「自分は、古典派の価値論それからマルクスへの変化っていうか発展、その辺りをやろうと思う」と言っていたので、私も経済学説史をやろうかなと思ったのです。彼は大学院に入るときの論文も確かアダム・スミスを扱ったように聞いていました。

学説史でいいのだったら、それが良いと思いました。理論をやろうとしても、みんな宇野さんがやっているし、宇野さん以上のものを書けないし、宇野さんがやっている変なところがあると感じていたのは、ざっと読んだところでは、商業資本の部分かなあ、商業資本だけはちょっと宇野さんが何を言っているかわからないと思っていたのですが、それについて書くほどの力がないし、どうやって書いていいかわからないから、結局、学説史をやろうと思って、リカードをやることに決めた。先ほど述べたように、リカードであれば多少手掛かりがありましたからね。

それで、リカードをやるについては、前に「外書購読」をやったときに、価値論の修正のところが面白いと思っていたのです。

それに、リカードには初版と2版、3版がありますからね。1817年に初版があって、1819年に第2版があって、1821年に第3版があって、我々が一般に読むのは、英語でもそうですけど、みんな第3版。ところが、初版と第3版とは内容が大きく違うということは、堀経夫さんが指摘していたのですけども、初版を見たことがない。わからない、手に入らない。原書は見るができないし、翻訳はもちろんない。

でも、ちょっとやってみたいなと思ったのは、『リカード全集』^{*5}が、ちょうど私たちが大学院に入る頃に、ケンブリッジ版のスラッファ編の最後の10冊目が出て完結していたからなのです。

リカード全集のこと

私の病気が治ったということがあるし、大学院に入ったということもあるから、私の父親が、「何かじゃあ、記念に買ってあげようか」というので、僕は毎日のように近くの古本屋に通っていたのですけど、古本屋の棚の一番上に飾ってあったのが『リカード全集』でした。僕が「あれが欲しいな」と話したら、父親は、それを買ってや

^{*5} Ricardo, D.; Edited by Piero Sraffa & M.H. Dobb. (1952). *The Works and Correspondence of David Ricardo: Volume 1-10*. Cambridge University Press.

ろうということになり、結構、高かったのに買ってくれたのです。それが私の手元に飾ってあったのですよ、読まないままで。

それを見ると、初版の第 1 章が載っているのですね。そして、その前に、長いイントロダクションがある。

私が大学院に入った時、同期に、大内君も同期ですけれども、高島善哉氏の息子の高島光郎君がいたのです。彼は横山正彦ゼミですけど、彼と話していた時に、彼は「リカード全集のイントロダクションが面白かった」って言うのです。だけど僕は読んでなかったから、そう言われて初めてイントロダクションを読んだ。

結構長い文章ですけど、スラッフアの文章、それを読んだらいろんなことが書いてあって、面白い。

ジェームズ・ミルの手紙が、第二次世界大戦中に発見された。ミルとリカードの往復書簡ですが、その往復書簡の間に、リカードの遺稿「絶対価値と交換価値」という遺稿、原稿ですね、それが挟まっていた。

この原稿は、リカードが病気で突然に倒れる前に最後に書いた原稿です。しかも、二つあって、完成に近い完成稿みたいなのは、途中までしか残ってないのですね。未完成稿は、一応書き上げてある。その二つが、往復書簡の中に挟まっていた。スラッフアは、そういうことも書いている。

それが、『リカード全集』の中で、初めて発表されたんですね。そういうことが刺激になって、その辺のことをちょっとやってみたいなと思ったのが、修士 2 年目の夏休みの後半で、それをやり始めて書いてみた。結構面白かったんだけど、途中で、当時親しかった玉野井先生と話す機会があった。指導教授は教授じゃなきゃいけないってことで、玉野先生が私の指導教授だった。玉野井先生はまだ助教授だったので助教授じゃ指導教授になれなかったからね。

転形問題との出会い

玉野井先生は、お前は俺が指導するからって、最初から言われていたものだから、玉野井先生のところは、始終出入りしてたのですけれども、玉野井先生に論文何書くんだって言われるので、かくかくしかじかでリカードをやるんだと言ったら、リカードもいいけれども、「転化問題」（転形問題）というのがある。それを一緒に研究しようよ、って言われたのですよ。

僕は何も知らなかったから、転形問題って何ですかって聞いたら、玉野井先生が説明

してくれて、スウィージーの『資本主義発展の理論』*6を読んだらよく分かるって言われるので、スウィージーを慌てて読んだのですけれど、当時も古い訳の訳本*7が出ていて、その古い訳を読んだら、面白いことに、スウィージーには実は種本があることがわかった。それがボルトキエヴィッチ*8です。ボルトキエヴィッチは、1920年代のドイツのベルリン大学の教授で、統計学の教授なのですね。彼が分厚い論文を二つ書いて、他にも地代論なんかで、いくつかマルクスのことを書いてるのですが、その論文は、マルクスの価値と生産価格の問題を扱っている。

それをスウィージーが、そのまま英語の本に、自分の本の中に入れてですね、これはマルクス経済学の大変な功績だっていうふうに、讃えていたわけですよ。

ところが、それを僕が初めて読んだときにびっくりしたのは、なんだ、これ、リカードが既にやってることじゃないか、ということでした。

リカードがやってるっていうのは、少し言い過ぎで、ちょっと説明しますと、ボルトキエヴィッチのこの論文は、リカードが初版でやってることを元にしてるんじゃないかと一瞬思ったってことなのです。けれども、ボルトキエヴィッチは当然、リカードのことなど言わない。

ボルトキエヴィッチは、リカーディアンとして知られる人ですけれども、ベルリン大学の統計学の教授ですね。教授といっても、außerordentlich Professor。何て訳すのか分からないけど、まあ、員外教授っていうのは、正規の教授じゃないってことですよね。オーダーから外れて、オーダーじゃないって。どういう意味だろう。制度が分からないから分かりませんが、まあ、そういう肩書なのですから、リカーディアン。当時リカーディアンとして有名な人です。

でも、リカードのことには一言も触れてないんだけれども、実はリカードに遡って考えると、なんか似ているから、すごく理解しやすいし、何だ、こんな話なのかって、当時僕は思ったんですね。

だから玉野井先生にそれを言われて、じゃあ修士論文を転形問題にしようかなと思った。理論専攻ですからね。それで変更しようと思って、本来の指導教授の宇野先生のところに行ったら、お前何言ってんだって言われて、一蹴されて、「顔を洗って出直し

*6 Sweezy, P. M. (1942). *The theory of capitalist development; principles of Marxian political economy*. D. Dobson Limited

*7 ポール・M・スウィージー著; 中村金治訳. (1951). 『資本主義発展の理論』. 日本評論社

*8 von Bortkiewicz, L. (1906-7). Wertrechnung und Preisrechnung im Marxischen System. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bande XXIII and XXV*, J. C. B. Mohr, Tübingen.

てこい」とまでは言われなかったけれど、すぐに追い返された。

追い返されてもちょっと困っちゃって、修士論文のことだから。もう1週間か2週間経って宇野先生のところへ行っただけで、また何言ってるのか分からないって言われて帰ってきた。

それはなぜかという、生産価格と価値が総計で一致するっていう命題が一体何で、どういうことなんだろうっていうようなことを質問したら、「当たり前のこと聞くな」っていうようなことを宇野先生に言われて叱られたんだろうと記憶しているんですけど。

しょうがないから三度目にお伺いしたのだけど、三度目の時は宇野先生の『経済原論』とスウィージーの本を持って行った。

宇野先生の『経済原論』の下巻では、転形問題ではないんだけど、同じ問題、つまり、費用価格における生産価格化という、費用価格における価値の生産価格化の問題を非常に詳しく宇野先生が論じてるんですよ。

他の人たちの著作であんなに詳しく論じていたものはないのだけど、宇野先生は約2ページ以上にわたって書いてる。このことは誰も気が付いていない。

それについて宇野先生と話をしましたら、転形問題のことを、費用価格、生産価格という問題について話をちょっとずらしてですね、宇野先生と話したら非常にご機嫌がよくなって、それで話が弾んできて、君の問題意識がやっとわかったよって大笑いして、ご機嫌になって私のテーマの変更を許してくれた。そうして問題を変更することにして、それで生産価格の問題に初めて辿り着いたのです。玉野井先生のご関心は世界的な「転形問題論争」への直接的参加ということにあり、宇野理論という労働力商品の価値と生産価格は変わらないというのを、例の「転化」のボルトキエヴィチ＝スウィージーの三元連立方程式の解法に使用できないかなど、一緒になって研究したこともありました。でも、僕としては、宇野理論との絡みで考えてみたいという気持ちがあって、玉野井先生と正直ギャップもあったのです。

だから問題は、大学の最後の年に「外書購読」でやり始めたのがきっかけだったということと、リカードとマルクスが非常に近いのだということ、マルクスはリカードの『経済学原理』の問題を一つ一つ片付けている間に、いろんな問題に気が付くっていう、そういう経過を辿っているってことを私は言いたかった。

どういうことかっていうと、詳しくお話しすると時間がかかって2時間半でも足りないくらいなんですけれども。

リカードとジェームズ・ミル

リカードは『経済学原理』の初版を 1817 年に出すんですね。その前の 1815 年に、穀物価格が高くなったり低くなったりすると、それは資本家の利潤にどう影響するかっていう有名なエッセイ、『一論』とか、『試論』とか言って訳されているけれど「穀物の低価格が資本の利潤におよぼす影響についての試論」という表題の論文、それが非常に論理的な論文なんです。それは、マルサスに対する批判です。

「穀物の輸入を禁止しなければ」というマルサスに対して、「穀物の輸入は自由化しなきゃいかん」っていうのがリカードの考え方です。

リカードという人はご承知のようにユダヤ人で、そのおじいさんの代からは伝記が知られていますが、その前のことはあまりわかりません。その前はスペインで身を隠してキリスト教—カトリック—に改宗し、過去を消した。スペインがアラブから解放されてキリスト教に戻ったどこかの段階で、またヨーロッパに戻ってきた。そういうものを先祖とする、ユダヤ人なのです。

だいたいイタリアやスペインに逃げて行ったようなユダヤ人には、裕福なユダヤ人が多いですね。東ヨーロッパからもっと東の方にいるユダヤ人は、貧乏なユダヤ人が多い。

それで、裕福なユダヤ人としてリカード一家はオランダにいた。

オランダという国はまだ昔はなかったと思うんだけど。リカードのおじいさんは結構有名です。その子どもがリカードの父親ですけど、その父親がオランダからイギリスに渡って、株式仲買人になった。といっても株式会社は、イギリスにはまだあまりなかったですよ。ドイツやアメリカなんかと違って、あっても何とかアンドサンズとか何とかブラザーズとかは、同族会社のようなものでしょうけど、株式会社というか、公開株なんていうのはなかったと考えていいと思うんですけど、ただ、公債の売買の市場が盛んで、その仲買人をやっていた。リカードは、小学校に出たらすぐその仕事に携わって、教育を受けていない。

リカードは、若い時にオランダのおじいさんのところに戻って 2 年間ユダヤの教育を受けたと言われているんですけど、それを除けば教育を受けてないのです。けれども、非常に頭が良くてですね、人柄も良いものだから出資を受けて、たちまちに父親を凌駕して仕事をするような仲買人になったと言われている。まもなく Jobber と言われるような—より上位級のと言っていいかどうか分かりませんが—地位に若くして出世していくのです。

そうして、リカードは、ウォータールーの戦いで大儲けするのですね。戦争に際して、戦費調達のためにイギリス政府は公債を発行するんだけど、ナポレオンに多分負けるだろうということで、一度暴落するんです。けれども、運よく連合国が勝ってナポレオンが負ける。その知らせを、当時発明されたばかりの蒸気汽船が荷物を積まないで急いで、大陸からイギリスに知らせに来たという話があるくらいです。

今ならたぶん、スマホに戦況の連絡が即時に入ってくると思うんですけど、当時は、まあ、何時間もかかって、ヨーロッパから戦況が届いて、今度は公債の価格が急騰した。

それで、今考えてみると大したことないようにみえるかもしれないけど、結局、何百万ポンド以上もの、現在だったら優に百億円を超えるような^{*9}収益を得て、リカードは仲買人を辞めるのですね。

商売を辞めて、Gatcombe Park に広大な土地を買って、大地主になる。Gatcombe Park という土地は、後に法政大学の時永淑先生が訪ねて行ってみたら、今はアン王女の領地だったので中に入れなかったと言われていました。そういうエリザベス女王の娘さんが持っているような立派な土地なのでしょうね。

それはともかくとして、引退した後、リカードは著作とか自分の好きな勉強、リカードは数学が大好きだったということらしいですが、地質学の学会の会員だとかにもなって、理科系の才能があったことから、他の宇宙から来た人と当時言われていたらしいですね。最近、ドジャーズに、そういう他の宇宙から来た人がいるという話を聞きますけれども、多分太陽系じゃない宇宙でしょうけど。

それはともかくとして、リカードは、その後いろいろ論文を書いています。1809 年に書いた「金の価格」ですか、それが最初の論文ですけれども、立て続けで毎年のように論文を書いています。金融の論文も多いのですが、地代の論文は、1815 年の論文が最初かもしれないですね。

その地代の論文を読んだのが、ジョン・スチュアート・ミルの父親のジェームズ・ミルでした。ジェームズ・ミルは、経済学者じゃないのですけれども、有名なベンタム主義の指導者です。ベンタムは、庵の中にじっとして表にでてこないのですけれども、社会で活躍するのはミルの方なのです。

ミルは、若い自分の息子たちやそれくらいの年齢の若者を集めて、Philosophic Radicals

^{*9} 19 世紀初頭の 1 ポンドは、現代の価値にして概ね 40 ポンドに相当するとされる (英国通貨の換算サイト *Currency Converter: 1270 - 2017* による)。仮にこの換算に従い、リカードが得たとされる利益を約 200 万ポンド程度と仮定すると、その金額は、現在価値に換算しておよそ 8,000 万ポンド、すなわち日本円にして約 150 億円に達すると推定される。

という名前の組織を作って、言論活動でしょうけれども、いろんなことをやっているのです。そして、リカードに近づいてきて、リカードと親しくなるのです。

そもそも、ベントムは、王政を廃止しろというくらい過激な人です。スコットランドの靴屋出身のミルは、土地所有者というのが大嫌いなんですよ。それでミルは、リカードが、理論的な話としてですけれども—リカード自身は地主ですから—理論的な話として、地主よりも資本家の利益の方が大事だというふうに考えた論文の結果を示したことに大喜びした。そして、努力してその考えをもっと広げて、大規模な形で書き直して出したらどうかということを、ミルはリカードに大いに勧めるのですね。

リカードは、自分は教育がないからできないって再々断るんだけど、ミルは、「やってみなさい。私が全部、書き直してあげるから、原稿、どんどん送ってください。」という。

リカードは、「できないけどやってみたい」という気持ちがだんだん高まってきて、やり始める。

リカードの困惑

それで、原稿を書いては、送ってきたのだけど、途中で原稿が止まって、送ってこななくなってきたのですね。

で、ミルの方は、「さては、リカードさん、怠けてるな」というわけで、問い合わせると、リカードは、「実は問題が起きて、行き詰まっている」と言うのですね。

それが、今言った話なのですよ。「それが、奇妙な話になったんだ」とリカードは答える。どういうことかっていうと、自分が学んだスミスの経済学以来、自分の知っている限りのイギリスの経済学—イギリスに限らずセーなんかも入っているので、セーはイギリスかどうかなんとも言えないけど—そういう経済学の知識によれば、賃金が上がれば物価は必ず上がるんだけど、自分の経済学の理論の考えを進めていくと、賃金が上がると物価が下がるっていう結果が出てくる。このような話は今までの経済学では見たことがない。

今は、「どうしたものかなって考えてる」と、ミルに説明するんですね。

それがどういうことなのかというと、実は、価値尺度っていうものは、すべてのものが金で計られるっていうことを前提とする。ここで金は、マルクスの言うところ、有機的構成が労働だけの下で作られるとリカードは仮定する。他のもの、金以外のものはすべて、道具なり、機械を使って生産するとリカードは考えるんですね。

その割合はみんな違う。マルクスの言うてしまえば有機的構成が違う。そして、金だけは労働だけで作っているから労働で尺度する。金で尺度するということは、労働で尺度するということになる。そうするとですね、賃金が上がると他のものの生産でもみんな賃金は上がる。けれども、金の場合は全部が賃金ですから、全部が 100% 上がるんだけれども、他のものは 99% から 1% まで、その範囲で全部下がってしまう。これは非常に奇妙なことになる。そういう結論を出す。

後にリカードは、金を中位にもってくるとどうなるか。プラス・マイナスを足すとゼロになる、というような話まで、第 3 版で展開するのですね。

それはリカードの場合は、主に、賃金の騰落による変動の話なのですから、賃金の騰落に関係なく一般的に考え直すという話になると、マルクスの生産価格論の問題になってくるわけです。

これ、実は、ジェームズ・ミルが、*Elements of Political Economy**¹⁰ですでにやっているのです。ただ、どこでやっているかを、今私は確かめられないのですが……。というのも、ジェームズ・ミルの *Elements of Political Economy* という本は、初版は 21 年で、第 2 版が 24 年。第 3 版は 26 年。3 回出ているんです。僕は、第 2 版に載っているのではないかって思っているのだけれど、それ、分からなかったんです。でも、武蔵大学がやっと最近になって、初版と第 2 版と第 3 版、全部手に入れたので、見ようと思ってたのですけれど、その前に私が定年になってしまったものだから、全部調べられないでいるのです。

それから、マカロックもそれをやってるらしいのだけれど、マカロックという人は、マルクスもよく読んでいし、ひどい悪口も言ってるのですけれど、マルクスが読んだのは初版、リプリントで我々が見られるのは第 5 版なんですよ。マカロックもすごく関係があって、なかなか確かめることができないのですけれども、それはともかくとして、ジェームズ・ミルのおそらく第 2 版で、その生産価格論、まさに生産価格と言っていると思うのだけれど、その議論を既に行っているのです。

ただ、ミルの場合は、尺度は貨幣なのですね。貨幣であってリカードみたいに金というわけではないのです。

貨幣が金であるのかどうか、何であるのか分からない。ただ、貨幣で計るということになっている。そこでは、その全体の労働の量っていうのは、構成が中位と下位と上位っていうように何種類かに分かれていて、それで多数全体として、量としては変化

*¹⁰ Mill, J. (1821,1824,1826). *Elements of political economy*. Baldwin, Cradock, and Joy.

はないという話を、リカード以上に明確に説いているんです。

まあ、そういういきさつがありますからね。

マルクスの生産価格論というのは、そういう経済学史の中で考えると、比較的理解しやすいということが、私のこうした経験の中に入っているのです。

生産価格論と転形問題

それで、マルクス経済学の話に戻りますけど、価値と価格が総計では合致するということについてのボルトキエヴィッチ、スウィージーの問題意識というのは、代数式を使って、連立方程式を解いて、総価値と総価格を一致させる。そこでは価値尺度に何を選ぶかによって、一致するかどうかは決まるという、そういう話になります。

有機的構成は中位に設定する。 $Z = 1$ っていう第三の方程式を連立方程式の中に挿入すると、それで X と Y の解決はできるんだっていう、そういうことだけなので、実は、そういう問題というのは、リカード学派がすでにやっている。

一応はそれなりに解いている。そういうふうに私は思っていたのですね。

スウィージーの問題意識を受けて、ウィンターニッツ、イギリスのウィンターニッツ、これは女性なんですけどね。まだ、戦争終わったばかりの頃だから、女性が発表するときにはイニシアルしか付けないんです。名前を書かないっていう伝統が残っていたのかもしれないです。昔は、女性は、小説やなんかでも、女性名だったら出せなかったのですね。19世紀の初めのものまでは、そうだった。文学界でもそうだった。その名残かもしれないけど、ウィンターニッツというのは女性です。彼女は、数学的に、古典経済学の論文を既にその前に発表してます。彼女が、スウィージーの問題提起を受けて、それについての応答から始まった論争が、*The Economic Journal**¹¹に掲載されていた。

それで僕は、玉野井先生から言われたときに、日本でこの問題がすでに取り上げられているのかどうか調べてみた。三本ぐらいしか論文がなかったけれども、そのうち二本は同じ人なのです。同じ人で、しかもそれは東北大学で、玉野井先生の後輩で、多分、玉野井先生と同じ頃その問題やってた人じゃないかと思うんですけど、多分その人。そして、もう一人の別な人もそうなんだけど、三部門でやるのはおかしいっていう話をしているのですよ。要するに再生産表式の話になっていて、二部門分割か、

*¹¹ Winternitz, J. (1948). Values and prices: A solution of the so-called transformation problem. *The Economic Journal*, 58(230), 276-280.

あるいは三部門分割かという、ちょっと全然話が違うじゃないかっていうのを感じたのです。それで、なんとか論文になるかなと思ったのです。私は、全然違った角度でやってみる。そして、価値の問題と生産価格の問題というのは、そもそも尺度の次元が違うのではないかっていう、そういう気持ちになった。

そういうことを頭にして、不十分ながらその方向への展開を目指して、当時話題の「転形問題」の解説とその評価を試みようとした論文を宇野先生に提出しました。

ただ、修士論文としては出せなかったですね。期限に間に合わなかった。だから、修士論文は結局、リカードについての論文を出すしかなかったのです。

リカードについての論文は最終日にぎりぎりで出したのですが、その後、しばらくして玉野井先生に先ほどの論文を持っていったら、「宇野先生にも読んでもらいなさい」と言うわれたので、「もう締め切り過ぎたから駄目だと思う」といったら、「構わず読んでもらいなさい」って言われた。その論文は副論文として出すつもりだったんだけど、間に合わない。

それでも玉野井先生は、「宇野先生に断わられても、読んでもらいなさい」って言われるから、恐る恐る持って行ったら宇野先生、ご機嫌よく、「じゃあ、読んでやろう」って言うわけで、読んでいただいたのですが、当然、論文の審査には関係なかったですね。

後で宇野先生はリカードの話をされていたから、リカードについての論文を審査してくださった。まあ、それは通ったんだけど、その後、修士になって博士課程に進級して、宇野先生の定年の最後の年だったのですが、ある時、例の論文を報告しなさいって言われて、生産価格の問題を報告させられたことがあります。

その頃、転形論争はあまり知られていなくて、皆さん初めて、価値と生産価格が合致するという当たり前すぎる問題が出てきたんで、びっくりして、終わった後に2、3人質問にきました。なんか、そういうことがありましたね。

その後、1957年、いや、58年ですね。いや、宇野先生の定年は58年3月だったかな。修士が終わった頃は、その一年前だ。何年でもいいんですけど、だいぶ、昔の話なんですけど、それはともかく、こういうことをいろいろ広げて行って、その後ドクター論文としてまとめて1966年に提出して、結局、学位をもらったことになるのですが、その後、鈴木鴻一郎先生に依頼されて半年の特殊講義をやりました。結構、聴講生が集まってくれて、大学院を出たばかりの若造としてたいへんに名誉なことです。東京大学出版会からその年の学実書刊行基金によりそれを『生産価格の理論』（1968）とし

て出版していただきました。部数は多くありませんでしたが、何回も印刷していただいたのです。うれしかったですね。

ここで、出発点がリカードだったってことは、結構、大きかったと思うんです。

さて修業時代の話が長くなってしまいましたが、本来のマルクスの話に入ろうと思います。

マルクスとエンゲルスの出会い

マルクスが経済学をやるっていうのは、これは予測ですけれども、1844 年からなんですね。

マルクスとエンゲルスが初めて会ったのは、1842 年です。ケルンで初めて会った。二人ともあまりうまくいかなかったというふうに、多くの研究書に書いてあります。二人ともヘーゲルの学徒だった、ヘーゲル主義者だったってことは確かだった。ただ、学派が違うのですね。ヘーゲルの後の学派の違い。そういうわけで仲良くなかったのだろうってことは、想像できます。

その後ですね。エンゲルスは 20 年生まれ。42 年というのは 22 歳の時ですかね。マルクスは 24 歳です。マルクスは、その後、社会主義の活動家としてヨーロッパをあちこち活動して歩き、その挙句各地を追放され、放浪するというか、逃げ場を求めてあちこちを移動しているのですね。

エンゲルスは、その頃は、ギムナジウムをやめて兵役に 1 年就いて、その後、ベルリン大学の聴講生になったりしてブラブラしていたわけですけども、父親に言われて、マンチェスターにある父親の木綿工場に 2 年間勤めるのです。その間にイギリスの状況をつぶさに観察して、経営も勉強していたのだらうと思うのです。父親のジョイントカンパニーで、共同経営者がいたのですけれども、そこに 2 年間いました。そして帰ってくる途中で、エンゲルスは、パリでマルクスと再会する。それが 1844 年くらいです。

その再会でマルクスとエンゲルスは意気投合して、それから終生の友になる。最初の出会いから 2 年後のことです。そしてエンゲルスはその 1844 年に、『独仏年誌』という、A. ルーゲとマルクスの編集する雑誌に経済の論文を書くのです。

『国民経済学批判大綱』^{*12}という比較的短い論文です。それを読んでマルクスは、非常

^{*12} Engels, F. (1844). Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie. *Deutsch-Französische Jahrbücher*. Paris

に感激したというふうに思うのです。感激したということはその時の記録に残っているわけではないのだけれども、マルクスはその後何度もいろんな本や手紙や、機会があるたびに何回も、「君の天才的な論述」をほめそやしているのです。だから、マルクスの経済学自体がその論文がきっかけになっているのです。

マルクスの経済学研究の形成

マルクスはそのすぐ後から、初めて経済学ノートを書き始めるんですね。最初はジェームズ・ミル、それからマカロックを取り上げまして、ノートをどんどん書き始める。

ものすごい勢いで書き始めるんですね。大体リカード派ですよ。ジェームズ・ミルというのはリカードの入門書です。マカロックも、リカード、ジェームズ・ミルと同じかそれよりもちょっと前に、すでにリカードを紹介していますからね。リカード派がここから始まっていると思うのですね。

ノートは幾つも残っています。1844年に書いたものが有名ですね。エンゲルスの論文などを含む抜粋ノートです。

それで、その翌年に、エンゲルスは、『イギリスにおける労働者階級の状態』という本を一冊また出したんですが、それは2年間のエンゲルスの研究の成果だと思うんですね。この二冊は、マルクス、エンゲルスというか、二人のマルクス主義の出発点ですよ。しかし、マルクスはまだ十分にはやってないのですよ、経済学の研究は。マルクスも、もちろんエンゲルスも結構論文を書いているのですよ。若いのに書いているのです。マルクスはエンゲルスよりもっと書いていますけど、みんな分厚い論文ですね。ほとんど哲学的な内容で、あるいは政治的な内容で、経済的な内容の論文はない。もちろん、『経済学・哲学手稿』であるとか、経済学の名前がついている論文もあるのだけれど、経済学的内容は実はないんですよ。プロレタリアートとかブルジョアジーという言葉はついていますが、内容は書いてないのですよ。名詞はついていますがね。だから、言葉は知っているんだけど、内容はほとんど知らない。哲学的な議論、政治的な問題を哲学的に論じるということはできるから、哲学的に自己疎外とかね、そういうことの議論はできるんだけど、経済学の話は知らなかった。それで慌てて、経済学の本を読み始める。これは1844年だと僕は思っているし、現に証拠もある。

証拠の物件はだいたい1844年から始まっているのです。それでマルクスとエンゲルスは急速に親しくなる。二人の共同作業というのが始まりますけれども、1844年から二人で、さっき言ったように仲良くなって、終生の交友関係が始まるわけです。その1844年の終わりころに『聖家族』を出す。これは共同で書かれた初めての共著です。

ね。ただ、その本は経済学の本ではないというせいもあるかもしれないけど、ほとんどをマルクスが書いている。わずかな部分を除くと 1 章だけしかエンゲルスは書いていない。当たり前だと思うんですけど。

それが 1846 年になると、マルクスはもう結構リカード、あるいはリカード主義、リカード派社会主義者を勉強して、1846 年には、プルードンが『貧困の哲学』で労働関係なんかの問題を書いているのに対して『哲学の貧困』というのを書いた。これはフランス語で書いている。皆さんご承知の通りだと思うのですが、それはもう経済学的内容になってますよね。リカード、リカード派社会主義者の考え方に基づいたプルードンの空想への批判。その後の「ドイツ・イデオロギー」の共同執筆とその中断されたまま残された事実もよく知られるところだろうと思います。それが 1847 年の前後の頃でしょうか、エンゲルスが「共産主義の原理」という簡単なパンフレットを書いたのは 1847 年です。マルクスは、『共産党宣言』を、エンゲルスの「共産主義の原理」を根本的に書き直して、共著として出す。それが 1848 年。1849 年になると、マルクスは「賃労働と資本」かな、前年にそういう講演をして、そしてそれを新聞に載せる。その中で労働力商品論、剰余価値論っていうのは、だいたいできたっていうか、7 割から 8 割はできたって言うてもいいのです。労働能力っていうようなことが初めて登場させてきて、労働と区別させる。

それで、さすがにマルクスもヨーロッパから追放されて、ヨーロッパにいられなくなっちゃった。それでロンドンに亡命するのが、1845 年の夏。

ロンドンに行ってから、生活が苦しいですからね、いろんな苦勞して、全部省略しますけれど、エンゲルスが伝えているように図書館漬けになって、1859 年になると初めて『経済学批判』という、経済学の立派な本が出て、その後 60 年になってからもマルクスの経済学批判のノート類が驚くほどどんどん書かれて、『資本論』第一部の発刊に至るわけなんですけど、その過程もここでは全部省略しますが、そうしたマルクスの経済学研究の出発点は 1844 年。その出発点は何なのかって言うと、私は、エンゲルスですね、『国民経済学批判大綱』だろうと思うのです。

『国民経済学批判大綱』の効用による需給調節論とカテゴリー批判

昔の記憶でお話ししますが、というのも『国民経済学批判大綱』ってどんなことが書いてあるかっていうのは、今日の研究会の前に読み返してくるってことは、正直できなかったのです。というのも、それが収録されている『マルクス・エンゲルス全集』しか手元に残っていなかったんだけど、その全集も数年前に人にあげちゃったからもうなくなっちゃったので読めなくて。

だから、昔の記憶なんですけど、今日の研究会のテーマに即して言えば、商品の価値というのは、そこではエンゲルスは確か「生産費」という言葉を使っていたと思うのですが、生産費で決まるというようにリカードは言うけれど、そうではなくて、商品の「効用」を中心とする市場における資本の競争、その競争の結果として市場価格で、その中心で決まると言っている。古い国民経済学の需要供給論では駄目だと言っているのです。ブルジョア社会の本質というのは競争にある。ところが新しい古典派の方は、価値（生産費）に本質があると言う、そうではなくて、価格は市場の競争で決まる、そっちの均衡価格の方が本質である。ブルジョア経済の本質というのはそっちの方にある。つまり彼らの意識は逆転してひっくり返っているのである。エンゲルスははっきり言っていないが、古い国民経済学の把握は極めて不正確だ、ということになるのでしょう。そのひっくり返しをもう一度ひっくり返さなきゃいけないのが我々の革命だ。我々の目指すのはもう一度ひっくり返していくこと。そういうことがとりあえず書いてある、と記憶しています。そのためにも新しい経済学の方のカテゴリーの批判的検討を徹底的に行っていかなければならないということになっているのですね。

だからこそ、マルクスが経済学の批判において一貫して追及していく問題になってくるということになる。マルクスは、経済学の問題というのを今までやっていなかった。リカードを勉強してプルドンの批判ができるようになった。さらに、そういう方向でずっと研究して、経済学批判は要するにブルジョア経済学のカテゴリー批判になっていくわけです。自分でそういうことをはっきり決めて、その方向でずっと一貫してやる、ということになっていくのです。そういうふうにして、価値の問題を取り上げ、商品の等価交換を問題にするのです。商品は実際には価格で交換されている。それが日常的な姿です。でも、その本質を明らかにするということは、同時に古典派経済学のカテゴリーの批判になる。マルクスの考えには、それがずっと一貫している。

ところがですね、今日の中心テーマなのですからけれども、それが途中で変わって来たということ、それが私の言いたいことなのです。どういうふうに変ったかっていうと、生産価格という考え方が途中で浮上してきた。マルクスは、今までそんなこと考えてなかった。生産価格というのは言うまでもなく価値ではなくて言わば価格です。そこが問題です。

もちろん、一般的に利潤率が均等化するとか、そういうことは分かっているのですよ。もちろん知っているんです。リカードを勉強したから、みんな分かっているわけですよ。いろんなことをどういう場合にどうなるかということも研究してわかっている。だけど、その「23冊ノート」と、今言われているノートですね。1861年から63年に書かれた原稿です。ところが1862年にマルクスはクーゲルマンという医者友人に対して手

紙を宛てて—クーゲルマン宛の手紙は何度かあって大事な手紙がたくさん残っているのですけれど—それらの手紙の中で、1862年の何月か忘れたけど、12月だったかな、自分の著書の名前を今『経済学批判』というのを考えていて、第1冊は出した。1859年にね。けれども、第2冊目は『資本論』という名前にしよう、「資本」Das Kapital という名前にしようと思っている、という内容を書いているのですよ。『経済学批判』から『資本』に改題したい、改題するつもりである、と。それは1862年の手紙です。

1859年に『経済学批判』の第1分冊として、現行の *Zur Kritik der politischen Ökonomie**¹³という文庫本で1冊ですけどね、それを出して、そこには「資本一般」の最初の部分だということが明記してあるわけですけど、それを『資本』と変えるんですね。その後は、『資本』にしたい。後の手紙、何時の時期の手紙かちょっと忘れてしまったけども、マルクスはずっとこだわってるんですよ。次は全部1冊で出したい。まとめて1冊で出したいというのは、1861-63年に書いた、いわゆる「23冊ノート」全部、それ以外の各部分含めて全部、全1冊で出したい、と。

我々の分かりやすい言葉で言えば、『資本論』の第一部から第二部、第三部を含めたその前の原稿、例えば今日『剰余価値学説史』と名付けられたような部分を含めた原稿、あるいは「直接的生産の諸結果」と名付けられたような部分も含まれるような前の原稿、これ全部一体なんだとマルクスは言っているわけです。分離されては困る。一体として出したい。

マルクスの「23冊ノート」

しかし、途中で考えが変わりまして、結局、今みたいに分冊でいいということになるんだけど、それほど「23冊ノート」に対するマルクスの思いには変化があるんだと思うのです。それは「23冊ノート」を書いている途中でそういう考えになってきたと思うのですよ。手紙の時期がちょっと1年ずれているから。

それで「23冊ノート」というのは、今、日本語の訳になっているのですが、私は、その日本語の訳をまだ全部は読んでいないんですよ。翻訳だけでも何冊にも分かれています。目星をつけたところを部分的に拾い読み程度したことはありますが、わずかな部分です。読んだとは言いきれません。もっとも、昔の記憶しかないんですけども、後半は『剰余価値学説史』ですから、以前に、目を通したことはありますし、繰り返し詳しく読んだところもだいぶあります。特にリカードに関連する部分です。でも、今度新しく発表されたところは、まだ手を付けたばかりで読んだとはとても言えないの

*¹³ Marx, K. (1859). *Zur Kritik der politischen Ökonomie*. Duncker Verlag, Berlin

ですが、ちょっと覗いただけでも刺激的で、大変に有益で役立ちました。

『剰余価値学説史』は、カウツキーが編集した『剰余価値学説史』しか僕は知らないんですけども、それは、カウツキーが、マルクスもエンゲルスも死んだ後に出したものだけれど、マルクスの原稿を年代別に編集し直したもののなのですね。ウィリアム・ペティから始まっている。しかし、「23冊ノート」では、マルクスは、ジェームス・スチュアートから始めているのです。だから一時刊行されていた新版『剰余価値学説史』というのは、マルクスが書いた順序に直したとあるから、ジェームス・スチュアートから始まっている。けれども、我々が昔読んだのは、ペティからケネー、そういう順序で並んでいたのですね。いずれにしても、新しく出た「23冊ノート」では、その部分も執筆の順序になっている。「23冊ノート」は、その時期のマルクスの原稿を集めて完全に執筆順に並べたものなのですね。その中には、生産過程論もあるし、現行『資本論』第三部に関わる様々な問題が未成熟のまま列挙してあります。いろいろ雑多に並んでいるのですね。よく読んでいるわけでもないのですけども刺激的です。それが「23冊ノート」の特徴なのだけれど。「23冊ノート」を読むと、いろんな問題がたくさん、めっちゃくちゃに並んでいる。範囲が「資本一般」のつもりだったのでしょうが、それは *Grundrisse* もそうなんですよ。ね。「資本一般」として書いているのだけれども、いろんな話を書いてあるし、個別資本相互の問題も書いてある。それから「競争」論の話も、ついでだって言って書いてある。

ノートっていうのはそういうものじゃないかと思う。我々もそうだし、思いついたことをどんどん書いていくから、整然としたものではないですからね。

それでもなお、「23冊ノート」っていうのは本当にいろんなことが書いてある。その中で特徴的なのはですね、僕も読んだけど、わけがわからないものがずっと、改造社版で読んでいるわけだから、昔ね。旧『マルクス＝エンゲルス全集』だから、とっても読むに耐えないような訳もあるし、厚いし、何冊もあるから大変なんで、勢い飛ばしちゃったから、本当に多くの研究者も十分読んでなかったせいもあると思うのだけれども、よく丹念に読んでみると、価値の生産価格の転化って問題に、マルクスは、もうすぐそこまで迫ってきていたのですよ。例えばリカードの地代論を説いて、ロートベルトゥスの地代論を結構長く説いている中で、絶対地代論の根拠をマルクスは見つけている。見つけるために、生産価格という言葉は使っていないけど、「生産価格」のような概念を用いると、価値と生産価格の差額に絶対地代の根拠があるということを見つけて、マルクスは喜ぶわけなんです。けれども、喜んではいても、生産価格を発見したことを大喜びするわけではない。もちろん手紙なんかでね、自分はかなり前進したと思う、と言っています。でも生産価格のアイディアは気に入っているようだが、ま

だ、あからさまに誇ったりはしてないのですね。

そういうところはそこだけじゃなくて、他にもあるのですよ。例えば、『剰余価値学説史』の中で、「市場価値論の形成」という欄がある。市場価値論の形成っていうのは、同一部門の話なんです。同一部門の競争によって利潤率が変わってくるっていう問題を、説いているのですよ。それから、同一部門の間の競争関係っていうのは、異部門間の競争にも及ぶのだ、とも。そういう話もすでに書いてある。だけれども、その先には進まない。

その先に進めば、生産価格の問題が当然ある筈なのですが、だけど、その先には簡単には進まないのですね。それはそのまま終わってしまっている。そこから第三部の原稿部分になってくると、現行の『資本論』の第三部では、市場価値論は第10章が出てくるのですが、第10章の表題というのは「競争」論ですよ。異部門間の競争であるかのようなことを表題につけているのだけど、書いてあるのは市場価値論の話です。しかし、市場価値論というのは、すでに『剰余価値学説史』でやっていたのですよ。ほとんど同じような問題をやっているのです。

どうして、そういうわずかの間しかないところに出てくるのか。誰かがそういうことを指摘したかということになると、僕が確認した限りでは、僕は他人の論文をあまり読まないせいかわからないけど、誰も指摘した様子はないですね。だけど、第三部の第10章でやっていることを、マルクスは、『剰余価値学説史』の中で結構細かくやってるんですよ。それは「23冊ノート」だから、少しずれてるのだけれど、大体、時期はあんまり変わらない。1年ぐらいの間に『資本論』第三部の原稿を書き始めていると言っているのです。今考えれば『剰余価値学説史』の中にも、同じように学べるものももっとあったはずなのです。

第三部のための原稿がどのように成立したかってことによるのだけど、そういうことはまだよく分からないですね。我々には分からないですよ。まあ、今はノート全部を見ている人には日本人もいるわけだから、そういう人に聞けば分かるかと思うんだけど、細かくは覚えてないだろうとも思います。やはり全体の構成の変化など。きちんとやらなければならないことが残っている。部分だけ見ても駄目なんです。

『剰余価値学説史』から読む生産価格論の形成

それはともかく、今でも、古い『剰余価値学説史』見れば、さっきちょっと触れましたが、生産価格のことは載ってるんですよ。繰り返しの余談になってしまうかもしれませんが、僕は、玉野井先生のお宅に伺ってるとき、カウツキー版の『剰余価値学説史』

ではない、モスクワのマルクス・エンゲルス研究所版の新しい『剰余価値学説史』がロシア語で出たという話が、伝わってきて、たしか『マルクス主義』というような表題の雑誌、クォータリーの雑誌だったと思うのだけれど、そこに、目次だけ日本語訳されているのを見たことがあるんです。で、その話を、玉野井先生のお宅に行ったときにしたら、「櫻井君、その目次の順序に従って、改造社版の『剰余価値学説史』を、新しい目次順で読み直してみると面白いんじゃないか、やってみようよ」と言われた。それで、僕は家に帰ってすぐに並べ直して、眺めて、その順序で読んでみた。それで結構、生産価格論がいかにしてできたかっていうのがわかったんですよ。

で、それを1962年くらいに論文に書いた。就職して間もない頃なのですよ。そしてそれから2、3年くらい経った時に、ヴィゴツキーっていうロシア人が、ロシア語でもっと前に書いた本らしいのですが、その日本語の翻訳が出ましてね、それを読んだら同じことをより詳しく、より正確に他の文献もたくさん利用して書いている。向こうの研究所の専門家だから、われわれには未知の文献も使って同じ問題を詳しく書いてあってね、同じような結論になっているのがすごく嬉しかったですよ。

伊藤（誠）君にそれから何年か経ってそのことを話したら、「櫻井さん、英語で書かないし、英語に訳してなくて良かったね」と皮肉を言われたことがあるんだけど。面白いものだなと思ったんですね。やっぱりね、丹念に追うとね。いくらでも種が転がっているなという感じがしたものです。

そういう話があったのだけれど、そういうことで、「23冊ノート」はいわば宝の山なのですよ。今でもそうです。しかし、だからといって「23冊ノート」でも『資本論』第三部が直ぐできたというわけではありません。むしろそこから、マルクスの第三部への苦闘が始まるというべきかもしれません。

さらに、しかも、色々のアイデアがでてくると、それらの関連がわかりにくくなるという事情もあります。例えば、「直接的生産過程の諸結果」を読むと、二つの剰余価値が、資本のもとへの労働の形式的包摂と実質的包摂というふうに対応させられてしまうので、それはそれなりに意味はあるんですけども、なかなか簡単なようで分かりにくい。

『資本論』第三部と「23冊ノート」

生産価格論というのは、「23冊ノート」のあちこちに散らばっているそういう要素がだんだん固まってきて、そして結局は、現行『資本論』の第三部の第9章でまとまるわけですね。

ところが第9章でまとまるんだけど、その前に第三部の冒頭でもって、有名な言葉があって、しばしば引用されるわけだけれども、第三部でやることというのは、今まで第一部、第二部でやったことを総括するということじゃなくて、全然別の話なのだ、とされている。別の話っていうのは、今までやってきたことを、もう一度形を変える、「形」っていうのは「フォルム」とか「ゲシュタルト」っていう感じなんだけど、要するに、同じ問題をですね、今度は別の形で、具体的な形で、繰り返すと述べられる。別の話ではないのだけれど、概念が具体的な現象として現れるということですね。自然科学で考えればすぐわかるけれども、経済学ではわかりづらい。価値といっても、概念的には把握できても、価格としてしか現象的には把握できないということなんです。『資本論』の第三部は、もう価値という抽象的な世界ではなくて価格の世界に切り替わっているのだということです。今まで価値の概念の領域で話をしていただけだけれども、今度は価格の言葉で話をするということだと、僕は考えている。

だから、それは、価値次元の話と価格次元の話とを、同じ領域の問題として俯瞰して、上から眺めていると考えてもいいけれど、同じ問題をもう一度見直すということになる。眺めると衣装が変わってるんだと。まだ制服着てたみたいなのを、今度は、全然別の個性的な衣装に変えて眺める。本来は、ハダカと衣装を着けている場合の区別でしょうかね。

「資本一般」としては区別がなかった。「資本一般」では、「資本一般」から一つを取り出してね、資本というのは一体どんなものであるかということ、一つをいわば代表的単数的に取り出して、それで資本とは何か、固定資本とは流動資本とは何か、不変資本とは可変資本とは何か、資本構成とは何か、それを一つ一つ取り出して概念化している。それらを基にして、せいぜい二部門分割で、生産手段つまり生産財部門と生活手段つまり消費財部門とに分けるという程度以上になかった。個別資本として扱ったことはなかった。ただ今度は、それが個別資本としていかに全体をまとめて論じ直さなければならないかというのが第三部の問題となるのです。この方法はヘーゲルの「論理学」に明らかに由来しているのですね。

それがマルクスの意図するところだろう。それを第三部の冒頭に書いたのではないか。

宇野理論と鈴木原理論

宇野さんはせっかく流通論というのをわざわざ設けて、価値論から商品における労働の価値実体を抜いて、ああいう形にしたのだけれど、その生産論・分配論は、結局、価値の話になってしまっているんですね。肝心の生産価格論を剰余価値の配分論にしまっている。これはマルクスが悪いのです。マルクスは折角自ら第三部の方法は

こうだと言っておきながら、その説明の最初で躓いて労働量で「転化」を説明してしまった。また、回転の問題を後回しにして有機的構成の変化だけで説明したためにその印象が強すぎたのかもしれないと思いますが、総資本と平均利潤との関係が希薄になってしまったように思うのです。まあ、それはそれとして、後でまた、問題にしますが、とにかく、宇野さんもヘーゲルの「論理学」と『資本論』の関係をよくわかっているから、分配論も、「費用価格と利潤」という形で正しく受け止めて出発しているのだけれども、そのあと徹底しきれなくて剰余価値の分配論になってしまう。そこはやっぱり不十分だっている話になって、宇野さんは、僕が修士論文で相談に行ったときには、ある程度は納得してくれたのです。しかし、そのあと『資本論研究』*14なんかで、先生とは続きをやったのだけれど、どうもそういう話が宇野先生とうまく噛み合わなくて、本当に言って正直ずっと困ったものだって思ったのだけれども、あんまり旗色を鮮明にできなかった。「ゼミナール」*15も後で先生が手を入れられたのです。その部分の録音テープは編集者から僕がもらったのだけれど、残念なことに、引っ越しを繰り返しているうちにどこかで紛失してしまった。

結局、そういう考えは、ちょうど宇野先生が定年で、宇野演習生はほとんど私も含めて鈴木鴻一郎演習に移動した関係もあり、宇野説を支え文献で考証的に強化した理論集団も、岩田弘さんを通じて、宇野さんから鈴木原理論（鈴木鴻一郎『経済学原理論』）*16に行ったから、鈴木原理論の下巻の「総過程論」だと思われているけど、本来、根は宇野『原論』にあったはずなのです。でも、宇野理論としては、僕もやや方向がずれていたし、だれも「分配論」としては成果を受け継がなかった。鈴木原理論としては、そこそこ不徹底なままになってしまったのですね。そういう問題は、これ以上は触れませんけれども。

マルクスの生産価格論

そういうわけでマルクスの場合に、生産価格というのは、『資本論』執筆の最初の時期にはなかったのです。問題はもっぱら価値であった。そこに生産価格というのを入れると、それまでに自分の価値と価格でいろいろやってきたのに、逆転を暴露するっていう形でカテゴリー批判でやってきたのに、平均利潤という問題が入ってくると、それをどうするかっていう問題に引っ掛かっちゃったのですね。リカードは価値の修正論で切り抜けようとした。マルクスはどうしていいか分からない。価値と価格の総量で見れば同じだ。真ん中はともかく総量で見れば同じなのだからいいじゃないかと。

*14 宇野弘藏編. (1967-1968). 『資本論研究』I-V. 筑摩書房

*15 宇野弘藏. (1963). 『経済学ゼミナール』1-3. 法政大学出版局

*16 鈴木鴻一郎編. (1960, 1962). 『経済学原理論』(上・下), <経済学大系 2・3>. 東京大学出版会.

古典派だってそうやっているじゃないかと考えるのも自然なような気がします。例えばですね、現行の『資本論』をみると価値論のところですね。価値論って言っても最初の方ですよ。価値形態論のあたりを見ますとね、第三部にも繰り返し出てくるのですけれども、例えば、競争によって社会的労働配分ができるということを価値の次元でもって話をしているのです。それは一体どういうことなのか。

まだ生産価格の話をする前に、価値の次元でもって、それと同じようなことを、例えば重力の作用と同じだというようなことをしきりに言うわけですよ。その場合に、一体どういうふうにしてそれは可能なのか。例えば、価値の次元では、資本の有機的構成が同じだという状況の中で競争して、そもそも競争が可能だとした場合の話ですが、果たしてそういうことが可能なのか。それとも、その場合には、あらかじめ価格の次元というか、利潤率が不等だという条件をひそかに前提して議論しているのか。そういうところがはっきりしていないのですよね。もしかしたら個別資本の違いということをすでに想定して言っているのかもしれないですね。

だから、こういうところを読みますと半分くらいは、第三部の価格論だという話を前提にして現行の『資本論』の中で書いているところがあるし、まだその話に入る前の段階であるために、等価交換という頭で考えている。それがそのまま残っている。混在しているような気がするのです。

一番端的なところはですね、ちょっと短いから読んでみましょうか。冒頭ですよ。価値論がまだ、価値形態論に入る前ですけど、こんなことを書いてるのです。「研究の進行は、我々を価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値に連れ戻すことになるであろう。しかし、この価値は、差し当たりこの形態には関わりなしに考察されなければならない」とありますね。価値という言葉と交換価値という言葉は分けているのですね。

交換価値、使用価値そして価値

ちょっと、話がわき道に逸れるかもしれないけど、マルクスは、商品の概念、商品の二要因というのを言う時に、使用価値と価値、使用価値と交換価値、二種類あるんです。

『経済学批判』では、使用価値と交換価値。それは実は、経済学史の流れからすると正統なんです。ご承知のように、アダム・スミスでは、価値というのは二つに分かれる。Value in Use、Value in Exchange あるいは、Useful Value と Exchangeable Value に分かれる。リカードもそう言っている。そのスミスもリカードも、交換価値 Exchangeable Value と言った場合には、将来の価値を指しているのですよ。交換

価値は、今の価値そのものを指しているのではなくて、未来の価値を指している。価値そのものを指しているのではなくて、交換価値というのは、購買されるかもしれない将来の市場での期待の価値の大きさを指しているんですよ。

ただ、リカードは、マルクスなんかより正確ですから、マルクスよりもはっきり言っているから、分かりやすいのだけど、リカードは、ただ、交換価値と言っただけじゃ、今言ったように、そのものの現在の価値を表しているわけではないから、さらにそれを表すタームが必要だという。そのためには、もう一つ、絶対価値とか、真実価値とか、Positive Value だとか、いろんな言い方がありますが、そういう言い方が必要だ、というわけです。価値は三種類あるんですね、リカードには。使用価値と、交換価値と、真実価値。他にもその言い方はいっぱいある。時にそれが混ざっちゃうんですね。

マルクスもそうです。マルクスは、『経済学批判』では、商品の二要因は使用価値と交換価値です。価値って言葉は、出てくるけど、あんまり出てこない。ところが、マルクス自身が最後に出したフランス語版の『資本論』を見ますと、三つ書いてあるんです。使用価値と、交換価値、あるいは、厳密な意味での価値。「あるいは価値」という言葉の次にカッコがあって（価値実体、価値量）、というふうに書いてある。

現行『資本論』には、皆さんご承知のように、気が付いているかどうか分からないけど、商品の二要因という見出しがついている。商品の二要因、使用価値と価値と書いてある。価値の後に、カッコがついていて、価値の実体と価値の量と、わざわざ書いてある。しかし、その他に、価値、交換価値という言葉もあるのですよ。

先程読み上げたように「研究の進行はわれわれを、再び、交換価値につれもどす」って書いてある。「差し当たり価値の問題に、ここでは限定する」とも書いてある。細かいけれどもなかなか面白いですよ。

例えば、『資本論』の初版を見ると、最初は使用価値と価値と言っていて交換価値という見出しはないんだけど、途中から、交換価値って言葉が出てくるんです。これからは全部、交換価値に統一するって、そういうふうになっているのですよ。

価値と交換価値の使い方がね、マルクスは少しめちゃくちゃっていうか、読んでる我々もね『経済学批判』読んだり、『資本論』の初版読んだり、フランス語版読んだり、現行版読んだりしていると、毎回頭が混乱しちゃって、何が何だかわからなくなる。

ただ、言いたいのは、交換価値っていうのは、要するに市場に提示される価格になるのですね。それ自身の価値の大きさを表してないのです。要するに生産価格っていうのは、そういう価格なんですよ。他の商品量で表示された当該商品の価値量にすぎな

いのです。労働で表されている量ではないのです。マルクスが価値形態論で言ったのもそのことだと思うのですが、それなのにマルクスはわざわざそれをぶち壊して、再び労働量に還元して貨幣を含めた等価交換だと追加説明したりしているのですね。

生産価格は価格形態である

実際、ローゼンベルグの『資本論注解』は、戦前から戦後にかけて有名だった本ですけど、その戦前に出たローゼンベルグ、いわば、スターリンのお墨付き、スターリンに後に批判されるんですけど、お墨付きだったって言うんですけど、それには、生産価格って価格だと、わざわざ書いてある。でも、価値を修正した、労働時間を修正されたってことは、残っている。なにか矛盾していて筋が通らないのですけども、一体、どう考えたらいいのか。だから、今言ったように、交換価値に戻るといふより、価値は、価格の世界に戻りますよ、研究の進展とともに戻りますよ、ということですね。同じような言葉はですね、もう一箇所あるんですよ。それは、ちょっとここで探るのが面倒くさいんですけども、ここはね、価値形態論の直前のところにあるんですよ。ここでは「価値の現象形態」に戻る、と書いてある。

そうすると、価値っていうのは、何なのかっていうことがわからない。価値から生産価格に転化するっていうのはどういうことなのか。マルクスによれば、先ほどの『資本論』の表題にあったように、価値とは明らかに価値の実体（社会的労働）を指しています。

ある労働量から別の労働量へ変化するっていうのは、わかりやすいですね。だから、入門書だったら、剰余価値が平均利潤に転化することによって、その商品の生産に投じられた労働量が例えば 130 時間から 120 時間になる、110 時間から 120 時間になる、というのはすごくわかりやすいから頭に入りますけど、マルクス流に、労働量が価格に変化するというのは、正直何のことかわからない。マルクスは『資本論』の中では、労働時間量だったり、価値量だったり、急に、貨幣額になったり、変幻自在ですが、厳密にはそうはいきません。

労働量というのは、だいたいどうやって測るのか。マルクスは平気ですよ。生産力は日々変化する。我々は日常に、それを目の前で見ている。そのうえで、マルクスは、だからとりあえずここでは、それは（労働量の測定は）我々には関係がないと言う（言っていると思うのです）。労働で測るって言うておきながら、なぜその測定の仕方が、我々には関係ないって言えるのか。

リカードの方は苦労しているわけですよ。なぜ、金で測るのか。金は有機的構成一定

で、直接的な尺度、労働を尺度、内在的な尺度とする労働と、それから、外在的な尺度とする金、それらを統一しておけば間違いないだろうってわけですけども、だけど、さすがにリカードだから、何も使わないで労働だけで金ができるという想定は、如何にも不自然だと考えるでしょう。

そうすると、一体何で尺度したら良いのか？ 不変の価値尺度とは一体何だろうか？ リカードの研究テーマは、不変の価値尺度を求めることになってしまうのですね。マルクスの『資本論』初版は、不変の価値尺度を求めようとしても求められないって、リカードに引きずられてはいるんですけどね、求められないという。

けれども、リカードの労働価値説は、だから 93% の労働価値説だって後世に Stigler に皮肉られちゃうんだけど、当時のリカードは困っちゃって最後は投げ出しちゃう。資本の構成は絶えず生産性が変化することで変化する、だから手の出しようがないっていうのが、リカードの結論ですよ。

それは、価値尺度として労働で測るっていったって、労働で測りようがないということの意味する。日々変化している、生産性が変化してる、だから無理だっていうのは、マルクスだって、それは「さしあたりここでは関係ない」と言っているんですけど、そういう問題が絡んでる。

それでは労働価値説とは何のためにやっているのかっていうことになる。まあそれはともかくとして、そういうふうには生産価格論がそこに入ってくるものですから、マルクスは困ってしまう。そうすると、労働価値説っていうのはどう考えたらいいか？ 生産価格が入ってこなければ、生産価格のことを考えなければ、まあカテゴリー批判で一貫してできたかもしれないけど、生産価格が出てきちゃったものですから、それを果たしてどう処理したらいいのか？

それを、剰余価値が利潤に一致するとするの、まあいいかもしれない。トータルで一致するって言ってもいいかもしれない。量で一致するかどうかっていうのは別として。

結局のところスミスが言った労働は *toil and trouble* っていうことだったから、労働でも測られるっていうのもごく一般的な規定としてはいいかもしれないと思うのですね。

マルクスも『経済学批判』では、『資本論』の初版でも第三版でも言っていますけれども、商品が交換されるときなぜ交換できるのか、偶然でしかないんだっていうふうを考えるけど、交換がしきりに行われると、いったんなぜ交換ができるのかって考える。考えるうちに、まあ労働が交換に関係しているかもしれないと考えるようになる。し

かし、工場制に基づく機械制大工業ができると、交換比率を定めるものは労働に間違いがないということが分かる。その次の結論はですね。現行の『資本論』を読むと、商品から使用価値を捨象すれば価値になる。そういうふうな結論になってしまうのですね。だけど後になって商品の二要因と言った場合に、価値というのは、目に見えない概念規定なのです。

ある商品の交換価値が目に見える形をとるのは、それと交換される他の商品の一定量としてだということは理解できる。例えば、ある商品の交換価値は上着の着数で測られる。交換価値としては、ある一定の使用価値量で目に見える形になる。だから商品の二要因というのは、使用価値と交換価値って言い直すのですね。そしてまた、マルクスはいろんな理屈を言って納得させようとするのだけれど、ちょっとよく分かんないですよ。

イギリス人は、wealth というのは目に見える価値になるものであって、目に見えないそういうものは value という。そういう名付け方がイギリス流だなんて、マルクスは言ったりしますが、まあ、博識なエンゲルスもいろんなこと言いますが、価値と交換価値を使い分けながら、難しい、価値っていうのは内在的なもの、交換価値っていうのは見えるもの。そういう考えが基本なのですね。

それはもう、リカードもちゃんと言ってることなんです。そして、その価値を規定するのは、内在的規定としての労働時間だっていうふうに言っている。ただ、労働時間で尺度するっていうように言っているわけではなくて、商品価値を規定するのは労働だが、尺度するのはあくまでも外在的な尺度となる。

マルクスは、諸商品の価値があたかも内在的尺度としての労働で測れるかのように言うのだけれども、労働の生産性の変化というのは日々日常的に繰り返しありますから、現実的問題としてはそれを取り上げることは不可能でしょう。

生産価格と価値の次元の相違

時間が1時間半ぐらいでやった方が良いついていうご意見があるから、あと30分ぐらいいただいて、なんとか話を続けたいと思います。

まあ、そういうわけで、生産価格というのは、価値との考察の次元が違う。そうすると生産価格で、価値って言ったり、何ポンドって言ったり、何労働時間って言ったり、マルクスは、そういうことは使い分けしながら説明しているのだけれども、結局のところですね、それは全部価格の話に還元してるんだ、価値のことを価格に還元してるのだ、というふうに見えるのですね。資本価値も、不変資本も可変資本もその価値

はすべて費用として価格で計算される。投下資本は費用価格の総額としての総資本として、剰余価値は、総資本に対して配分される平均利潤としてその性格を変えて登場する。ただ本質が見えるわけではなく姿態（Cestalt）が変化するのだ、ということなのです。

マルクスは、内在的な考察、あるいは、内的な法則、そういう言葉をしきりに使うようになっていく。今は詳細な索引ができていくだろうから、語彙索引を利用すれば、『資本論』の中のどこで何という言葉といっしょに使っているかは、検索できるのかもしれないんですけども、できれば、さらに、どこでいつ頃から使われているのか知りたいと思うのですが、もし、そういう「内在的」なとか「内的な法則」、そういうものは価値の次元の話で、それと別に価格次元では、というように対応して使い分けられているいい表現でもあれば、それは、ある程度意味があるんだと思うのですが、なかなか見つかりませんね。

実質的に「資本一般」といった場合には、全部同じ内容を各資本みんな平均的に持っているという前提で、資本を一個取り上げて、そして資本総体の内容を代表させているわけですね。

剰余価値っていうのは、社会的一般的な問題ではあるけれども、資本を一個取り上げて論じることでもありますし、不変資本、固定資本とか賃金の問題もだいたい論じることができる。

生産手段と生活手段の違いがもちろんあるから、それは区別しなければならない。しかし、二種類の区別だけでいい。資本家の直接的消費という問題もありますが、それでなんとかだいたい説明できる。

だからマルクスが、第三部の冒頭で、ここでやるのは第一部や第二部で行ったことの反省ではない、全体のすべてを個別に分解して改めて具体的な形にして資本主義生産の本質を叙述してみせることだと言っているのは、そういうことの結果なのではないか。今までは、内的な法則、つまり見えない、我々が現象世界では見られない、我々が顕微鏡や試薬では見えない価値、それを自分の頭脳の抽象力を使って、抽象力で極め尽くして見てみて、普通の人には分からないところまで観察すると剰余価値という概念が浮かんでくるし、あるいは、我々が価値として論じてるような問題が見えてくる。ただそれは重さや長さを考えればわかるように尺度がなければ具体的にその存在は確かめられない。商品の価値は、その大きさを尺度する貨幣と価格があってこそ初めてその存在を、人は知覚できるのです。マルクスが『資本論』冒頭の価値論で縷々説明しているところです。

価値は、普通にはわからない、価格ならすぐわかる。その価格を分析して研究しているからこそ、その本質が透視されて見えてくることになる。価格の方はあくまでも現象的な世界なので、価格の世界のことについてはだれでも見ることはできるわけです。

その違い、それが科学的な分析の成果で、それが『資本論』第一部と第二部の世界、そうして第一部と第二部の世界と言っても、第一部の冒頭の商品や貨幣の世界というのは、またそれと区別しなければならない、というのは、だんだん気が付いてくることになると思うのです。マルクスもね、『経済学批判』（1859）ではっきりさせたと言っ

て良いし、宇野さんのいわゆる流通論の世界がまさにそれを明確に示していますね。
Grundrisse でも Arbeitsgeld、あれは貨幣論ですよ。貨幣論と言ってもいわゆる貨幣論ではなくて、社会主義者、フランスのブルードン主義者ダリモンが言ってる労働貨幣について、マルクスが批判的に取り上げて、それを批判してるところから叙述は始まって、その前に有名な「序説」があり、その「序説」でいろいろなことを論じてるわけですね。

あの「序説」は、僕に言わせれば、ジョン・スチュアート・ミルの方法論を前提にしてる気がする。でも、それを僕が指摘しても、誰も全然相手にしてくれないのですが、そう思ってるのです。

ところで、このダリモンのところは、貨幣論だって言えば、貨幣論から始まっていると言え言えないこともない。その後、商品の形態をちょっと論じてから商品形態から資本の G-W とか W-G とかの資本形式を論じていると言っても過言ではないから、流通論的世界の話から、それに続く生産論に向かう話を、そういうふうに行っているという、そういう形式をとっていると言えないこともない。

「資本一般」ですよ、主題は。それで、その後の「23 冊ノート」も、そういう形で登場している。それから、1859 年の『経済学批判』になると、もちろんその前に書かれた「経済学批判・原初稿」を経てですが、突然ですね、「商品・貨幣」論が明確な形をとって登場してくる。完全に、今までと違った、「資本一般」の考え方と違った、そういう流通形態、「商品・貨幣」論の一般的な独立の姿ですよ。

あと、「貨幣の資本への転化」論は流通論か生産論かどっちに入れるかというのは難しいところだけど、商人資本とか貨幣資本を入れれば、流通論に入るかもしれませんが、マルクスの *Grundrisse* では、どっちに入るか分からないですね。

労働力商品というのが前提になれば、またちょっと違う扱いになるかもしれない。そのためには、まあ、原蓄過程というのが必要で、原蓄過程というのは蓄積論に入るか

ら、後の方にならなければ出てこないことになる。いろいろなこだわりがありますから、なんとも言えないけれど。

また構成の問題がやや明確になってくるのがやっぱり、『経済学批判』以降だろうと考えているのですけど。やはり、プラン問題に固執する、あるいは、マルクスの言ったことにあまりこだわりすぎていると、実際の展開とのズレが出てくるし、特に『資本論』の展開ということになると *Grundrisse* 段階での「経済学批判体系」のプラン問題を論じているのではちょっと論じきれないような、そういう新しい別の側面が出てくるように思うのですね。

そうかと言って、「23 冊ノート」で『資本論』の問題が全部出てきているかという、そうでもない。

僕に言わせると、いわゆる『剰余価値学説史』と言われているような部分で、マルクスは、リカードを徹底的に読み返す。そこで出てきたのが、やっぱり地代論、それから価値論、生産価格論ですね。そこが結構、決定的になっているのではないかと思うのですね。

『資本論』とリカード

ついでに言っておきますけど、マルクスが当初の「経済学批判体系」プランを『資本論』の構想に変更していく過程で大いに役立ったのは、形式の話は別にして内容的にはヘーゲルじゃなくて古典派経済学、特にリカードだろうと考えているんです。

それまでのカテゴリー批判による逆転という方法は、ヘーゲルの方法とは大きな方向として一致していて関係あるかもしれないけれども、いわゆる三つのトリアーデという形ではないですね。

つまり、関根友彦さんがよく言われるような、論理学としての体系のことです。あのトリアーデ、第三部の概念論、それから第二部の本質論、最初の有論。まあ、そういうところは哲学の知識のない僕のような人間にとって、とっても難しいですね。

私は大学院に入った最初に、価値形態論を宇野先生に学んだんだけど、そしてあの時も議論したんだけど、始元論 *Anfang* を何にするか。Sein なのか、Dasein なのか。宇野さんが価値から始めるということだから、Dasein。それに対して哲学者たちや、正統派の人たちは、みんな Sein から、つまり *Anfang* の使用価値から始める、というわけですからね。

ただ、伊藤（誠）さんが、最近、使用価値から始めると言っている、最近でもなくて最

初からそうなんだけど、彼は、使用価値から始めると言っているんだけど、まあ、僕の方は、どちらから始めていいか正直よくわかんないですけど、使用価値から始めると、交換価値というのは、あるいは宇野さん流に言えば、交換価値と使用価値と言うべきで、価値と言うとですね、なかなか難しくなっちゃうなあ、というふうな感じがしています。価値というのは概念でしかありませんから、商品の二要因と言っても、中の見えない要因は要因とは言えるのかな、というように僕は考えますからね。

だけど、とにかく、そういうふうにトリアーデにしてですね、商品論、貨幣論、流通論の世界、それから本質論というのは剰余価値生産、価値の実体の世界で、概念論ということで、抽象的世界から再び当初の現象世界により複雑で具体的な形で戻ってくる。本質を経由して現象に戻ってくるという、そのヘーゲルの論理学の、まあ、目次だけみたいなものですけど、そこに内容は無いと、僕はいつも言っていますけども。まあ、そういうことで、その形式が利用されたかのように見えているだけ。ただ、マルクスは、その中身は、資本を主体とした経済学の体系の叙述ですから、全然ヘーゲル的な論理だけで内実のない表現のものではないのですね。でも、そういう形式の中で経済学が生きてくる。

宇野先生も、その形式は、流通論、生産論、分配論で踏襲されているわけなのですが、内容的には『資本論』を踏襲している。『小論理学』の目次に合わせて、ご自分の『経済原論』の目次を重ね合わせる「遊び」も残されてはいますが、本気ではない。ヘーゲルを踏襲されているわけではない。むしろ、マルクスが、観念論をひっくり返したところを、踏襲している、というわけです。

そういう哲学的な議論は、私は知識がないから分からないけれども。岩田弘さんとね、昔話していて、やっぱり、「マルクス『資本論』は「リカードですね、リカードですね」って二人の意見が大いに盛り上がったことがあるのですけれども、僕も、本当に内容的にはリカードによっていると思うのです。ただリカードの平板な演繹的な方法の限界を打ち破ることができたのは、間違いなくヘーゲルの弁証法的論理の大きな役割でした。そこがすごい。

有機的構成の問題にしても、相対的剰余価値の問題にしても、平均利潤のもとらす生産価格の問題にしても、みんなリカードがひねくり回した問題を拾い上げて、完成させることができたかどうかは別として、とにかくまともな問題にして、形を整えたらマルクスようになる。しかも、マルクスは生産価格論の解決に問題をとどめていたわけではなく、商業利潤論や利子論や、もっとずっと先まで経済学の視野を広げているんですね。

だから、マルクスの生産価格の問題というのは、いろいろ考えて、ほとんど完成させたのだけれども、完全には成し遂げられなかったということが、現在、教科書的に示されているマルクス経済学の解説書の実産価格論に示されているではないかというのが、私の言いたいことで、繰り返し言っているので、結論的にはお分かりだろうと思うのですけれども、そういう内容なのですね。内容についても既に、僕は、ある程度は以前から述べているということではあるのですが、説明が分かりにくく十分ではないし、今でも十分とは思っていません。自分でも、よく説明できないのは、理解が不十分だったのだらうと思います。方向は間違っていないので、少しずつ進歩もあったと思っています。

後の方でお話ししたいと思っていたのですが、時間が意外になくなってしまったので、一つだけ指摘しておきます。いろいろ関連する文章を種々の文献から引用する必要があるのですが、この場所ではちょっと大変かなと躊躇している間に、時間が無くなってしまいました。

ここでは要点だけにします。いずれ、論文に書いてお渡ししますので一月ほどお待ちください。

要点は、マルクスが『資本論』第三部の第2篇第8章で、繰り返し強調していることなのですが、それは、資本家が可変資本つまり賃金を労働者に支払うと、労働者は、必ず必要労働以上の労働をするということです。つまり剰余労働を提供しているということです。マルクスはその必要労働を超える労働が剰余労働のすべてとは、はっきり言っていることはありませんが、可変資本を必ず超えるということを繰り返し強調しています。マルクスは労働者の労働日が一定であり、剰余価値利率も一定であると前提していますから、特定の部門で、剰余価値率が資本の有機構成の違いによって変化することはありません。また労働者は生産部門において労働をすでに提供しているのですから、労働者の労働の部門間の移動などありえません。剰余価値の平均利潤への「転化」によって労働者の提供する労働の量に変化することもあり得ないはずです。生産物は同じものですからね。つまり、資本家は賃金を支払ってその生産物のすべてのいわゆる「価値」を手中にしたのです。ただ、それを商品として売るについては、市場において生産価格で売らなければならないというわけです。つまり僕が言いたいのは、ここで、マルクスは自らの説明の途中でリカードの価値修正論に一瞬戻ってしまったのではないかということです。でも、さらに、結論を手短かに言っておけば、にも関わらずマルクスは結局、自らの本来の主張に戻って、次のようにまとめています。つまり、有機構成の高度化は生産性の向上をもたらし、生産量の拡大、投下資本量の増大を促す一方、固定資本や流動資本の回転を促進し利潤率を上げ、同じように投下資

本量の増加を促す効果がある。それぞれの要因が一定の期間に効果を互いに出し合っており、しかも社会的な需要の変動に伴って無数の資本が部門間を移動していると考えているのだから、ある一定の期間内に各資本に配分される平均利潤、すなわち一般的利潤率は、ふつうの場合には大きく変動することはない、と、とすれば、たえざる利潤率の変化の中で、価値法則の貫徹という方向で、あたかも自然界での重力の法則のように、作用するということです。もちろん、ここでマルクスの頭にあることは次篇の「利潤率の傾向的低落」問題にあることは言うまでもありませんが、ここでは論じる範囲を超えています。

以上、この講演ではこれ以上詳しくは論じませんが、僕の新しく加えた主張のポイントをここでは一つだけを紹介しました。

なおそういう理解が「転形問題」に及ぼす結果などを含めて詳しいことは、後日『資本論』本文からの引用など加えた論文の形で近くお届けします。不手際をお詫びします。

マルクスと経済学原理

それで、ちょっと戻って、お話を続けて、終わりにすることにしますが、マルクスは1862年の手紙の中で、これから出版予定の自分の本がイギリス人の言う『経済学原理』にあたるといっています。これなどを見ますと、そういう「原理」というものをマルクスも書きたかったのかなという気がしているんですね。個人的な感想かもしれない。ただ、この手紙の中で、自分が今まで書いたものは、イギリス人の言うところの『経済学原理』の中の主要な一部を成している、ということを行っているのは事実なのです。

それから同時に、続きの一部を成す「競争論」とか「信用論」というところは、英語で書いてみようかな、ドイツ語ではなくて英語で書いてみようかなという言葉も、確かマルクスからエンゲルスに宛てた手紙の中で、漏らしているんですね。だから、マルクスは明らかに、イギリスの、イギリス人の書いた『経済学原理』というのに挑戦しようとする意欲を自分でも持っていたのかなと考えて、ちょっと面白いのです。

それで、地代論もついでに加えるつもりだという言葉も、どこかに書いていたと思うんです。どこに書いていたかはちょっと記憶がないからはっきり言えないのですが、確かそれは絶対地代を発見したから、地代論を入れるのだという気持ちだろうと思うのです。

本来的なプラン問題から言えば、地代論というのは土地所有としてずっと後に出てくるはずなのです。土地所有という問題は、絶対地代に関わりがあるはずだから、後に

出てきてもおかしくないのだけれど、地代論を入れるつもりだということを、確かエンゲルスへの手紙で漏らしていたような気がするのです。

そういう点で言えば、完全に、古典派のジェームズ・ミルとかリカードとかマカロツクなどの「経済学原理」に、目次的にはかなり近いものになる。そういうような発想になっていたのかもしれないという感想も持ちますね。もちろん、「資本論」をそういうものにしようと思ったわけではないでしょうが、対抗的な、それを克服してやろうというような意気込みは当然あったのかなと想像するのです。

1850 年からロンドンに亡命したマルクスは本当に驚くほど精力的に努力したと思います。50 年代から 20 年ほどのわずかの期間の彼の仕事ぶりを見ればわかります。そのことをここで改めて言う必要はないでしょう。実際は、裕福に育ちそれまで経験のない外国での貧困の中での家族の不幸、家庭的な様々な問題、そして多くの健康障害など重なって、1883 年に病没するまでのマルクスの晩年は、悲惨で、仕事もできなくなって、歳のせいもあるでしょうから、無理ではありませんけれども、幸せな生活をしていたとはとても考えられないのです。奥さんも娘さんも、そしてマルクスご本人も結核が死因と伝えられています。『資本論』が未完成に終わったのも無理はなかったように思えます。

マルクスの労働価値説

それで、また話に戻りますけど、なぜマルクスが労働価値説に固執していたのかという話を、最後にちょっと述べておきたいのですけれども、昨日、お配りした配布資料にも書いてあるのです。それは、やっぱり資本主義社会というものを、唯物史観でいう一社会、人類社会の一区分としてその中に入れたということに関係します。それはそれでいいのですけれども、資本主義社会というのは、ってあまりにも特殊な社会ですよ。資本主義社会というのが極めて特殊な社会は、人間が支配してない社会、人間の社会ではあるのですけど、商品の世界なんですね。人間が疎外されて、人間にとって外的な商品というものの価値が人間の方を支配しているという構造を持つ社会になっている。商品というのは、人間が生み出したもののなのに、人間を支配している。

人間を非人間である商品が支配する世界。人間によって動かすことができない、そういう客観的な対象性を持っている、そういう社会なもんですから、具体的な複雑な歴史的社会的全体を覆うってことはできない、一部分しか覆うことはできない。歴史的にもそうだし、客観的にもそうになってしまう。対象の限定が必要だということになりますね。

実際問題として、資本主義社会っていうのは、国家なくしては存在したことはないだろうと思うのです。国家と言わないまでも、何らかの政治的規制がないと商品経済が成り立たない面があります。一定の道徳的配慮も必要でしょう。すべてが経済法則でうまくゆくはずありません。だから、純粹の資本主義というような設定が十分かどうかは別としても、そのような対象設定が、科学としては必要になるわけですね。経済学が社会科学であると主張するのなら、少なくとも、そのような対象の限定は必要だし、唯物史観のような世界観と、科学の対象とははっきり区別しなければならないということになるのではないかと思うのです。そして、唯物史観というのは、間違いなくマルクス＝エンゲルスの世界観に他ならないですからね。

商品経済っていうのは、歴史的に、何時でもどこにも存在しているけれども、資本主義社会となると、どうしても一つの秩序がなくてはいけない。それは国家っていう、国家っていう名前はなくても一つのまとまった共同体的な秩序が存在しないと駄目ですね。それは商品経済を通じておのずから結び結ばれるものかもしれないし、そうでないかもしれない。資本主義社会が社会として成り立つのは、客観的な存在として、人間が関与できない、そういう対象性を持つてるっていう意味ですから。そういう社会っていうのは、他にないのです。

他の社会っていうのは、みんな人間が動かしている。ほとんどが何らかの権力で動かしているし、動かされている。そういう社会っていういろんな形があって、それはこういう形しかないっていう形が、典型的な存在はないのではないか、というように思うのです。

「自然法則」っていうふうにマルクスは言っていますが、それは法則っていう概念より宇野さんのいう「経済原則」って言った方が適切だと思うのだけど、経済原則というのがまず前提になって、それからその具体的な形態としての資本主義とか奴隷制社会とか資本主義社会とか、そういう唯物史観という考え方で整理するのはそもそも無理でしょう。

そうすると宇野さん流に言うと、経済原則に全て還元されてしまう。資本主義社会も経済原則に還元できる、そういう発想になる。

マルクスは繰り返し言うのだけれども、価値っていうのは社会的労働に、普遍的な社会的労働に還元できる。還元できるって言葉は使っていないと思うのだけれど、実際に還元できる、社会化できるんだってことを言ってるんですよね。要するに原則の問題になっているわけですよ。それだから労働価値説は、マルクスの場合、ゆるぎない絶対的な根拠を有するわけで、あらゆる社会に共通な社会的労働の対象化としての商品の価値

を考えているわけだから当然です。

リカードのものとも違う。対象を一度限定したはずの宇野さんも結局、そうなるのですね。そうすると、社会科学としての経済学との対象設定との差が出て来ることになる。まあ、その問題はこれ以上は、すすめられないので止めますが、問題は残ることになります。

だけど、それはマルクスが商品は労働生産物であるということを前提にしていますが、そんなことは言えない。実際、マルクスも空気とかあるいは荒地だとかを挙げるんだけど、現在ではそういうものがすべて商品化されているとも言える。全面的とは言えないけども、本当は商品にならないような毒物ですら、例えば、CO²、そういうものだって、現在、国家間では商品として売買取引されているくらいの世の中ですからね。

価値は生産価格の本質

結局、価値というのは、実は生産価格の本質なんだ。生産価格の本質であって目に見えないけど、生産価格という形で議論しているというのは、実は、価値の現象形態を論じてるからなのだ。だから生産価格での社会的労働配分というのは、原則的に社会的労働配分を、言い替えれば、いわゆる価値での配分を資本の配分として商品の交換を通じて資本主義が行っているという意味だ、ということになります。だからそれは、他の社会での労働配分に還元されてるわけじゃなくて、同じものとは言えない。直接的に人が差配するのではなくて、資本がただ剰余労働を含んだ資本の配分だということです。価値と生産価格との認識のずれもここに起因します。

資本主義では、生産諸部門に資本が配分されることが、実は社会的労働の配分になっている。生産当事者には不可視の価値ではなくそれが具体化された形態である生産価格を中心に社会的労働配分が行われるのだから、社会的労働とは、実は生産価格を意味することになる。こうなるともう生産価格が「絶対」みたいになってしまうかもしれないけれど、他にどういうように考えられるのでしょうか。

まあ、そういうようなことが、最後に到達した解決でありまして、その労働配分の原則の規定って何なんだろう。そういうことの問題に最後に帰着する。帰着したっていか、そういう話なのですね。

それにまつわる関連する話は「転形問題論争」を含めていろいろたくさんあるのですが、基本的にはやっぱり価値と生産価格の話が、今日のテーマですからその話に絞りますと、価値と生産価格の話である限り、私が今までリカードから始まって、今日に至るまで考えてきた経過とその結論は、結局は、同じことになってしまうという

ことなんですね。

私がさっき言ったように、リカードの『経済学原理』の初版と3版の価値論、それに違いがあるんだ、リカードは最初は賃金の騰落の影響、それが普通の考えと違ってですね。賃金が上がると価格が下がるんだっていう、奇妙な現象の発見から始まって、有機的構成を中位におけば、両者の変化は相殺できるんじゃないかっていうところまではいったんだけど、その後いわゆる本当の意味での賃金騰落に関係ない修正の問題に到達して、その問題をやりかけるんだけど、病気で休止し、完全にやる前に途中で死んでしまった。その問題は、弟子であるところのミルあるいはマカロックなどに受け継がれている。

さらにその不十分さを補って、マルクスがその問題を受け継いで生産価格論を完成させるのだけど、その生産価格論はずっと言いましたように、『資本論』第三部第2篇第9章で最終的に行われているのですが、必ずしも完璧ではなかった。

先ほどはあまり詳しく言えなかったのですが、その内容は生産部門を5部門に分割して総額500万ポンド。500っていう単位だったので、その総額を100ずつに分けてね。有機的構成の違いを入れて、剰余価値の違いを入れてそれを利潤に作り直すと、利潤率に相違が出てきて、その利潤率の相違を平均化して同じ利潤率にすると、価値から生産価格に転化するという例を挙げて説明してるのです。その説明だけで終わっている。

五つに分けている意味はよく分からないですね。社会的総資本を五つに分けてるというふうにみんな考えているけれど、どこにもそんなこと書いてないんですよね。同じ会社の中で五つの部門に分けた場合だっていいのですよ。そういうことも書いてあるのです。または、そう考えて良いとも書いてある。

しかも、その資本の費用価格も生産価格化されるという問題があるのだけれども、それも書いてない。書いてないっていうわけじゃなくて、あとで書いてはあるんですけど、基本的には書いてない。それに関係する文章として、触れてはいるのですけれども、結局的には、全体を考えれば、総価値は総生産価格に等しくなるからこれ以上議論しないと、これを打ち切ると言って議論を一応終える姿勢を見せてしまう。

そこから、第二次世界大戦中にスウィージーの『資本主義発展の理論』で問題にしたところの議論が、戦後、世界的な国際的な議論に発展してゆくわけです。

元々の出発点はリカードであるのですが、マルクスは価値論の修正にこだわって、その点には注目しなかった。価値と価格の比較の次元の相違には注目しなかった。徹

底して議論しなかったために、それが転形問題という議論に発展してしまって、それも数学を使って一生懸命議論がなされたため、価値の生産価格への転形は矛盾なく解決できるんだって、可能だって、そう言われるんですが、僕は、それ経済学的に何か意味があるのかっていうふうに思うのです。

数学的展開っていうのは、手順の内容を問わないのですね。前提は問題にしますけども前提を変えれば、乱暴な言い方かも知れませんが、何だって構わないのですよ。何でも解決はできる。数学的な解決はできるけど、内容そのものは分からない。そういう不思議な世界だから、どういうふうに考えたら良いのか。その方面に疎いせいでよくわからない。

マルクス自身は一体どう考えているのか。だって、その場合には、価値の労働量は変化する。価値が生産価格に転化することに伴って例えば労働量が 150 から 120 に、90 から 120 に変化しているとしても、それは全体の数をプラスマイナスで相殺できるから、だから総価値と総生産価格が一致するから、労働価値説は正しいのだと言っている。

そもそも労働価値説がなぜ正しくなければいけないのか。それが正しくなくとも、人間が全部、その対象に対して働きかけて、その結果が人間の労働の産物だと言えればよいのではないか。それは、何も生産価格と価値が合致しなくたって、そんなことは、人間の労働で作られているんだということは、理論の話じゃないから、一種の形而上学的な話だから、みんな知っているから、神様が作ったかどうかという話は分からないけれど、人間がやっているということは分かっているから、まあ、それ以上議論をする必要はないんじゃないかというふうにも思うのです。ここではそれ以上の議論を生むということになるので、今日は面倒なことだから、これ以上話しませんけれども。

経済学というのは科学を自称していますが、科学というのは、分かる範囲のことしか分からないのです。分からない範囲のことは、人間社会におよそたくさんありますから、分かる範囲のことが分かる、それで良いじゃないかと思っている。その先のことは、いろいろあるのだろうけれど。

大事なのは、マルクスはせっかく既に言っているのだから、価値と価格次元が違う。我々は、価値論のところでは価値で話す。価値というのはマルクスが「実体」のことだと定義していたわけだから、いわゆる価値の実体の話です。見えない本質の話です。我々が第三部に行けば価格で話す。そういうふうに言っているのだから、僕は、価格で話しなさいと、マルクスは問いかけているだけの話なんだと思っているのです。マルクス自身が第三部の冒頭で言っているじゃないかと言っているのだけれど、第三部の肝心の生産価格を論じるところでは、マルクスはまだ依然として等価交換を言って

るじゃないですか。どういうことなのかということを、自分はずっと何十年間ですかね、問い続けてきたというだけのことなのです。

それを今日お話しして、終わりたいと思うんですね。

考えてみれば、今まで蒸気機関車でお客もいないのに、一人で薪をくべて釜を炊いて走っていたような時代からですね、電気機関車で引っ張れるようになって、新幹線で引っ張れるようになり広軌になって、スピードを一段と増して走れるようになって、いわゆる電車の時代になったんですね。電車の時代になって、ご承知のように、電車というのは一両で引っ張っているのではなくて、車両に、複数の車両にモーターがついていますから。山手線だって半分ぐらいの車両に今モーターがついている。中央線はもっとついているのですね、最近。新幹線は全車両についている。全部モーターがついている。全部のモーターで走っている。ところが、ごく最近、運転席には、先頭の車両だけモーターがついていない。運転席にはモーターがないのですね。運転席だけモーターがなくて、後の車両で動いているというのが新幹線の最新型なんですよ。変ですね。

生産価格論についても同じような感じがするのですよ。自分は運転手というか、運転手は自分一人だと思っていたら、他人が運転するのに乗っているような気持ちになっちゃってね。

その上、新幹線には、今や浮上するという新幹線がありますからね。果たして線路上を走っているのか。線路上に浮き上がっているのは、もはや電車って言えるのか。線路上を走っているのか。空中を走っているのか。空中を走っているのが真の姿なのか。始めと終わりだけ線路に乗っかっているのが真の姿なのか、わからない状況だから、この問題についての僕の仕事もまあいい感じなのかなと、密かに思っている次第です。

最後まで、ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

司会 それでは、再開いたします。お手数ですが、ご質問のある方は、前に出て頂いてお願いします。

転形問題：物量体系と経済原則

亀崎 じゃあ、あの、聞きにくいんですけども、お聞きすることにします。

今回先生が話されたお話を拝聴し、先生の論文「真にマルクスはリカードを超えることができたか」という論文と「マルクスが自らの生産価格論に求めた真意」という論文を送っていただいて、読ませていただきました。

先生の問題意識は、古典派、特にリカードの『経済学原理』の初版と三版の研究を進められる中で、マルクスが扱っている生産価格の問題をリカードも扱っているというご指摘とか、あるいはマルクスの生産価格論の形成史、ロートベルトゥスの地代論検討をはじめとする「23冊ノート」などを踏まえられて、マルクスの生産価格論を研究されてきたということで、凄く学ばせてもらいました。

私の理解では、それぞれの学派は価値と生産価格の関係という同じ問題をあつかいながらも、問いの立て方にそれぞれ特徴があって、宇野派は、価値と生産価格の問題に関しては、私の思う最大の成果は、次元の相違論、価値と生産価格は次元が違うというふうな観点を出したことが、宇野派の生産価格論としては、最大の成果なんじゃないかというふうに私は思っています。それが例えば、先生を筆頭に、鈴木原理論の生産価格論と、宇野原論の生産論と分配論の違いのような形で定式化されたり、いろんな形で定式化されているんじゃないかと思うんですね。

そういうふうな観点から考えてみると、転形問題をどういうふうに宇野派として解釈するかという点から、私は、先生のいう価値と生産価格の次元の相違論を基礎に転形問題を理解したいと思っています。その時にポイン

トになるのは、物量体系と言われていて、例えば、森嶋通夫で言えば、『マルクスの経済学』*¹⁷の一番最初のところに出てくる、産業連関論のような、そういうふうなものを基礎にして、マルクスの二重の価値規定のような形で問題にするような視角、それは、再生産表式論にも繋がるし転形問題の理解にも資するんじゃないかと考えています。

特に、物量体系を基礎に価値と生産価格の問題を考えると、事実上、方程式体系として価値と生産価格は計算可能な形で明示することができるわけです。

それはもちろん、先生のおっしゃるように、前提を置いてその範囲内での話なんですけれども、しかし、物量体系を、森嶋のような形での価値論もそうだと思うし、後半の転形問題の論者たちも、物量体系と価値体系と生産価格体系というような形で、問題にしたときに、先生のおっしゃる次元の相違論がより明確な形で定式化されるんじゃないかなというのが、私の理解なんです。

そうすると、結局、一つの結論は、価値は生産価格に転形しない、価値の次元と生産価格の次元は交わらない。それぞれの領域が、物量体系を基礎にして計算可能なものとして定式化されるにすぎないんだ、という形になるんじゃないかというふうに私は理解しているんですけれども。

ちょっと計算はごちゃごちゃして、ややこしい話があるのですが、先生の転形問題についての評価はちょっと低すぎるかな、それは正当なところ、評価の正当なところもあるんですけれども、もっと積極的に転形問題を価値体系や物量体系や生産価格体系で、計算していったときに、先生の言う価値と生産価格の次元の相違という主張がより明確な形で主張できるんじゃないかというような点について、先生がどのようにお考えかという点をちょっとお聞きしたいと思っています。

他にもいろいろあるかもしれないですけど、私としてはまずこの点について、もし先生にお考えがあれば、お聞かせいただきたいと思います。

櫻井 あの実をいえば、亀崎さんから質問いただくのが、一番嫌だったんですけどね。

*¹⁷ Morishima, M. (1973). *Marx's economics : a dual theory of value and growth*. Cambridge University Press

マルクスは、価値論を議論する場合に、自分が価値というものが示す社会的関係と、社会的労働、つまり普遍的な一般的な社会的労働の社会的関連とは同じだというふうに前提しているんですね。マルクスは価値というものが持つ社会的普遍的性格と、労働の持つ社会的普遍的な性格が同質だということから出発している。

今のご質問にあるように、物量体系－労働をいろんな言葉で言い換えたものがあるけれど－物量体系という言葉に換えたもの、そういうものの体系というのは一体どういう体系なのか、具体的に言うとね、全部の社会的な環境を包摂しているのかどうか、それと重なるものなのかどうか、一対一対応するものなのかどうかというのが、まず僕には問題なんですよ。

労働価値説といった場合に、一対一対応するものというのは、例えば、生産手段との対応では無理だし、どういうものが対応するか。対応するものというのは、条件を設定しておいて議論すると全部重なるけれど、重なるとは限らないんじゃないかというのがまず前提で、前提の置き方によって可能なのかどうかは分からないんだけど、そういうものが非常に大きな問題だと。

数学的な問題ってね、いつもそれに引っかかっている。前提の置き方によって可能かもしれない。そういうふうにまず考えているんですね。

転形問題というのは、転形問題という限りでは、費用価格の中の生産手段が価値から生産価格に転形する。そういう問題をどう考えるかという問題で、さっき言ったように、最終的には全部労働に還元される。それを時間的にやれば縦方向の生産編成が無限に遡ってという話になるけれど、それを横に並べてやろう、表式でやろうと、input-output の表式でやるという、そういう話でしょう。

それは数学的には可能でしょう。次元を無数という仮定で考えれば、無数でなくてもいいんだけど、無数で考えればいいんだから。それで一体何を証明しようとしているか。労働価値説が全部証明できたと、すぐに言われる人もいるけれども、それが証明できて、何になるんですかと。

僕は、アダム・スミスが言ったように、労働は、toil and trouble だ。僕は究極的には、そういうことを思い起こせばいいんだなというふうに思っているんです。

だから、もともとマルクスもね、『資本論』の冒頭で言っているけどね。労働の生産力は絶えず変動している。だから生産手段の投下労働時間は絶えず変わっている。で、しょっちゅう変わっているというのに、それに対する投下労働時間を計算できるだろうか。まあ、常識的には計算できない。

だけど計算できないことはありませんよ、こうすれば計算できますよという。縦のものを横に全部並べて、ある一点を一瞬でもって押さえれば、全部計算できる。全部横に並べてね、一瞬で計算すればできるはずだと、そういう話だから、できるかできないか僕には分からないけど、数学的には可能だと。

数学者にとっては面白いけど、僕にとっては面白くないというか、そういう感じなんですね。だから、転形問題について、だんだんそういうふうな評価になってきた。

二次元方程式が N 次元の方程式になって、そういう話になってきたってことは承知してるんですけど、僕は、それ以上数学が分からないからっていうこともあるけれども、ついていけなかったってこともありますけれども、あんまり議論はしてないんです。

関根友彦さんの論文を今日も持参したんですよ。

亀崎

先生がおっしゃるように、確かに、転形問題の論者が解こうとしていることは、全て前提の中の話で、それは何を前提するかによっても答えは、方程式体系みたいな形でありますので、決まっていると思います。そこは先生がおっしゃっている通りだと思うんですね。

ただその時に、物量体系を前提するということの意味は、事実上、宇野さんの経済原則のような意味を持っているものを、彼らも前提している点にあるんじゃないかと思うのです。

経済原則っていうのは、資本の競争によって達成されている部門間の均衡を、商品レベルで説明、再生産可能な形で前提しているので、そういうふうな物量体系の前提っていうのは、実は、資本の競争によって達成されたものなので、資本の側から見ている経済原則の話なわけです。

だから、資本主義のもとでの労働についてどういうことが言えるかという問題を物量体系と価値体系の関係で説明しているのです。経済原則っていうのはもっと本来は、宇野さんが言っている経済原則ではもっと広いので

すが、ただ、経済学で明らかにできる前提が置かれている議論の範囲では、こういうところまでは解けますよ、という形で示すのだと思います。

例えば、技術的に与えられている関係論の中で、その生産物はどれだけの労働が含まれているかっていうことが計算できて、しかも、その計算された価値と生産価格の関係が明らかになるというふうな限定付きだとしても、その限定の中で、転形問題をやる人は言わないんだけど、先生がおっしゃる価値の生産価格の次元とか、宇野さんの理論を前提にすれば、もうちょっといろんなことが言えるんじゃないかというのが、私の先生に対するちょっとした不満なのです。それで、先生は次元の相違の話はされるんだけど、それがどういうふうな意味を持っているかっていうのをもっと追求することがちょっと不足してるんじゃないか、そこを追求していくことに意味はあるんじゃないですかっていうのが、先生に対する私の質問なんです。経済学原理論における特殊な資本主義社会の分析から一般的なものの関係を、経済原則を、明らかにするというのが宇野派の一つの特徴なので、そのようなことを前提にした上で、価値と生産価格の次元の相違論を、もう少し発展させていくような方向性に、可能性はないのかというのが私の質問で、先生はその辺についてどのようにお考えでしょうか。

櫻井 ちょっとね、話半分くらいしか分からないんですけども、要するに、経済原則と経済学原理との関係は、宇野さんもそうだしマルクスもそうなんだけど、範囲が同じだというふうに考えたんだと思うんですね。

僕は全然違うと考えてる、今は。昔は前提は経済原則だから、価値法則の説明をする必要がないぐらいに考えてた。

宇野さんなんか、労働力のことを、証明しようとして苦労して失敗してるんだと思うんですけども。

要するに、物量体系とか、あるいは他のいろんな手段で、方程式を作って解く。その対象範囲っていうのは、経済学の対象範囲と必ずしも一致しないんですよ。

一つの社会、どんな社会か分からないけど、いろんな社会、例えば社会主義社会は計画経済っていう形で出発してるから、ああいう考え方っていうのは、一番理解しやすかった。

資本主義社会みたいな、みんな勝手に作ってるところでは、なかなか難し

かったんだけど、方程式として立てることはできるわけですよ。

一種の特定の関係を集中して、そこで限定していれば。その中に果たしてね、資本主義社会っていうのは、全部入るのか。いろんな組み合わせがあるじゃないか、っていうことを言ってるんですよ。

その方法っていうのは、いろんな形でできるから、経済学でやってる問題っていうのは、商品経済の社会、対象は商品でしかないから、商品以外はまだ入らないから、労働力も入らないから、労働力商品に入るけど、労働力が入らない、そういう社会っていうのは資本主義社会以外ないから。

他の社会は、全部労働そのものが計算されるけど、資本主義社会では、労働力商品しか計算されない。労働力商品としてしか、労働が計算されてない。だから、そういう社会っていうのは、非常に特殊な社会でね、そういうふうに計算して、一定の、計算式ができたり、N次元で、できたとしても、それが原則にはならないでしょうっていうことを言っているだけなんだけど。逆に言えば、数学でいろんなものができるじゃないかっていうことも言えて、それは構わない、構わないというか、それはそれで、いけないって言ってるわけじゃないけれども、資本主義社会における労働、商品を労働価値説で証明するというのは、できるかもしれないけど、どのくらい意味があるんですかっていうことを言っているだけなんですよ。その証明の意味っていうのは、結局、商品というのは、人間の労働の成果としてあるんだなっていうことが分かったっていう、以上のものですかっていう疑問なんです。

要するに、科学的な成果が直感的な成果とほとんど同じだと。それ、マルクスが言っているんですから。大体、商品が何でできたんだろうかって考えると、大体労働じゃないかなっていうふうには、みんな思う。それから、使用価値を捨象したら労働になると。

すぐマルクスは、そこから、結論まですっ飛んでしまうんだけど、そこまで至る過程のことを、マルクスが書いてるんですよ。はじめは、偶然的に、交換されるんだろう。偶然的なものが、だんだんと交換が頻繁に行われるようになって、従って、労働が何か、根拠になってるかもしれないってみんな思うようになってくる。しかし、資本主義社会っていうか、大量に労働者が、工場で生産するようになると、それは、労働であるってことは、確信に変わる。

確信するってことと、そこから、突然、使用価値を捨象すれば労働なんだ、価値が労働なんだ、っていうふうに、言うようになるっていうのは、僕にとっては、すごく大きな、距離がある、飛躍がある。人間の考え方がだんだんそうなると言っているだけで、そこから突然バーンと飛ぶ。それがマルクスの考え方だと思う。

リカードはね、単刀直入ですよ。交換価値まで、スミスもリカードでも、交換価値まで二要因と言ったら、使用価値と交換価値。リカードは、はっきりに言ってる。使用価値と交換価値の量はわからない。そのために、絶対価値という概念が必要なんだ。絶対価値を規定するのは、労働なんだ。労働というのは、どういうものかっていうと、ビーバー 1 頭と鹿 2 頭が 1 対 2 の比率交換される。1 日が 2 日と交換される。そういうのが、労働価値説の内容だと言って、それ以上のことは言っていないんですよね。細かく、何時間何分とか、そういう話は一切してない。だいたい 1 日とか、2 日とかは、話はしてるけど。

マルクスはそうじゃなくて、何時間何分とか細かく言ってる。何時間何分って一体何なのか。その時間というのは、誰でも知っているように引切り無しに変わっているのです。引切り無しに変わっているのだけれども、とりあえずは、それがどう変わるかはここでは問題にしない、とマルクスは言う。労働時間に関して分かっているだけでいいのだ。マルクスはそう言っているのです。あからさまに言っているのですけれども、どうやって計算するかなんていうことは何も言っていないのです。

それを計算できるのだというふうに、今考えた人に言われたけれども、それは、数学だからね。数学は仮定が立てられれば、数式で計算できるのですから、どんなものだって計算できる。数式としては計算できるのです。どういう意味を持つかということは、数学では出てこないのです。

これは労働だと言えど労働なんだと、そういう結論が出てくるけれども、その表式を作る場合に、労働というのは全部、一瞬で断ち切ったところ、次元にあるのでね、これが何時間変わるんだという話をしているのだけれども、そんなことに意味はありますか。

マルクスが言っているように、労働の時間は日々変動しているのです。日々変動している労働時間が変わる。生産手段の労働時間というのは、過去の労働ですから、労働時間というのは、過去の労働時間である、今の労働時

間ではない。現在の労働時間、同じものを作るのに必要な、今作れば必要なその時間、その時間が今の製品に反映しなければいけないのでしょう。

それを計算するというだけの話だからね。過去に遡って計算をしたものが累積されて、データとして出てきて、データが出ますよという話だからね。それは出るでしょう、計算上は。そういうことをやったところで、何の意味もない。

生産性が本当に向上している。そういうところで、今の生産性が反映はしているんでしょうけど、そういう計算というのは、今、わからない。経済学がそういうものをやっているのは、つまらないなという感じがするだけで...

亀崎 問題はその意味なんじゃないかと思うんですけどね。計算それ自体に意味があるんじゃないかと。

櫻井 それ自体に意味があるのかもしれないですよ、意味があるのかもしれないです。

亀崎 例えば、転形問題では、技術は事実上不変としているけれども、先生がおっしゃっているように、技術が日々絶えず変動して、そうすると、当然、商品に含まれる価値も変わってくるし、生産価格も変わってくるんですね。

だから、転形問題のときに問題になる物量体系だとか、物量体系と価値体系の関係の中で、技術の不変というのは前提されているし、労働は均質性があるし、もちろん、利潤率は平均利潤であるっていうふうな、そういうふうな前提が、資本主義の変動の中で、基準化の中で、傾向として需給一致が達成されるので、その需給一致のところを考えると、物量についても供給と需要は一致するという前提を置いた上で、計算されるんですね。計算されていると思います。

だから、そういう意味でいうと、現実とは全然違うわけです。ただ、もし、例えば、商品の価値を現在価値でやるという場合に、商品のそれぞれ、産出の中に、その生産物が入っているとすると、その生産物の価値が、投入の価値に反映されますから、事実上、現在価値での計算になっていて、過去の価値では計算されていない。

その、産出のところの価値が、投入の価値に一致しているっていうのが前提ですから、過去の価値を問題にして、確かに生産手段は過去に作られた生産物なんですけれども、それが再評価されて計上されることになるので、

現在価値で計算しているんだと思います。

櫻井 うん、それはさっき言ったとおりなんですけど、さっき言ったように、現在価値で計算し直しますからね。

亀崎 はい、そうです。

櫻井 だから、全然、計算する瞬間に消えていくわけだから、どんどん更新されていくでしょ。それはもう、一回、1秒後と言っていいくらい変わっていくわけだからね。だから、まあ、それが変わったって構わないけど、ちょっと、もう、理解を超えた問題だから、みんなやってることだから、間違ってることやってるとは思わないんだけど、計算っていうのは、できるだろうと思うんですよ。計算式ができれば、解けるはずなんですよ。それ、演算が正しければ、必ず解答が出てくる。だから、方程式を立てることができれば、解答が出てくるっていうのが数学だから。

ちょっと、例えばね、リカードの、さっき言った、1815年の、「穀物の低価格が資本の利潤におよぼす影響についての試論」という論文は、あれは、穀物という物量体系だけでやってる。

インプットもアウトプットも穀物だけだから、穀物方程式みたいなもんですよ。

数式じゃなくて、実物量でやってるけど、だけど、それを文章で説明しなさいっていったのは、ジェームズ・ミルで、実際の価格でもって、価値を価格で書き直してやってみたら、やりなさいって、ミルが勧めて書いたのが、『経済学原理』なんですよ。

あれは、それでもって、分かりやすくなったっていうか、具現化したっていうふうに言えるかもしれない。穀物価格だと、インプットは穀物何ブッシェルとなり、それを今度は、お金何ポンドに言い換えた。ブッシェルを価格に置き換えて、土地は、リカードの地代論では、穀物価格が上がると、どんどん最劣等地が増えて、賃金は、穀物価格が一定でも、賃金額だけは上がる。生産量が増えれば、賃金が上がるってことなんですよ。ところが、土地は、劣等地が増える。そういう矛盾がある。他の生産物は、生産性が上がれば、値段が下がる。そうすると、イングランドの穀物価格が下がれば、他の生産物の生産性が上がり輸出が容易になる。他方、輸入を禁止すると国内の穀物価格が上がるから生産性は落ちる。だから、輸入して安い

穀物価格で買ったほうが良い、というのがリカードで、穀物を輸入禁止しようというのがマルサスですけど、そういう論争を全部穀物の量という物量体系でもって、やってるんですよね。

そういう問題は、その時代からあるんだけど、穀物は、全部同一の穀物、全部インプット・アウトプットを計算できるからいいんですよね。

僕が今日、最終的に言いたかったことは、価値と生産価格は、全然別物ではなくて、いわば価値実体と価値形態の関係なんだということです。マルクスの第三部の本来的な方法からすれば、両者の比較をして、その差額は相殺できるから労働価値説は説明されるという問題意識は存在しないということになるのですね。それゆえ転形問題は、マルクスには存在しなかったという結論なのです。

でも、亀崎さんの言うことを、僕、否定はできないですよ。

唯物史観と労働価値説

横川 ちょっと、違った問題になりますが、よろしいでしょうか。

今日の、ハンドアウトで、三番目のマルクスの労働価値説へのこだわり、というところなんですが、ここで、先生は、「3の②マルクスの「自然法則」(宇野のいわゆる経済原則)の前提になっている唯物史観がその根拠になっているのではないか。」というふうに、書かれていますが、この点を、もう少しお話ししていただけますでしょうか。

櫻井 さっき、簡単には説明したんですけどもね。唯物史観というのは歴史をいくつかに、ぶった切って、簡単に、分けちゃってるわけなんだけども、資本主義の時代というのは区分の一つになっているんですけども、資本主義の時代というのは、基本的に資本主義の領域が広いというか、力が強いというか、それを代表させているんですけども、全体として、資本主義の理論というのは、経済原論としては確かに存立できる可能性がとっても強いですね。

さっきも言ったように、資本主義社会だけは理論化できる。他の社会では資本主義社会のような統括しているような理論というのは全くできない。

経済学としては、資本主義社会は、経済原論によって理論化できる。

ということかという、資本主義社会では、商品が主体になっている。商品というのは人間が根拠なんだけれども、人間の外側に存在している。人間がコントロールできない部分として外側に存在していて、その外側にある商品経済というものが逆に人間を支配している。

自然と違って、自然みたいに完全に人間から独立しているわけではないけれども、疑似的にかもしれないけれども、人間から独立して、人間の認識の対象になり得る、客観的な対象になり得る、そういう性格を持っている。

だから逆に科学の対象になり得る。だから理論的に把握できる。自然と似ている。こういう社会というのは、資本主義社会しか存在しない。

だから資本主義社会としてもともと存在できるということがあって初めて、唯物史観というか、各社会をまとめて認識できるという考え方ができたんじゃないかということなんですよ。

だからといって唯物史観のような考え方ができたからといって資本主義社会を各社会と同じように考えるというのはなかなか難しいなということです。

資本主義社会というのは、商品経済だけで考えることは、ある程度はできる。具体的に考えれば、他のいろんな要素がなかったらできない。まず国家というのがなかったら資本主義社会はできないし、また歴史的に見ても国家の中の資本主義でしかないんですよね。

国家みたいに、国家とは言わないまでも、国家的な、例えば今の台湾みたいな、ああいうような、政治的な意思のまとまりが必要で、それなくして資本主義は存在しないだろう。それ以外のいろんな条件を全部除いても、資本主義社会というのは、人間から客観的に独立した対象であるがゆえに、まとまった社会として認識できると。

だから逆に資本主義については経済学として、科学として主張できる。資本主義社会は、いわゆる客観的な、科学的な対象となる唯一の社会的な存在であるけれども、唯一の社会科学として存在するようになる経済学的前提には、現実的な部分としての国家があるだろうということを言ってるだけです。

経済学が科学だからといって、完全に物理学みたいになるわけじゃないから、物理学を真似して数学を使うってのもなかなか難しいのではないかな。

哲学とか歴史とか、そういうものが、科学じゃないからといって、科学より下とか上だとか、そういうことを言ってるわけじゃない。また、他の社会が、科学的に認識できないから資本主義社会よりも下だと言ってるわけじゃなくて、資本主義は他の社会とは全然違った極めて特殊な社会だってことを言ってる。だから、唯物史観は、資本主義を考えたからできたのか、資本主義をある程度は予測しながら、資本主義の研究を始める以前にできたのか、後者だとしても、資本主義社会の認識と唯物史観の形成は裏表の関係じゃないかなっていうふうに、僕は見てるってことなんですね。

実際、唯物史観ができたのは、『資本論』よりずっと前、多分『ドイツ・イデオロギー』とか、あの辺りから、ある程度できていたんだと思うんですけども、そして、資本主義的な認識が『資本論』ででき上がったというのは、我々は知っているのですけれど。

横川 唯物史観に対する理論的評価が、僕の判断では宇野派では割と低かったような気がするんですが、これを読みますと労働価値説へのこだわりの根拠（理論の前提条件、公理）になっているっていうことで、唯物史観へのこだわり、唯物史観への評価が上がっているっていうふうに考えてもいいのでしょうか。

櫻井 唯物史観って、資本主義でいう価値っていうのを全部社会的労働—あらゆる社会に共通な労働一般—に還元しちゃってるんですよ。資本主義的な労働っていうのは、労働者の労働なんですよ。一種の範疇になっているんですよ。商品というより、範疇になっている。

そこに違いがあるんじゃないかと。社会的労働と資本主義的な労働には、違いがあるっていうことを、マルクスは、あるいは宇野さんもちょっと見過ごして、経済原則に還元しちゃってるんじゃないかっていうことを言ってるんですよ。その違いを見過ごした部分っていうのはあるんじゃないかと思います。

横川 ありがとうございました。

もう一つ聞きたいんですが、あの、労働価値説のこだわりっていうのは、リカードにもあると思うんですが、リカードの場合には、唯物史観っていうのは、どのように位置づけられているんですか。

櫻井 リカードは唯物史観は全然ないですね。

1799 年だったかな、あの、イギリスのロンドンの郊外の、バース、温泉に、家族を連れて、湯治に行ったときに、貸本屋でアダム・スミスの『国富論』を読んだというのが、リカードが経済学に初めて接した時なわけだけでも、ちょっと価値論読んで、アダム・スミスの経済学がちょっとおかしいんじゃないかっていうふうに感じたのが、経済学を学ぶ最初の機縁だっというように伝わっている。本当かどうかは分からないけれど。

だから、リカードは、スミスの経済学をそのまま継承しただけだと言っても良い。労働価値説っていう考え方は、イギリス人にとっては、もっと前からある種の普遍的な、共通の認識であったんじゃないですかね。

横川 リカードの場合は、唯物史観っていうのは全くないっていうことで、そうすると、唯物史観と、労働価値説へのこだわりっていうのは、切り離せるものなんですか？

櫻井 そこは配布資料に書いてあることが間違いです。唯物史観っていうのは、マルクスのだからね、マルクス以前にはないんですけども。ここは「マルクス」の間違いです。リカードに唯物史観があったっていうふうに捉えられると思わなかったから予想してなかったです。そういう誤解の生ずるっていうことを予想してなかったから、間違った。なんでこんなこと書いたのかな。

中川 そこは、客観価値説って考えた方が分かりやすいと思うんですよ。

土地だとか労働っていったものが価値を生むんだっていう考え方はブリテン島の中には古くからあります。

でもリカードは、スミスだけじゃなくて、ジャン・バティスト・セイだとかテュルゴーとか、いわゆる主観価値説の人間たちも評価して、経済学は彼らのお蔭をもって発展してきたんだっていうことを、『経済学及び課税の原理』の「序文」で言ってるわけですよ。

僕は、唯物史観とリカードは全く関係ない、ただイギリスの価値論を見るときに主観価値説ではなくて、客観価値説、つまり土地とか労働とかといった、実体のあるものが価値を生むんだ、という考え方で成り立ってきたと思います。主観価値説に立つ人間を評価していることから、主観価値説か客観価値説かにあんまりこだわる必要はないのではないかと思います。

その中でマルクスが面白いと思ったのは地代論です。差額地代論から始め

なきゃあ駄目なのかって、僕は、テュルゴーのように、いわゆる「絶対地代」論に近い考え、つまり土地（所有）から得られる収入から始めてもいいんじゃないかなって気がするんですよ。

それともう一つ言いますと、ヨーロッパでここ 20 年 30 年の間に有力な説とされてきているのは、テュルゴーが『富の形成と分配に関する諸省察』で言う「基本価格」（または「基本価値」とも）というのは、マルクスの生産価格と基本的に同じだっていう考え方です。マルクスは労働価値説からこの問題にアプローチしているけれども、テュルゴーって人は主観価値説—テュルゴー流の効用価値説である「心理経済価値」説または「感覚的経済価値」説—から、櫻井先生のおっしゃる生産価格の問題を解いてるっていうのは、すごく面白く興味深い。

櫻井 ちょっと分からないけど、君の質問の前半の方は、リカードは唯物史観とは関係ないという話ですよ。マルクスの労働価値説は、普遍的な人間の社会的労働の商品への対象化が商品の価値だというのは、いわゆる価値説ともちょっと違うのです。客観的価値説としての労働価値説よりもっと根源的なのです。

後半の生産価格の問題はね、生産価格って言葉を使うかどうか分からないんだけど、「23 冊ノート」の中でも、アダム・スミスの論じる自然価格論というふうにマルクスも言っているんですよ。

生産価格という言葉とか、自然価格という言葉をみんな使っているが、どういうふうに使っているかが問題なんだろうと思う。

中川 生産価格という言葉が誰が最初に使ったかというのは、興味のあるところですね。

櫻井 それはみんな同じような言葉を使っているのだけれども、その意味付けは、はっきりしない。

中川 ローデベルトゥスも初期の一人ですが、僕は、翻訳の『地代論』（山口正吾訳、岩波文庫、1929 年）^{*18}を読んで疑問を感じて仕方なく、まさかひげ文字をこの歳になって読むとは思わなかったんですけども、原書を買って読んだんです。

^{*18} ローデベルトゥス著；山口正吾訳。（1928）『地代論』．岩波書店

そうしたら、一箇所だけ翻訳の中で「生産価格」という訳語が出てくるんです。あれ、完全な誤訳なんです。原文では Produktionspreis ではなくて、Produktpreis なんです。まり「生産物の価格」なんです。

誰かがなぜか知らないけども、マルクスの前にロードベルトゥスが「生産価格」という言葉を使っていると言っていますが、あれは嘘で、おそらく原書を読んでいないので、翻訳だけ読んで誤った訳語をそのまま引用したのだと思います。

それから、もっと問題なのは、『資本論』の翻訳もそうなんですけども、「資本利子」という言葉は、Kapitalzins というドイツ語の邦語訳ですが完全な間違いです。「資本利得」と訳さなきゃ駄目です。資本利得を意味する英語の capital gain または仏語の plusvalue に当たるタームです。

そういったいろんな問題があるんですけども、それに櫻井先生のおっしゃる意味付けの問題もありますけども、僕はテュルゴーが生産価格論みたいなことを言っていたというのは、これは正しいんじゃないかなという気がしています。

櫻井 テュルゴーのところかわからないので、それは全部君に任せるけど。唯物史観とリカードは関係ないですね。いずれにしてもね。

横川 マルクスとかの労働価値説や宇野派の労働価値説へのこだわりの根本的な出発点っていうのが、この書かれ方だと、唯物史観だというふうに受け取れるのかなっていうふうな質問だったわけです。つまり、唯物史観っていう出発点、あるいはイデオロギーがないと、労働価値説へのこだわりは生まれてこなかったのか、そういうふうに考えられているのかどうかっていうことをお聞きしたわけです。

櫻井 そこまでは分からないけれども、なぜ労働価値説にこだわっているのかっていうことを知りたいなあっていうことであって、それがマルクスの場合、社会的労働の価値への対象化なんだということだったのです。根本的な把握ですね。労働価値説っていうのは、例えばマルクス経済学だから等価交換を否定してはいけないんだ、お前は労働価値説を捨てたのかとか、あるいはお前の説は労働価値説じゃないじゃないか、マルクス経済学じゃないじゃないかと、僕はしょっちゅう言われてたんですよ。同じ宇野派からも言われてたんだから、別にしょうがないけれども、どうして等価交換をはっきりさせた労働価値説じゃないといけないのかっていうのは、正直言って

よく分からない。

自分がいわゆる労働価値説をやらなきゃいけないっていうことは、僕はよく分からなかったけど、自分の説を労働価値説といってもいいじゃないかと思ってた。

さっきちょっとふざけて言ったみたいに、リニア新幹線っていうのは、空中に浮き上がっている状況を言うのか、線路の上に浮いているのか、線路の上を走っているのか、そのどちらなのか。浮上して走っているのは正しい姿なのか、しかしその下に線路があるんだから、線路の上を走っていると考えべきなのか。それとも最初や最後に線路の上に止まっていたら、走って止まるんだから線路の上じゃないかっていうふうに言えるだろう。何なのかっていう話はもちろん関係ないんですけどね。上から見れば線路の上に見えるけど、横から見れば隙間が何ミリか空いているじゃないか。上を飛んでいるんじゃないか。飛んでる乗り物じゃないかって言われて、否定できるのか。

というような問題をふざけて言えばね、僕にはそのことは、どっちだっていいだろうっていう程度の問題でしかないんですよ。労働価値説っていうのは。労働の上を通るのか、通るとすれば、どう通るのかっていう話になっちゃうけども。

なぜか労働価値説という考えが邪魔しているせいか、労働価値説だってことをなぜみんななくしちゃいけないと考えるのか、労働価値説はどういう考え方に帰着するのかっていったら、やっぱりそれは人間自身の、生存に関わるからだ。アダム・スミスが言ったように、やっぱり人間が生きているってことと、人間が自然を働きかけて形を変えている、それで人間が生きているってことに関わるからではないかと。それはまあ間違いなく真理でしょう。

それをね、後から意義づけようっていうんでしょう。それに論理づけようと。それが労働価値説なんでしょう。しかも、やってみたところはうまくいかないじゃないかっていう話でしょう。

実際にその労働配分をやっているのは、人間が労働を配分しているわけでも何でもない。人間のでき上がった製品を配分している。製品は誰が作ったのか、人間が作ったのか？ 人間の労働で作ったって言って、人間だけが作ったのか、機械が作ったじゃないか。ほとんど大部分を機械が作ってい

て、人間がちょっと補助しているだけじゃないか。だけど、機械だって元々人間が作ったのじゃないか。だから人間が作ったのか。それを計算してみる。計算できない、いやできる。そういう話でしょ。

だから僕は、それはやったっていいかもしれないけど、そしてそれで納得できる人はいいかもしれないけど、経済学っていうのはそんなことをやらなきゃいけないのかっていう話をしているわけです。

もともと経済学っていうのは何なのかっていう疑問がある。イギリスで始まった経済学って、お金の問題から始まってのわけですよ。重商主義の経済学から始まって。商人だとかそういう人が始めてるわけですよ。そのうちに、貨幣とは何かとか、商品とは何かとか、そういうことから経済学が始まるようになった。

それで経済学は労働に根拠があるっていうところまでいった。それをどんどん、どんどん精密にやり始めて、今日まで来た。

でも、他方では、実際の経済を動かしてるマクロ政策にしたって、何にも効果がないから何もないじゃないですか。なんにも分からない。数学的に精緻にやったところで、なんにも分かってない、なんにも当たったことがない、役立ちなんてなんにもありゃあしない。

経済学って本来何をやるべきか、何を課題にすべきかっていうことを根本から考え直すときに来ている、一体何をやるべきかっていう問題を突きつけられてる時代じゃないかなあ、と思うんですよ。

ミクロ経済学は、精密さを競っている。では、マクロ経済学っていうのは何だろう、分からないけど、まあ非常によく登場する、その、政策志向的なものね、だから当事者たちの利害関係で動いてる、そういうふうに見える。

だからまあ、歴史に戻ってね、一体何やってたのかなって話をもう一度遡ってやっていこうっていうことにすぎない。多分、これは役には立たないけれども、経済学は何をやってきたのかなあっていうことを明らかにするにすぎないんですよ。そうした場合に、マルクスの権威を振りかざしてね、マルクスがダメだとかいいとか言ってた時代はもう終わったなっていうふうに思ってるから、もうちょっと自由に勝手にしゃべっていいんじゃないかっていうふうに思って、少しだけ羽目を外してるっていう、そういうことにすぎない。

だからまあ、唯物史観云々というのは、ああいうものやるのも全然構わないですけどね。ただその労働価値説のことを言ったのは、リカードにとっては別に何でもなく、スミスの『国富論』からリカードは労働価値説を継承した。リカードはスミスのここが誤っている、それで自分なりの労働価値説の継承の仕方をした。

リカードは非常に頭が良くて明快な人だから、非常に分かりやすいんですよね。ある意味、マルクスも頭はいいけど、ちょっと頭の良さの質が違うのでかえって複雑になる。

さっきも言ったように、スミスはきれい、単純、率直に言った。リカードは、スミスは正しいけども、投下労働価値説と支配労働価値説というふたつの区別が誤りだったと考えた。

ただ、ふたつの区別は必ずしも誤りではなかったと僕は考えている。僕だけじゃなくて、そういうことを問題にする人も他にいますからね。支配労働価値説では、価値は賃金のことを指してる。労働者を支配するための賃金を払うことによって、労働を支配するという意味のことを言ってるからそれなりに意味がある。

リカードの交換価値は、未来の交換された後の話だから、とりあえず持っている商品の価値というのを測るのは労働だから、それは交換価値と区別した名称がなくちゃいけない。だから、価値、あるいは絶対価値とか、Positive Value だとか Real Value だとか言う。言い方は結構もっと他にも何種類か用意している。だけど「価値」とだけ言ってしまうこともある。

マルクスも同じように三種類に分けるんですけども、「商品の二要因」といった場合、わざわざ名前を言った場合でも、使用価値と交換価値と言ってみたり、使用価値と価値と言ってみたり何かバラバラなんですよ。

ですけれども、だいたいの流れから見ると、交換価値というのはやっぱりリカード、スミスと同じように、未来の価値を指している。現在のことは、投下労働、あるいは価値実体というふうに呼んでそれを労働時間で計量されるというふうに言っているのがマルクスですよ。それで、『資本論』第三部—現行の第三部—に至れば、価値から交換価値の領域に変わるんだというふうに、マルクスは明記しているわけです。何回も言っているんですよ。言っているけども、肝心の生産価格の説明の第三部第9章では、「資本一般」みたいな形で、依然として等価交換から始まって、競争という言葉

も使っていないですよ。諸資本の競争とは言っていない。資本の内部の関係みたいにも取れるようなことを言っているんですよ。はっきり個別諸資本を考察対象にしているというふうに論じていないんですよ。

そのくせ「23 冊ノート」では、市場価値が異部門に移ると、異部門同士の競争になるんだということまで言っているんですよ。生産価格を論じる前ですよ。

「23 冊ノート」のうち、1862 年あたりですね、それと第三部の原稿が、いつの原稿を使っているのかということの関わり合いになるけど、そのこと、僕は知らないし、知っている人はほとんどいないのではないかな。

マルクスの原稿を実際に読んだ人しか知らないわけだから、実際、決め手はない。日本語訳の原稿が近く出ると、2 年前から広告は聞いていたけど、出ないから、結局、今まで待ちちゃった。結局今まで分からないままになってしまったんだけど、それをちょっと見ることであれば、何か分かるかもしれない。

ドイツ語ではもっと早く読めたわけだけど、ドイツ語では、一行くらいを探すといっても至難の業ですからね。だから、どうなっているか、知らないことはいっぱいあるんですけど。なかなか難しいですよ。

少なくとも、マルクスは成功していなかったんだろうと思うんです。途中でやったけれども、途中で終わっている。だけど、『資本論』第三部の、特に後ろの方ですね、20 何章とか 30 章くらいになると、微妙な変化をして、価値と生産価値が一緒になって、ひとまとめに扱っていて、事実上区別がなくなっているという感じがするんですね。

それから、実際には生産価格で、異部門同士の競争があるけれども、内部的な関係として、価値があるんだって取れるような文章も、最後に出てくるんですね。

だから、実際問題として、内部的な抽象的な規定として、いわゆる等価交換の関係があるんだけど、実際には等価交換としては現れないで、生産価格として現れるんだということ、それを内部的な関連、内部を認識することは難しいんですけど、価値の関係というのを、内部的な関係として理解して欲しいというところくらいまでは、マルクスは考えていたのではないかなと思っています。

区別するといっても、同じものを区別している。一方は、「資本一般」の領域で、それを取り出して見ている。片方は、もっとあらわに異部門として分けて見ている。そういう意味で、次元が違うということであり、「資本一般」として見ているのと、「競争論」に入りかけのところで見ている違いだと、そういうふうに僕は理解している。

結局、価値は生産価格に変わるといっても、形は変わるけども内容は変わっていない。僕は最終的に、それが今までの議論の到達したところになるんだということですね。

それが労働価値説でないと言われたら、自分の考えでは、労働価値説というのはそういうものだと言うしかない。自分の考えで、労働価値説というのは、そういうふうにしか他に考えようがない。そういうことですね。

資本家の労働

中川 先生、すみません。最後に一つだけ、いいですか。

あの、労働、労働と言いますけども、資本家の労働は価値を生むんですか、生まないんですか。労働価値説と言うときに、資本家あるいは企業者の労働は考えなくていいのでしょうか。

櫻井 それは、労働価値説と言うか、「資本一般」としては論じているわけですよ。資本家は剰余労働をさせて、剰余価値を生ませることを資本労働関係で言っているんですよ。剰余価値論でやっているんですよ。

中川 労働は賃金、企業者は勤勉という言葉を使っている人がいますけども、それは、資本家の報酬と、労働者の賃金、つまり資本家の勤労報酬、労働者の労働賃金と同じように、それぞれ収入が入ってくるという考え方ですが...

櫻井 労働力が商品化された時の商品化ってどういうもんだということも、「資本一般」のところで議論しているわけですからね。個々には議論しているんですよ。「資本一般」のところで、「資本の生産過程」「資本の流通過程」「資本の再生産過程」という形で全部議論しているんですよ。

中川 ということは、資本家の労働は無意味だとか、価値を生まないとかということではないですね。

櫻井 価値論として全面的にやっていて、それを個別に取り上げて、取り出して

そういう説明はしているんですよ。そういう説明は済んでいるんですよ。

中川 一つ引っかかったのは、英語の salary という言葉は、賃金という他に報酬という意味もありますから、salaries と複数なったら、訳としては賃金と報酬、単数ならどちらか一方というふうに訳すはずですよ。

そうすると、企業者の労働、勤勉という言葉を使う人もいますが、それもそこも含まれていると考えて良いわけですね。

櫻井 労働賃金の問題と労働力については、1849 年の、「賃労働と資本」というパンフレットで、大体もう労働力商品化の問題というか、労働と労働力の違いというのは、原則的には解決しているんです。マルクスは、ロンドンに行く前に一番先にやっていることはそのことなんです。

剰余価値論です。剰余価値論をやるためには、労働と労働力の違いを、明らかにしなければならない。ただね、100%、明らかにできるわけじゃない。そこで一番先にやっているのは、剰余価値論なんですよ。マルクスが先にできたのは絶対的剰余価値論です。

絶対的剰余価値論ができるためには、労働力の商品化の理解がなければできない。労働力がどういうふうに見えるかっていうことは、原始的蓄積なんかの問題があるから、後に出てくるから説明できないのだけれども、一番大事な、マルクス経済学としての最大の特徴は、剰余価値論だから。

賃金っていうのは、労働力の価値ですからね。労働能力って、Arbeitsfähigkeit っていう言葉を、マルクスは最初に使ってるわけだけれども、賃金として支払われるってことを言ってるわけですよ。

中川 ただ、資本家の労働はそこに入るのか、どう考えるかっていうことを、一つ、お聞きしたかったんです。

櫻井 『資本論』の中では、章を立てて詳しく論じてるんですけどもね。

中川 その昔、商人資本の話の中でもあったんですけども、それは、価値を生むか生まないのかっていう話に絡んでくるんです。

テュルゴーが、資本を定義するときに、(『諸省察』第 58 節の) 有名なパラグラフでこういうふうに言っているんです。

「自己の労働、あるいは勤勉による賃金や報酬によってであろうが、年年歳

歳、自ら消費する以上のより多くの価値を受け取る人間たちは、例えばそれが誰であろうと、その超過部分をそこから留保し、蓄積することが可能である。このようにして蓄積された価値を資本という」

これが、テュルゴーの資本の定義なんです。だから、それでずっと労働力の商品化という問題は、もちろん剰余価値の問題ではあるんですけども、じゃあ資本家の労働報酬とか勤勉報酬とかをどう考えるかということは、ずっとちょっと頭に残っていたものですから、お聞きしたわけです。

櫻井 賃金と役員報酬とを一緒にしているということですか。

中川 労働者の賃金も企業者の勤勉報酬—役員報酬も含まれる—も一緒です。だから（テュルゴーにとって）剰余価値ではないんですね。要するに、企業者あるいは資本家の労働、これを勤勉というか、労働というかはともかくとして、それはどのようにその中に入ってくるかということがちょっと頭にあったのです。

櫻井 それはね、なかなか難しい問題で、マルクスの場合もちょっと難しいと思うんですね。労働編成における労働者の組織化の問題だから、組織のことは論じていますよね、やっぱりね。で、それは経営じゃないからね、職長とかね、それから、労働者の中でのオーケストラの指揮者という例でマルクスは言っていたと思うのだけれど、そういう労働は何かということはあるからね。そういう問題はちょっと別な問題だから。よくわかんないですけど。

マルクスは明確に賃金労働者とは区別していると思うんだけど、そういう問題が残っているということはある。

高須賀義博氏と「次元の相違論」

小野 最後に僕が一つ聞いていいですか。

櫻井先生が以前におっしゃっていたのですが、高須賀先生が亡くなる前に支配労働価値説を擁護する論文を書いたんですよね。あれはもうちょっと突き詰めるべきだったっておっしゃっていたように思いますが、アダム・スミスの支配労働価値説は評価すべきだという点について、櫻井先生はどう思っておられますか。

櫻井 高須賀さんのその論文は覚えていないですね。しかし、高須賀さんとは、彼

が日本フェビアン研究所の助手だったころからの付き合いで、互いの論文を交換していました。私の論文を送ったらほめてくれて、そのころは方向性が同じだった。そうして、高須賀さんは、だったら『資本論』の最初の価値論の部分も生産価格にしたら良いと言われたので、それはちょっと違う、というような議論したことが懐かしい思い出です。しかし、やがて方向性が違ってきてしまって、意見が違ってしまったのは残念だったし、早くに亡くなったのも残念だった。あまり知られていませんが、なによりも、実は、「次元の相違論」と名付けたのは、高須賀さんだったのです。というわけで、高須賀さんの思い出は深いけれど、その論文は覚えていません。

彼のことを話すときりがなくなくなるのでこれくらいにしますが、アダム・スミスの支配労働価値説は意味深長で、そのことについて色々話せそうですが、ここでは関係ないので触れられません。しかも実際、スミスは、簡単にしか書いてないからわからないですよ。だから単純にリカードみたいに、すぐ否定しても良いのではないかと、少なくともリカードにとってはこれ以上の結論はいらないんじゃないのかなと思う。

支配労働価値説に何か意味があるとすれば、先程も説明しましたように、労働を支配する、相手の賃金を支配するといことなのですが、それにどういう意味があるのかなというのは難しい。

司会 ありがとうございました。それではこれで終わりに致します。

謝辞

本稿のために、佐々木勝年（NPO 環境持続建築）、岡部洋實（北海道大学）の両氏から音源を提供していただき、小野成志氏が、Whisper^{*19}を用いて文字起こしを行った。

鈴木和雄（弘前大学）、岡部洋實（北海道大学）、亀崎澄夫（広島修道大学）、横川信治（武蔵大学）、中川辰洋（青山学院大学）の各氏は、文字起こしの結果を閲読し、最後に、櫻井 毅本人が校訂と補筆を行った。組版は、T_EXLive 2025 ^{*20}の lualatex を用いた。

ここに、記して謝意を表する。

^{*19} Whisper(<https://github.com/openai/whisper/>) は、OpenAI が開発したオープンソースの自動音声認識（ASR）モデルである。

^{*20} T_EXLive 2025(<https://tug.org/>) は、T_EX ユーザーズグループ (TUG) および TeX Live 開発チームによって開発・維持・管理されている、数式や参考文献などを含む複雑な文書を美しく組版するための総合的なツール集である。

論文 1

『資本論』 第三部におけるマル クスの困惑と混迷

【参考論文】

『資本論』第三部におけるマルクスの困惑と混迷

櫻井毅

《問題の所在》マルクスの言う価値法則の支配とは一生産価格論を中心に――

1

『資本論』第三部（しばしば第三巻とも呼ばれるが、それは本来、大部の本の冊数の区別であり、『資本論』の第三部がマルクスの死後、エンゲルスによって第三巻として出版されたとき、それがたまたま内容的な篇別構成上の第三部の内容と一致していたためもあって、その呼称は今日でも慣習的に通用している）に関しては、マルクス自身の草稿に未完成の部分が多かったこともあり、少なからぬ理解の困難な箇所が潜むように思われるのであるが、最大の問題は、体系的、理論的な重要度からいっても、関連する話題の広さからいっても、生産価格論が一番の問題になるのではないかと想像される。マルクスが資本主義経済の支配原理とする価値法則なるものについてのマルクスの最終的な把握をここではたえず念頭に置きながら、主として生産価格の問題について考えてみることにしたい。

論理展開の前後関係は逆になるが、価値なる概念から導かれたマルクスの『資本論』における生産価格という規定の方から見ていくことにしよう。そこにはマルクスの思考の混迷の原因が潜むように思われるからである。とりわけ生産価格論では、『資本論』第三部こそがいまだに研究に取り残されたところの多いマルクス経済学の理論分野であることが印象づけられるように思う。それはその信用論の展開に甚だしく見られるような原稿の完成度の低さに多くを起因とするような問題にとどまらない、より根本的な問題が含まれるように思われるからだ。これにかかわる「価値の生産価格への転化」の議論にしても、すでに解決済みと考えて簡単に済ますわけにはいかないのである。それは最終的に問題となる資本主義経済における価値法則の支配という重要な命題をとってみてもまさに同様である。

マルクスは『資本論』第一部の第1章「商品」第4節の中で次のように述べている。いわゆる価値法則論といわれているものの中で最初に纏めて述べられている箇所かと思う。重要なので引用しておくことにしよう。——「生産物交換者たちがまず第一に実際に関心をもつのは、自分の生産物と引きかえにどれだけの他人の生産物が得られるか、つまり、生産物がどんな割合で交換されるか、という問題である。この割合がある程度の慣習的固定性をもつまでに成熟してくれば、それは労働生産物の本性から生ずるかのように見える。たとえば、一トンの鉄と二オンスの金とが等価であることは、一ポンドの金と一ポンドの鉄とがそれらの物理的属性や化学的属性の相違にもかかわらず同じ重さであるのと同じことのように見える。じっさい、労働生産物の価値性格は、それらが

価値量として実証されることによってはじめて固まるのである。この価値量の方は、交換者たちの意志や予知や行為にはかかわりなく、絶えず変動する。交換者たち自身の社会的運動が彼らにとっては諸物の運動の形態をもつのであって、彼らはこの運動を制御するのではなく、これによって制御されるのである。互いに独立に営まれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働が、絶えずそれらの社会的に均衡のとれた限度に還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的な絶えず変動する交換価値をつうじて、それらの生産物の生産に社会的に必要な労働時間が、たとえばどれかの頭上に家が倒れてくるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として強力的に貫かれるからである、という科学的認識が経験そのものから生まれてくるまでには、十分に発展した商品生産が必要なのである。それだから、労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的運動の下に隠れている秘密なのである。その発見は、労働生産物の価値量の単に偶然的な規定という外観を解消させるが、しかしけっしてその物的な形態を解消させはしない」（マルクス『資本論』第一部、大月版『マルクス＝エンゲルス全集』23a,100～101）。

ここに述べられている「労働生産物の価値性格は、それらが実証されることによってはじめて固まる」とか、あるいは「全面的に互いに依存しあう私的諸労働が、絶えずそれらの社会的に均衡のとれた限度に還元される」という主張には疑念が残る。というのは、ここでいわれている価値の法則的規定というものが、仮に、物理学における「重力の法則」のように、労働生産物である商品を社会的な均衡を保持しながら生産し配分してゆく動力となるようなものだとするれば、それは資本の利潤率をめぐる競争の強制力であり、その運動の基準となるのは、価値ではなく生産価格になっているのではないか、ということだからである。事実、上記の労働時間による商品価値の決定が偶然的でなくなるのは、機械制大工業の普及以後であることを、マルクスは事実上そこで述べてさえいる。しかし同時にその時に、商品の交換の基準は投下労働量にどこかで関連している場合もあるかもしれないが、そこに簡単に「実証」という言葉が使われうるような対象ではないことは、生産力の絶えざる変化を考えただけでもすぐ分かることだ。一般にマルクス自身の想定している価値という概念は、元来が市場における他の商品に対する交換期待という商品自体のもつ性格であり、自らが交換されることによってしか、その価値という性格も社会的には実現しえないのである。価値が実現される前に価値を表現出来るとしても、他者を介して表現するだけだから、その交換価値としての表現でしかない。帰するところそれはその商品の価格である。これはもともとマルクス自身の説明であった筈だ。

マルクスは、ここではあたかも「等価交換」という条件の下で、社会的生産の均衡が可能であるような印象を与える説明をしているようだが、後の展開の中では、明らかにそれが生産価格を成立させるような市場での個別資本間の競争によってはじめて成立するものであることを繰り返し明らかにしている。問題は両者の関係の中にも潜んでいる。

かくしてマルクスのここで扱うべき問題点を簡単に要約しておけば、こういうことにな

る。本来は「生産価格」によって価値が最終的、かつ具体的に規定される以外にないことをも一方では想定しつつも、なお、マルクスは「資本一般」の範囲内である「資本の生産過程」あるいは「資本の流通過程」の領域では、価値そのものの実在を労働の対象化に求め、その先の資本のいわば「競争」の問題を扱う領域ともいえる第三部に入っても、なお「価値」に対する投下労働量の修正をもって「価値の生産価格への転化」を説明しようとしていたということだ。したがって、一部に、「価値の生産価格への転化」を、歴史的な単純商品経済から資本主義的商品経済への移行として解釈することがあっても、不思議はない筈だったのである。ここではマルクスは直接そのことに触れていないが、しかし彼はそれに対しては当然否定的であったろう。少なくとも彼は一貫した理論的説明をこそ求めていた筈だからである。

しかし、商品形態の詳しい分析は「資本一般」を対象とした草稿 *Grundrisse* より後に執筆され出版された *Zur der Kritik der Politischen Ökonomie* において初めてなされたものであって、彼の『経済学批判体系プラン』に従って書かれた第一部「資本」第1篇「資本一般」の表題の下、その第1章「商品」と名付けられて生産の問題から分離独立させるような思考が浮かんで来て、商品や貨幣などの流通諸形態を生産過程論に先行させるプラン導入の契機になったと考えれば、そのような編成上の思考過程の進展そのものが、現行『資本論』の構成と展開に大きく影響を与えたことは否定し切れないだろう。

そのことでは、私は、マルクスが『経済学批判』では多用している交換価値という用法を『資本論』でも、「価値」でなく「交換価値」という表現で、第一部、第二部での価値の量的性格を一貫して表わしてくれればよかったと考えているのだが、それは、後で明らかにするように、マルクスの労働価値説が、あらゆる社会に共通な「自然法則」とされている社会的労働という考え方に起因するものであると思われるので、そこに根拠があるのであろう。しかしそのことによって生じる問題こそが、マルクスに理論的混迷をもたらしたのではないかということが、以下で展開する本論の趣旨にも含まれてくる。ただ、それにしても、生産価格という概念自体が、マルクスによれば、価値が「転化」したもののなので、結局、価値に最終的に規制されている対象だから、価値法則の支配は妥当するというような安易な説明しか用意されていなかったのであろうか。それでマルクスは満足できたのであろうか。もちろん宇野弘蔵の『経済原論』のように、資本と賃労働との関係を中心に価値法則を「証明」し、その普遍性をもって価値法則の貫徹の根拠と主張するものもある。しかしここでは話が複雑になるのでそれには触れない。

さて、マルクスは、価値なる概念を商品経済に特有な市場で自分の「生産物がどんな割合で交換されるか」という商品所有者としての想定から出発させておくことで、その根拠に労働を置き、資本主義的商品経済の一貫した把握としての価値法則を一義的に主張できるはずと考えたのだが、のち、古典派の労働価値説を継承しながら、リカードの価値修正論やロートベルトゥスの絶対地代の研究などを介して自ら生産価格論という新しい概念を定立し、その展開を図ったマルクスは、その後の『資本論』第三部の叙述の中で、同じ商

品の価値からの生産価格への「転化」という問題に直面し、いわば自縄自縛に陥ったように思う。そして自らの価値と価格との次元的な相違を無視し、両者を同次元での投下労働量の変化であると断じたところに、価値法則の命題の説明として価値と生産価格の総量一致命題と価値による生産価格の規制の根拠をおきう理由を見出したのではないのか。

ここでマルクスが自らその価値論の中で例示している、幾何学における三角形の面積の計算例を参照してみよう。マルクスは、まず、さまざまな直線形がすべて三角形に分割でき、その面積を計算するのに、三角形とまったく違った表現（底辺×1/2 高さ）に還元する。これと同じように、諸商品の諸価値は大小ある共通の第三者に還元される、と説明している。そしてそれらに共通物として存在するものこそ、労働生産物という「属性」だというのである（『資本論』第一部、大月版『マルクス＝エンゲルス全集』23a、50～51頁）。しかし三角形の面積の計算が、共通に底辺×1/2 高さに還元されても、それは三角形の面積を示す公式であって面積それ自体を量的に示すものではない。個々の三角形の面積は個々にその一辺の長さとその三角形の高さを尺度して計られる。そのためには物差しがあればよい。商品の価値を量るにも物差しが必要だ。ただその物差しがその商品の生産に供した労働の量であるという結論はとても出てこない。商品は形態であって、そもそも労働の生産物とは限らない。市場で他者の所有する商品との交換を期待するという性格はその所有者が持つ商品の共通の価値性格だとしても、それは交換価値（Tauschwert、exchangeable value）としての存在性であって、労働生産物としての共通性ではない。

私が今まで様々な機会に縷々述べていることはまさにそのことであって、マルクス自身から私が学んだことですらある。マルクス自身その価値形態論で、価値は他者を媒介せずに自ら尺度することはできず、交換価値として、最終的には価格でしか表現されえないことを述べながら、価値にたいする生産価格の区別をそこに求めることなく、両者を簡単に投下労働量に還元し比較しているのであって、そのことは大いに疑問としなければならないのである。それが、価値通りの交換を前提する立場からなお自らが完全には脱却できず、当然「資本一般」と「競争」論との区別などまだ方法的に確定していない部分があったせいだとしても、そこから『資本論』第三部それ自身の方法をめぐる晩年のマルクスの苦闘が始まることになってしまうことは確かのように思われるのである。

さて『資本論』第三部の冒頭部分でマルクスが明確に述べているように（この文章は正確にはエンゲルスの執筆になるものだとしても、ほぼマルクスの草稿に近い言葉で書かれていると言われている）、『資本論』のそれまでの第一部、第二部で科学的に分析され論理的に展開されている資本主義的生産の内在的本質である理論的概念規定を、具体的な市場で現われるブルジョワ的な現象形態に「転化」逆転させた第三部において、[資本一般]の中でその平均部分の代表単数にすぎなかった一般的資本を、個別的な資本として改めて規定しなおし、それによる社会的機構の編成という形で展開する過程の中に、いわば制服のような区別のない共通の衣装から様々に個々に変化を凝らした衣装に改めて再登場させようというのである。すなわち、第三部は、「全体として見た資本の運動過程から出てくる具体的な諸形態を見だし

て叙述することである。現実運動している諸資本は具体的な諸形態で相対しているのであって、この具体的な形態にとっては直接的生産過程にある資本の姿も流通過程にある資本の姿もただ特殊な諸契機として現われるにすぎないのであるだから、われわれがこの第三部で展開するような資本のいろいろな姿は、社会の表面でいろいろな資本の相互作用としての競争のなかに現われ生産当事者自身の日常の意識に現われるときの資本の形態に、一歩ごとに近づいて行くのである」（『資本論』第三部、大月版『マルクス＝エンゲルス全集』25a、33～34頁）と。

生産価格論との関連でいえば、これは生産価格が交換価値の具体的な表示価格だということを説明しているものといってよいであろう。しかしマルクスはその第三部で、まず最初にこのような形でその扱いを明示したはずの生産価格論において、それまで「資本一般」として括られて「資本の生産過程論」および「資本の流通過程論」で本質的で一般的な規定としてあった価値を個々に受け止める形態としては価格として現実には現われる以外にないという自らのその価値と価格についての基本的な観点を、その後の生産価格の具体的な説明では訂正してしまい、生産価格を同じく労働を実体とする価値の量的修正物として質的にも同質のものとして扱い、マルクス自身が価値量の実質的な「修正」の過程を通して、それをも「転化」の過程として容認してしまったのではないかと疑われるのである。だがこの処理は、第三部の冒頭で提示した方法との一貫性を欠くことになるのではないか。それがここでの検討の大きなポイントになる所である。問題はマルクスの商品の価値概念の規定にある。商品の価値規定から労働生産物であるというマルクスの規定を外した宇野弘蔵『経済原論』が、その生産価格論についてマルクスと同じ方法をとっていることは、折角のその「流通論」における理論的成果が、却って逆に一層その矛盾を露わにしまったといわなくてはならないであろう。

マルクス自身『資本論』第三部の冒頭の文章で一般的な形で明らかにしようとした筈の「転化」をめぐる主張と、それ以降での具体的な説明ないし処理における錯誤は、例えば、現行『資本論』のほとんど最後の部分である第三部の第50章に至ってもなお、「すでに明らかにしたように、諸商品の価値、または諸商品の総価値によって規制される生産価格」（『資本論』第三部、大月版『マル＝エン全集』、25b、1091頁）というような表現に見られるように、価値から「修正された」生産価格が「外観的な」（同上、1111頁）一時的な存在どころか、価値と生産価格が同格の論理的次元にあるかのような宣言を、「規制」という言葉で行なっているのである。マルクスにおいて、価値と生産価格がいわゆる労働の実体を共通しているところに「修正」・「転化」があることは繰り返し見てきた。「価値法則の支配」は「生産価格の支配」と呼び替えられることを自ら容認しているわけである。

マルクスは、『資本論』第三部の末尾に近い第7篇第51章では次のように語っている。マルクスの『資本論』を理解する上で逸することの出来ない叙述部分だと思われるので、特に引用しておきたい。すなわちマルクスはこう言うのである。

「資本主義的生産様式をはじめから際立たせるものは、次の二つの特徴である。

第一に、この生産様式はその生産物を商品として生産する。商品を生産するということは、この生産様式を他の生産様式から区別するものではない。しかし、商品であることがその生産物の支配的で規定的な性格であるということは、たしかにこの生産様式を他の生産様式から区別する。このことは、まず第一に、労働者自身がただ商品の売り手としてのみ、したがって自由な賃金労働者としてのみ現われ、したがって労働が一般に賃労働として現われるということを含んでいる。これまでに与えられた展開のあとでは、資本と賃労働との関係がどのようにこの生産様式の全性格を規定しているかをあらためて論証することは、もはや余計である。この生産様式そのものの主要な当事者である資本家と賃金労働者とは、そのものとしてはただ資本と賃労働の肉体化であり人格化であるにすぎない。すなわち、社会的生産過程が個々人に押印する一定の社会的性格であり、この特定の社会的生産関係の産物である。

(1)商品としての生産物の性格と、(2) 資本の生産物としての商品の性格とは、すでにすべての流通関係を含んでいる。すなわち、生産物が通らなければならないところの、そしてそのなかでは生産物が一定の社会的性格をとるところの、一定の社会的過程を含んでいる。(1)および(2)の性格はまた生産当事者たちの一定の関係を含んでおり、この関係によって、彼らの生産物の価値実現も、生活手段なり生産手段なりへの生産物の再転化も、規定されている。しかし、このことは別としても、前述の二つの性格、すなわち、商品としての生産物の性格、または資本主義的に生産された商品としての生産物の性格からは、価値規定の全体が、また価値による総生産の規制が、生ずる。価値のこのまったく独自の形態では、一方では、労働はただ社会的労働として認められるだけであり、他方では、この社会的労働の配分も、その生産物の相互補足すなわち物質代謝も、社会的連動装置への従属や挿入も、個々の資本家的生産者たちの偶然的な相殺的な活動に任されてある。資本家的生産者たちは互いにただ商品所有者として相対するだけであり、また各自が自分の商品をできるだけ高く売ろうとする（外観上は生産そのものの規制においてもただ自分の恣意だけによって導かれている）のだから、内的法則は、ただ彼らの競争、彼らが互いに加え合う圧力を媒介としてのみ貫かれるのであって、この競争や圧力によってもろもろの偏差は相殺されるのである。ここでは価値の法則は、ただ内的な法則として、個々の当事者にたいしては盲目的な自然法則として、作用するだけであって、生産の社会的均衡を生産の偶然的な諸波動のただなかをつうじて維持するのである」（『資本論』第三部、大月版『マルクス＝エンゲルス全集』25b,1124～1125頁）。

ここに引用したマルクスの言葉の中にみられるのは、あらゆる社会に共通の実体をなすと考えられている経済の「自然法則」（マルクスは資本主義の価値法則に対しても同じ言葉を使用している場合がある）が、価値規定の前提に置かれているという事実であり、その実体的根拠をなす労働が本来的に社会的な存在であるという指摘である。価値の実体の根拠である労働の社会的な本来の性質が、価値の社会性を初めから与えているということである。そのような

発想自体が資本主義社会という特殊な生産様式からの看取によってのみ成立するものであることはいうまでもない。一つの原理によって構成された社会というものの存在を、仮定的にせよ、理論的に想定できるのは、資本主義を措いてありえないからだ。これは人間にとっていわば客観的存在ともいいうる商品というものの外的性格を理解しているからこそ言いうることだ。唯物史観に基づいて歴史を輪切りにして、それぞれ独自の生産様式に基づく社会として区別しても、例えば奴隷制とか、封建制などでは、一つの原理で一元化できる社会など存在しえない。他方で、歴史的にも、地域的にも商品経済は至るところに散在していた。そして労働力の商品化が成立している一時期、そして限られた独特な地域や場所だけで成立した資本主義的商品経済を理論的に拡張させて作り上げたのが経済学の理論なのである。それをもって資本主義が唯一の原理をもって構成され得る一元的な社会として主張できたのである。それが可能だったのは、人間にとって外的存在である商品という対象が社会構成の単位だったからであり、よって自然対象と似た人間の外的認識の対象として科学になりえたからであり、かくて全体的な認識が理論的に可能なものとなったからである。もちろん具体的な資本主義社会というものが、国家をはじめとして商品経済以外の様々な外圍や歴史的、社会的条件や内的要因をもって構成されていることは断わるまでもない。資本主義以外の他の社会では、初めから主体的な人間の行動が決定的だからその可能性は無限であり、一元的に決定できるはずもない。唯物史観そのものが商品経済というものの成り立ちや商品自体の特殊な性格を十分理解しているものとはいえないのではないか。そしてそこから演繹されたマルクスの「自然法則」という理解をもってそれを全歴史社会に及ぼし、それを歴史観として主張しようというのは、土台、無理というものではないだろうか。

商品経済について先駆的に解明し輝かしい業績を後世に遺してくれた偉大なる先達マルクスに対して、あまりにも不遜な言い方かもしれないが、マルクス自身の真なる理解に従えばこそ、そうなる筈なのではないかということ述べているだけである。そのことは、すなわち資本主義的商品経済社会というものを経済の「自然法則」に還元してしまうという理解に潜む問題は、これまでのところ、内外のマルクス経済学者の間で、ほとんど問題にされなかったことがない様子だからなのだ。商品の価値性格というものが直ちに労働と結びつけられる根拠になってしまった。そのため商品の価値の性格をマルクス自身の叙述に従って、あれほど深く正確に明らかにした宇野弘蔵にしても、結局は、その労働生産過程論において商品の価値を従来の理解に従って、その実体を労働に依存するものとして論じ、「価値の生産価格への転化」も、マルクスの展開に従ってしまっている。宇野に学んだ私自身にしても、そこにしか価値規定の存在の根拠はありえないと信じていたのだが、それが理論上の「資本一般」という説明の中での資本の代表単数としての取り扱い上の仮定的な前提だと考えたにしても、どうしても無理があるように思った。なぜマルクスが労働価値説にこだわったかの意図は、あらゆる社会に共通な自然的前提としてそれらに通底する社会的労働という考えに基づくものであることは推測できたが、それで解決というこ

とはならない。価値という表現を、せめて交換価値にしておいてくれたら、量的問題は回避できたと何度も思ったことであつた。交換価値とは、市場で他の商品と交換したくてそこに置かれた商品の一般的な性格表現である以上、その価値が一定の量を期待するものであることは推測できても、それ自身が自ら確定できない表現であるからだ。それは交換されてみて初めて確定される。マルクスが折角自らが見出した商品の価値氷原の特徴的な論点を『経済学批判』のなかで提起しようとしながら、それをなお、「資本一般」の範囲内でその「序論」として位置付けてしまったところに、画期的な価値形態論を労働時間をその内実とする等価交換論的理解に誤解させる道を残してしまったように感じる。だが、すでに半世紀以上も前に、宇野＝久留間論争でそれは決着がついていた問題に過ぎない。宇野は商品経済の流通諸形態を生産から分離し、「流通論」を独立させることでなしとげた決着を、自ら「生産論」で逆戻りさせてしまったのではないか。

私の問題意識はそこに始まっている。結局、価値をどう規定するかが私の年来の悩みであつた。しかし、すでに何度も触れたように、マルクスは、その「転化」を価値の生産価格への「修正」にもとづく投下労働量の変化に起因する個別的商品における価値と生産価格の労働量の相違の発生としてとらえ、その差異についても、社会的に生産された商品量全体を合計すればプラスとマイナスが同値で、総量としては結局増減無しだ、と結論付けてしまって、総価値による総生産価格への規制として、問題自体を解消させていた。つまりそれで価値と生産価格との区別は事実上消えて、問題は価値一元論一色に染められてしまったことになる。このような形でそこでは価値と生産価格を合わせて価値法則の貫徹が矛盾なく主張されているというわけなのだ。マルクスの定義する価値の総量でどのように個々の価格による社会的な労働配分が規制できるというのであろうか。そこには価値の修正もやむなしとした先学リカードの考えたさまざまな工夫——例えば価値尺度となる商品を資本構成や資本の回転期間の中位にあるものと想定して総計一致命題を導くアイデアなど——の影響も考えられるかもしれない。実際そのことは、それまで意図してきたマルクスの古典派経済学のカテゴリー批判の一貫した視角とその結論に、価値と価格との特別な方法論上の乱れが入りこんできた疑いを持ち込むことになる。これらの異変は、マルクスの『23冊ノート』の後半のイギリス経済学、特にリカードの経済学を中心とする研究（かつてカウツキーによって編集出版され『剰余価値学説史』として知られた遺稿部分）の影響かと想像されるが、これはマルクスの経済学の構想が、「経済学批判体系」から「資本論」に変化してゆくきっかけとして簡単に見過ごされえない大きな問題ではないだろうか。生産価格の問題が初めてマルクスの意識に登場してくるというだけではない。それはマルクスが『資本論』第三部で当初考えていたような姿態の変化にとどまらず、価値と生産価格が表示する投下労働量における変化に及ぶたんなる姿態転換を超える内容の変化であり、事実上、価値論の展開になってきたからである。

『資本論』第三部は、マルクス自身が『資本論』第一部初版の「序文」で示したような実験による検証が不可能な経済現象に対して、実験に代わって人間の抽象力をもって把握した内在的で本質的な資本主義社会の経済構造を明らかにした上で、それが現実の姿態（Gestalt）へと再現するさまざまな種類の「転化」の過程であると述べたにもかかわらず、そこでは生産価格だけは単なる現実の市場に入り込む価値の価格形態への「転化」とどまらないで、特別の意味を持たされ、価値の量的に変形された代替物として、生産方法において一般的に資本構成や回転期間に相違が存在する以上、同一生産部門においてはもちろんのこと、競争下にある異部門間においても、平均利潤の成立を経て実質的には価値から生産価格に全面的に姿態を変えるだけでなく、そこに含まれる投下労働量までも変更して、価値に代わって体系の中で中核的に機能・支配する特別の存在のものとして扱われるように位置づけられたからである。もちろん周知のように、総価値＝総生産価格という総計一致命題なるものによってみられるように、マルクスによって「価値」は個々的にはほとんど修正されて事実上生産価格に代行されながらも、商品が販売されて得られる利潤は最終的には全面的に剰余価値に内面的な根拠を有するものにならざるを得ないものであるとされた。価値での等価交換で「内的な法則は、ただ彼らの競争、彼らが互いに加え合う圧力を媒介としてのみ貫かれるのであって、この競争や圧力によってもろもろの偏差は相殺されるのである。」（『資本論』第三部、大月版『全集』、25b、1125頁）というように最終的には等価交換がうまく成り立つという前提で価値法則の維持の根拠づけになるという主張に疑問が生じるのは、生産価格の登場が個別資本の市場の利潤率をめぐる競争過程を前提していることを、マルクス自身においてさえすではっきりさせているからであり、生産価格を論じる次元は、マルクスも一部想定しエンゲルスなどに引き継がれて広く事実として想定されていく等価交換なるものとは、何の関係もない筈だったからである。「内的関係」という言葉の意味が結局ははっきりしない。等価交換というのが、現実の交換を意味するものなのか、論理的な前提として仮定されたものなのか。

それにしても不思議なのは、あらかじめ知られるように価値概念と価格概念とは相互に比較の次元を異にする場で存在し、本来的には戦前のソ連でローゼンベルグがその『資本論註解』で古くからはっきり指摘していたように、生産価格は価値の価格表現である、と言った事実が、その後ほとんど消えているからである。したがって、もちろん、ローゼンベルグがそこで言っているわけではないのだが、ここで行なわれるような両者の量の比較はもともと不可能な範疇同士の筈なのに、それが一般に行われているのは、投下労働量に基礎をおく価値なるものの量的規定そのものが、いわば「資本一般」の中核をなす「資本の生産過程」論、「資本の流通過程」論の中では、総資本家から便宜的に代表単数的に単

一の資本が取り上げられて、その交換価値の内容が、設例の説明の便宜さもあって、その使用価値的内容とともに、その労働による量的規定が与えられているものとして、いわば一つの仮想的な前提のもとに行われたと考えられたのではないだろうか。しかし戦前、すでに翻訳され、かなり広く読まれていたはずなのに、ローゼンベルクの『資本論註解』も、生産価格が価値の価格表現であることの指摘はあっても、そこに留まっていた限りでは、ソ連での研究に別な意味での限界が画されていたのかもしれない。その点での日本の文献での言及も寡聞にして知らない。その本は戦後全く版を改められて（両者の版本や訳者などの相違については比較していないので分からないが、仮名遣いが現代仮名遣いではなく、旧仮名遣いでもなかったことは印象に残っている）出版されたが、その内容が話題にされることはあまりなかったように記憶する。戦後の、少なくともわが国の研究史においては、『資本論』第三部の価値と価格との関係についての理解は、リカードと同じような修正論の水準に立ち戻ってしまうことになりかねない。価値の大きさを計るのが価格であるという理解は本来マルクスのものであった筈なのに、である。

もともとリカード主義者であった Bortkiewicz の戦前の問題提起から「転形問題」がそのような形で始まったことがきっかけだといえればそれまでだが、一体どこでその価格の役割の変更が生じたのか、『資本論』の文中からはもちろん分からないが、それは後に「転形問題」論争の過程でやっと議論が出てくるまで誰もその異常さに疑いをもったことすらなかったようだからである。ただリカードを子細に見れば価値尺度の選定の仕方による総価格の変動の問題点について、その試みの一端をすでに初版、三版で別個に行なっているし、リカード理論の解説者であった James Mill は、総価値（価格）が賃金の一般的引き上げによって各資本の構成や回転期間の相違から各資本の価値（価格）変動に異なる違いが出てくることに気づいて、その著書である *Elements of Political Economy*(1824)の中で、転形問題に形式的には類似する例題を提示さえしているほどだ。リカード主義者たる Bortkiewicz が知らないわけではない。当然そういう理解がもとになっているものと思われるし、当時の Bortkiewicz のマルクス理解の上にリカードの問題意識が乗せられ、その理解水準がそのまま Sweezy に引き継がれた限りで、マルクスの解釈もまた、価値次元と価格次元を同一視する古典派の問題意識の域を超えられるものにはならなかったといわざるを得ないのではないか。

実際、また、商品の価値量がそもそも生産に投じられた（抽象的な）人間労働量で決まるといって古典派の労働価値説を継承したのもマルクスであり、他方で諸商品への投下価値量は他の商品の使用価値量において、最終的には価格という形でのみ計られることを明らかにしたのもマルクスであったことに間違いはない。すでに引用したように、マルクスは価値の由来が「生産物がどんな割合で交換されるか」という商品所有者の意識であり、それがある程度の慣習的固定性をもつまでに成熟してくれば、それは労働生産物の本性から生ずるかのように見える。…じっさい、労働生産物の価値性格は、それらが価値量として実証されることによってはじめて固まるのである」と述べていた。しかし、そのよう

な価値性格が、労働由来のものあるのかどうか、いままで縷々述べてきたことをここで繰り返さずとも、宇野弘蔵『経済原論』で何故に商品の価値規定から労働が除外されたのかの理由を考えてみれば、すでに了解できる筈である。

問題は、価値を労働量で計るという考え方と、価値は価格でしか表現できないという考え方との、理論的筋道が合致するものではないということである。前者の考えはいわば「資本一般」における生産の規定から出てくる思考で、本質的には、あらゆる社会形態に共通すると考えられていたマルクスの「自然法則」の理解に基づくものであって、結果的に古典派に近く、後者の方法は「資本一般」の「序論」的部分としてあとから執筆され、単独の著書として出版された『経済学批判（のために）』（zur Kritik は英訳では contribution となっている）に新たに纏められた形で登場してくるもので、商品の特徴づける要因を使用価値と交換価値としてとらえ、商品の価値性格を古典派の価値と明確に区別する視角を提供したものだ。さらにのち『資本論』初版の第一部においてつけられた価値形態論本文と付録の価値形態論の詳細な説明によって、その内容とそこでの厳格な弁証法的な展開方法が明らかにされ、それは読者の反応からその記述を存続させる必要性を感じたマルクスによって、『資本論』の再版以降は付録掲載方式はやめたものの、多少形を変えてその要旨を本文に組み込んだ価値形態論として単純化されながらも、重要視されつつ引き続き論じられるようになったものである。

これこそ『資本論』全体の中でもヘーゲルの弁証法に則って書かれたとマルクスとエンゲルスによって公言されている唯一の箇所であろう。1862年12月28日にクーゲルマンに宛てた手紙によれば、マルクスが特別にヘーゲル的に厳格な弁証法な方法をあえて採用せざるを得なかったのは、『資本論』の冒頭の商品形態の意義を理解させようとしても、読者があまりにも交換価値の意味を理解しなかったためのものであった。『経済学批判』

（1859）は「経済学批判体系」の第一分冊として1858年12月までに書き上げて原稿を渡したのだが、出版社がすぐ出してくれず翌年の7月にやっと本になった、とマルクスは先のクーゲルマン宛の手紙の中で触れている。ただその本の中で初めて明るみに出たマルクスの価値性格としての交換価値の強調は、古典派を受け継いだ労働価値説を根拠にする筋道と重なり合うものではないように思われる。

エンゲルスによる『資本論』第三部発行時にはすでに解決済みのものと信じられていた価値と生産価格の問題について、何故ここで新しく話題にしようとしているかは、本稿以前にも、すでにいくつかの論考で私はその問題意識を明らかにしているつもりだが、その一番の焦点は、『資本論』第三部というものが第一部、第二部の単なる続編ではないことが、19世紀末、エンゲルスが『資本論』第三部をマルクスの遺稿から散々苦勞した末に自ら編集し刊行して以来、読者にとって問題点自体その叙述からはっきりしていたにもかかわらず、現行『資本論』第三部の内容自体の全体としての不完全さ、典拠とすべき資料や草稿の不十分さなどの理由で、そのところの一般の理解が決して十分とはいえなかったと

ということと関係しているのであろう。分かりやすくいえば、*Grundrisse* に纏められているようなマルクスのいわゆる「経済学批判体系プラン」でいう「資本一般」とそれに続く「競争」、あるいはさらにその先の話との関連の問題になるが、そのこととの関係が、一方で、『資本論』第三部の第一部、第二部との方法上の根本的な違いの理解を読者に曖昧なままに残し、他方で、その方法がマルクスの従来から検討してきた古典派経済学に対する「カテゴリー批判」を通じて行なおうとしていた「経済学批判体系プラン」の継続と現行『資本論』第三部の内容が現実にかか合いを持っているか、またそれがどのような結論に結び付けられるのか、等々の問題を不問にしたままに残されてしまったのではないかという話にもなる。その点で直接に投下労働量と結びつけられて価値次元で語られていた商品価値の実体規定が改めて価格次元で再構成されるという形で語られるという方法上の理解に関係することになるが、そのことが、マルクスの実体論的な価値性格の把握と交換価値として把握する価値形態論的理解との矛盾の問題に関係してくることにもなるのであった。

4

さらになおここで断っておかなければならないことがある。それはヘーゲルの「論理学」とマルクスの『資本論』との関連の問題だ。関連といってももちろん内容の問題ではない。その展開の方法の問題であり、そこでの類似性の指摘の問題である。もともと知識がないので深入りはしないが、両者の関連についてレーニンの『哲学ノート』から始まって多くの哲学者の関心を呼んでおり、日本では特にマルクス経済学者をも巻き込んで一時は大いに論争に賑わいを見せたことがある。宇野弘蔵自身も秘かにヘーゲルの「論理学」における弁証法的展開におけるその方法に対する自らの『経済原論』の体系構成における近似とその観念論から唯物論への逆転的利用の可能性を、経済学の原理の展開の中に見出そうとしていた。（参照、松村一人訳『ヘーゲル小論理学』自蔵本の目次に書き込んだ宇野の手遊び、『宇野弘蔵「資本論」と私』御茶の水書房、2008年、口絵）。最近では、宇野派の殿将ともいえるべき関根友彦（『私が学んできた経済学—新古典派理論から宇野理論へ』社会評論社、2024年、に含まれる関連諸論文を参照）が、ヘーゲルの「論理学」とマルクスの『資本論』との比較とその適用を強く主張していた。

両者の比較を問題にする者は、「有論」、「本質論」、「概念論」からなるヘーゲルの「論理学」体系のトリアーデに『資本論』の三部構成を当てはめようとする。宇野『経済原論』の「流通論」、「生産論」、「分配論」も、そのような問題意識を有していたが、岩田弘の「原理論」の考え方はさらにヘーゲルを意識しているようだ。ヘーゲルが抽象的に言っていることだから、その解釈はかなり恣意的になるといい。岩田弘はのち自著の展開の中では、ヘーゲルの「概念」とその「発展」を資本主義の生産力の世界史的発展から株式会社、そして金融資本へとさらに転回させ、その「内面化論」をもって「原理」と名

付けた。それでは経済学の「原理」とは呼べないと思い、何度か批判したこともある。岩田は折角ヘーゲルとマルクスとの対応に着目しながらそれをうまく利用できなかったというべきだろうか。確かに、マルクスの『資本論』第三部に至って行なった方法の切り替えは、ヘーゲルの「概念論」の指示する内容に、その抽象的性格については近似するようにできていたとはいえるからである。「概念論」で「本質論」を経由した現実への復帰を説く方法はそのものとしては目指すところが事実として似ていたのかもしれない。

ただ、マルクスが漠然としたヘーゲルの方法やその手法に関心を示し影響を受けたことはあったとしても、彼が長年続けていた「経済学批判ノート」やその中のプランにはその展開の方法の適用は見られないのではないだろうか。マルクスの『資本論』の体系構成方法に影響を与えたのは、むしろ J.S.ミルの経済学の方法（下向、上向の方法論）、あるいはリカードに代表されるイギリス古典派経済学の「経済学原理」の編成方針だろう。とくにリカードの体系はマルクスが気になったように見える。マルクスは経済学のノートの執筆過程で「経済学批判ノート」に継続されていた従来の国民経済学のカテゴリー批判からイギリス人の「経済学原理」に刺激されてか、内容の構成もイギリス古典派に倣ってヘーゲル的とはいえない別種の体系的なものに作り上げ、マルクスが目指していた著書の名称も長年使用してきた「経済学批判」から「資本」に変えるほどであった。名称を「資本」に変えたからには、ノート自身も「資本論ノート」に代わるわけで、彼は多分自らの著作の内容と方法もその機会にある程度考え直したのではないかと推察する。これは大きな変化であった筈だ。

さらに、簡単に付け加えておくと、ある時期マルクスはそれまで行なってきた「経済学批判」のタイトルを改めて『資本（論）』としたことが、その第一部の「初版」の「序文」やその第二版の「あとがき」、あるいは友人クーゲルマンに宛てた書簡などに一種の決意として現われてくる、あるいは暗示されているように感じる。「資本主義の経済的運動法則を解明」する、あるいは、「それは…核心であって」、「イギリス人が『経済学原理』と呼ぶもの・・・が含まれている」、とあえて断っていることも、ここで大いに注目されるのである。それは従来の経済学のカテゴリー批判にとどまるものでなく別な目的を追求するものに变化してゆく可能性を含むからである。これは新しい経済学の着想が秘められていたと考えられる新規の『資本論』体系と、従前のプランである「経済学批判体系プラン」との関係はどうなっているのだろうか、という疑問にも通じていく。

マルクスはある意味では常識的に、今までやってきた「経済学批判体系プラン」の仕事とこれから完成させようとする「資本」論との共通性をいわば型通りに語ってはいるが、マルクスはそこでは自分の構想する『経済学原理』は「資本一般」を指しているだけで、当然「競争、信用」は含まれていないと述べている。しかしイギリス人のいう“Principles of Political Economy”＝「経済学原理」には、「競争論」も「信用論」も「地代論」も一般に含まれるのである。もともとの「経済学批判体系プラン」の中では「資本一般」の上位の項目の「資本」という中項目の中に「信用制度」や「株式資本」の名称が含まれていた事

実はあったが、その草稿は当時はいわば準備中で予定が存在するだけであり、とりあえずは次の「経済学批判」の分冊は内容を「資本一般」の範囲にとどめていたようである。しかしその頃、著書の題名を変更した。内容はおそらく *Grundrisse* のそれではなくて、もっと均整のとれた最初の「資本論第一部草稿」であったと思う。しかもクーゲルマンへの手紙によればこれが『資本論』と改名されて、『経済学批判』に続く第二番目の出版物になる予定であったようだ。「経済学批判ノート」との関係がはっきりとは分からないが、丁度、本の書名を「経済学批判」から「資本」に改めると言っていた事情から考えれば、そこに構成上の変化があったとしてもおかしくない。これが当初は「経済学批判」の第二分冊を構成する筈のものだったのだろうが、途中で全体の構成が変わってきたと考えるのが順当のように思う。つまり、「経済学批判体系プラン」の「競争」論以下の内容部分を「資本」第二部ないし第三部の方に任せて、全体としては体系的にイギリス風の「経済学原理」風に纏める形にすればいいのだし、そうすれば、「資本」第一部だけでも、イギリス風の『経済学原理』の「核心」部分の一部は含むことになる、というのがマルクスの言い分であろうというのが私の推測である。ただ、もともと『資本論』の三部構成は発想の土台がイギリスの古典派の経済学と違うから、類似があったところで、ごく外面的なものにすぎない。

「経済学原理」といっている以上、次の分冊（第二分冊）で仮に「資本一般」を、例えば *Grundrisse* を基にして仕上げれば、当然、継続する第三分冊以降でプラン上の様々な展開がみられることになったかもしれない。しかしその計画は中止になって現在の『資本論』になったのであろう。そうなればそうなったで、『資本論』全三部が、結果的にイギリス人の言う「経済学原理」の内容に近づくことは容易に予想される。そこにこそ、イギリス風の「経済学原理」にあっても共通の「核心部分」があるということをマルクスは強調しているのであろうか。

しかし少なくともマルクスは自らの新しい構想の下での『資本論』において、それらを書こうとしていたことは明らかであろう。内容は「資本一般」を超えてとりあえず競争や信用、株式資本まで書く、という気持ちがあったようにも読めるかもしれない。基本的にはマルクス自身の草稿に基づく現行の『資本論』の内容や構成はそれをいわば裏付けているように見えるからである。「経済学批判」の名称は副題として『資本論』に残したとしても、「経済学批判」研究としての続編の「資本論草稿」の原稿は、内容の実態はともかく、性格はほとんど現行『資本論』草稿として扱われるように変わってしまったと見られる。両者の継続性はあるのかないのか明瞭には分からないとしかいえない。もともとのプランには見当たらず、マルクスが後から付け加えたと思われる差額地代論の位置づけ、あるいは新しく発見した絶対地代論の追加なども同じように論争の焦点になろう。それらの変化については、ほとんどマルクスが典拠にできる資料を残していないだけに、マルクスに先行する当時のさまざまな話題や検討課題を含む詳細な理論的著作であったと考えられるリカードの *On the Principles of Political Economy, and Taxation* (1817, 3rded, 1821) はもちろ

んとして、その後に現われる James Mill の *Elements of Political Economy* (1823) や George Ramsay の *An Essay on the Distribution of Wealth*, (1836)、それに McCulloch の幾版にもわたって書き直された *The Principles of Political Economy* (1825) など、当時の代表的なリカード主義者の経済学原理の存在がマルクスの脳裏にどのような形で影響を与えたのかの考察をするには極めて興味深いものがある。

5

想像をあまり膨らませないであとに残し、話を元に戻そう。これから紹介する引用文については、読者が『資本論』全三部を最初から読み進めていけば、価値から生産価格への「転化」が抽象から具体への論理の一貫した展開のように見えるかもしれないし、弁証法などという先入観に過度に毒されている人は、第一部と第二部から第三部に至るや現われる論理の突然の屈折に気づかない場合があるかもしれない。ヘーゲル「論理学」の「概念論」にまで思いが及ぶ人は稀であろう。大事なポイントを読み飛ばしてしてしまった人のために、この論文でもその一部はすでに扱ったのでくどいようだが、ここでもあえてもう一度引用する。

「第一部では、それ自体として見られた資本主義的生産過程が直接的生産過程として示している諸現象が研究されたのであって、この直接的生産過程ではそれにとって外的な諸事情からの二次的な影響はすべてまだ度外視されていたのである。しかし、このような直接的生産過程で資本の生産は終わるのではない。それは現実の世界では流過程によって補われるのであって、この流過程は第二部の研究対象だった。第二部では、ことに第3編で、社会的再生産過程の媒介としての流過程の考察にさいして、資本主義的生産過程を全体として見ればそれは生産過程と流過程との統一だということが明らかになった。この第三部で行なわれることは、この統一について一般的な反省を試みることではありえない。そこでなされなければならないのは、むしろ、全体として見た資本の運動過程から出てくる具体的な諸形態を見いだして叙述することである。現実運動している諸資本は具体的な諸形態で相対しているのであって、この具体的な形態にとっては直接的生産過程にある資本の姿も流過程にある資本の姿もただ特殊な諸契機として現われるにすぎないのである。だから、われわれがこの第三部で展開するような資本のいろいろな姿は、社会の表面でいろいろな資本の相互作用としての競争のなかに現われ生産当事者自身の日常の意識に現われるときの資本の形態に、一歩ごとに近づいて行くのである」(『資本論』第三部、大月版『マルクス＝エンゲルス全集』25a、33～34頁)。

これは、すでに一部は文中で引用したが、『資本論』第三部における方法を説いた決定的に重要な表現であると思う。ヘーゲルの「論理学」体系でいうトリアーデの最後の「概念論」と同じような構想を想定することはできるかもしれないが、ここではマルクスは次の「競争」論への過渡的な説明をしているにすぎない。なお類似の表現は、『資本論』第

三部では見られないが、*Grundrisse* であるとか、その後の『23冊ノート』などの『資本論』以前の草稿の中の片隅に、ここではまだ「競争」論に入っていないので、本来、論じてはならないことだが、ついでに触れておく、というような但し書き付きで、しかも『23冊ノート』の途中でマルクスが生産価格（当初は、「費用価格」という名称で呼ぶことが多かったが）の概念化の必要性に初めて自ら気づいた前でも後でも変わらず、同じような筋道で何度か簡単に語られていたことは、それらの草稿をご覧になった方々はすでにご承知のことと思う。ただヘーゲルの「概念論」にみるトリアーデの最後ではなく、あるのはあくまでもブルジョワ経済学のカテゴリー批判の系譜上での資本の競争から生じる「顛倒」あるいは「逆転」の論理の展開である。

生産価格という『資本論』体系の全体にわたって大きな意味を持つ新しい概念の登場であることを考えると、やや意外に思うのだが、資本の有機的構成の低い農業部門からの剰余価値の取得の可能性の高さを確認することで、リカードになかった絶対地代の根拠を得たという満足だけで、マルクスはここでは生産価格の問題をそれ以上には重視していなかったのかもしれない。価値と生産価格の差額の大きさということが絶対地代発見のヒントなのだから、両者の比較の意味の重要性にもまだ十分には気づけなかったようである。しかも散見するそれらのマルクスの覚書には、従来からのブルジョワ経済学的カテゴリー批判の言葉はあるもののヘーゲル的なトリアーデ表現は全く姿が見られず、むしろそこには古典派からの影響を強く感じてしまう。

6

ここでの第三部の草稿段階では、上の引用文からも想像できるが、マルクスがまだ『資本論』の第二部「資本の流通過程」を直接的生産過程の成果としての資本の生産物である商品の販売過程としてしか把握していなかったことなどから、第一部の初版執筆段階のマルクスの理解との共通性を思い浮かべるかもしれないが、逆にこの段階で、すでにマルクスが「資本一般」に続く「競争」、「信用」、「株式資本」の各項目を「資本」という上位の大項目に纏めようという構想を反映させたプランを多少形を変えても生かそうとするそのような第三部の方針を、すでに堅持する方向にあったと想像することの方が注目すべきことであるかもしれない。ただそれはまだ「資本一般」の範囲内なのか、もう、それとも「競争」論なのか、「競争」論に入ろうとしている「入口」の場面なのかどうかは、必ずしも判然としているわけではない。先にも述べたように、「経済学批判体系プラン」から『資本論』へと構想を変えたとみるか、それとも、表題だけの問題として内容の継続性を重視しているかは、今後の研究にお残された課題だからである。もちろん生産価格論を別にして、第1章、第2章及びそれに関連する諸章の展開はいいとしても、「競争」論については、他にわずかに散らばって残る「競争」論の断片的な記述やプラン問題との関連から、「競争」論の内実をある程度想像させているに過ぎないことには留意されたい。

そういう点で問題があるとすれば、むしろマルクスが折角付けた「総過程の諸姿態」というプランにもすでに表われていた『資本論』第三部全体の表題を、エンゲルスが「資本主義的生産の総過程」に改めてしまったことであろう。前者に示された表題の意図は当然先の引用に示されているマルクスの狙いから理解できる筈だからだ。そこに先の引用文に見られたようなマルクスの大きな問題提起が潜むかもしれないと思われるのだが、エンゲルス自身は、それには一切触れず、すぐに費用価格と利潤の説明に入っていく。その表題の変更はエンゲルス自身の何らかの意図に基づいていたと考えるべきであろう。少なくともエンゲルスは、マルクスが付した表題が第三部全般に及ぶものとしては認めたくなかったのではないか。確かに現行『資本論』第三部第3篇以降の展開では、「総過程の諸姿態」の変化などにとどまらない「資本主義的生産の総過程」に相応しい動態的变化などの叙述がみられるといってもよいかもしれないからだ。

7

しかしマルクスの第三部の草稿では費用価格より先に利準率の問題を説いていたという草稿の解釈もある。実際マルクスは『23冊ノート』の中でリカードの価値修正論の熱心な研究を進める過程で、リカードに倣って詳しい利潤率の各種検討を行っていた。ただエンゲルス自身はここでは費用価格を説いたのちに剰余価値のブルジョワ的姿態である利潤へ、そしてさらに総資本の五部門分割から次の平均利潤の姿態を説く第2篇に進んで行くのであって、回転期間の問題など明らかにマルクスが意図しながら説くことが間に合わなかった関連する問題も含め、当初のマルクスの方法論的意図に沿って第1篇を展開し、その上で第2篇「利潤の平均利潤への転化」への論理を進めているといえる。つまり最初の商品価値のブルジョワ的範疇である費用価格と平均利潤の問題、要するに生産価格概念成立への導入の問題に入っていくのである。すなわち第1章の費用価格の問題に続いて第2章以下で利潤率についての様々な問題を取り上げ、本質的な剰余価値が具体的に市場に現われる現象形態である利潤（率）の種々の特徴を論じた上で、付随する諸問題を次々に解決しつつ、次の平均利潤率の問題の準備に入り、全面的な形で生産価格の成立の根拠と姿態が説明されるということになってくる。

ただその説明は極めて静態的で、示されるのは結果としての生産価格の成立だけで、成立の根拠となる個別資本の市場での競争の動態は示されていない。むしろそれらは一方で社会的総資本の単なる分割部分であるように説明されながら、他方では、一つの会社の部門と見做されたりするような場合すら例示されるのであって、「資本一般」の範囲をなかなか抜け出せない印象がある。むしろ「資本一般」の範囲に限定された展開ともいえるほどだ。そもそも「資本一般」の領域でどのようにして価値による社会構造を描くことが出来るのだろうか。社会的諸関係を内包しつつも一つの構造体として抽象化され前提されている「資本一般」の中で、資本の構造を一つの資本を代表単数的に取り出して抽象的一般

的に例解している資本の生産過程論や流通過程論で、どのような――仮想的にしろ――資本相互の社会的諸関係を構築できるのだろうか。使用価値を基準とする二部門分割が唯一可能であるだけなのではなかろうか。「内在的」分析といっても、所詮は成立した市場の競争関係からの投影の逆転ではないのか。有機的に連関した生産と流通の社会的編成が可能だとすれば、出来上がった資本の競争関係の中に成立している市場を描いてはない。つまり「競争」論に入るしかない、ということになる。『資本論』第一部、第二部の範囲では、「価値」なる概念による社会的な諸関係構成の構築は所詮不可能であり、生産価格の成立によってしか社会的均衡構成の成立は不可能なのではないか、ということではないか。そして第三部が「資本一般」から「競争」へのそのための準備過程であることだけは間違いない。先に批判しておいたあらゆる社会に共通な社会的労働配分を前提しているという議論はとりあえずここでは触れず、別にして、この後に残しておく。

ただ、それにもかかわらず、市場における個別資本間の競争については、明瞭に第10章の表題にこそなっているが、本来の第9章の表題ではなく、内容も第9章では結果として成立している生産価格の表示があるだけであり、マルクスはその成立の過程である競争にもまったく触れていない。ここだけではない。本文の他の部分でも論じられることは極めて稀だったのである。第10章が自らの表題に「競争」を示したとはいえ、そこではもっぱら、極めて狭い範囲内で、同一部門内での競争を扱っているだけといってよい。なぜなのか。実際にはマルクスはリカードの詳細な研究に啓発されたのか、資本の競争関係の中での平均利潤についてのさまざまな類型について費用価格に先んじて研究している跡がその草稿などに見られるように思うのだが。

だから問題はマルクス自身が第三部はもはや「資本一般」の領域を超えようとしているにもかかわらずなかなか超えられないでいるという事実にある。エンゲルスの編集でも、資本の市場における競争の相互作用に向かう方針に従っているように見られる。上述の第10章「市場価値論」などの展開では、同一部門内の競争が主たる内容をなすものの、表題では部門間の競争を掲げ、僅かながら部門間競争の要因や、需給変動などの外的要因も加えて、さらに市場価格による競争の現実の描写さえもが部分的に加わっている。のちの第3篇や第5篇などもそうだが、なかなかマルクスが最初に述べたような単純な方法では問題が十分説明しにくくなってくることも事実だ。しかしそれは論理的展開の方向性の変化とはまだいえないだろう。

ただ現行『資本論』第三部での最終的な結末となっている最後の第7篇「諸収入とそれらの源泉」は、「三位一体的定式」、「生産過程の分析のために」、「競争の外観」、「分配関係と生産関係」、「諸階級」などの5章に分かれているが、全体として第三部が該当する当初の趣旨でもあった「ブルジョワ経済学のカテゴリー批判」に沿った取りまとめの役割を果たそうとするものではあるようだが、内容が簡単で中途半端に終わり、現行の『資本論』第三部の内容を総括して意義づけるものとも考えられないように思う。先にも引用した現行『資本論』第三部の冒頭で示されていたマルクスの言葉によれば、第三部は、第一

部および第二部で説かれた資本の姿をたんなる諸契機とするような、現実の競争下の資本の総体的な展開そのものの動きを明らかにするものだったはずだからである。まさに現行『資本論』第三部は、マルクスの部分的に残る、そしてその後のエンゲルスによる一方的な継承とその混迷を、そのまま映し出している部分のような印象さえ受ける。第7篇だけとれば、無理に断片を纏めた雰囲気はあるにしても、そういう点を拾い上げて考えると、第三部の草稿の研究が進んできた今でも、どうしても現行『資本論』第三部からはマルクスの意向が十分はっきりとは読み取れない以上、われわれ後の研究者の推測が入らざるを得ないかもしれない。その点は従来絶対的存在として疑わなかったマルクスの記述の解釈にひたすら明け暮れてきたわれわれにとっての大きな冒険でもあるが、こうした推測を交えたマルクス解釈は、理論的解明への前進の道にも繋がる可能性を秘めるものであるように思う。

さて話が少し問題から離れそうになってきたので再び元に戻すことにして、価値と生産価格の話題に帰ろう。

8

先にも述べてきたように、現行『資本論』第三部に入れば、すぐ第2篇で、例の価値と生産価格の矛盾とみえるものが、マルクスによって天才的に解決されたのだとする『資本論』第二部、第三部の前後に別途つけ加えられている「序文」や「第三部補遺」などによるマルクスへの賛美にあらかじめ彩られたエンゲルスの追加説明に接することになるわけだから、第三部の本文の冒頭で、一応以後の叙述とは区切られた形で独立に、マルクスが淡々と語っている先に掲げた第三部における論理展開の次元的な相違に基づく論述の方法の変化に対する序論的な注意にはほとんど気付かず、なるほどなるほどといって価値の生産価格への転化を価値の具体的な展開過程として読み続ける読者がいてもおかしくはない。しかしそこにむしろ、潜んでいた筋の通らない奇妙さが露呈してくるのである。

ともあれ『資本論』第三部は、第二部もそうだが第三部はそれ以上に、マルクスの遺した不完全な草稿をエンゲルスが独自に編集に手を入れて補筆し完成させたものだったから、編集上の不備はある意味では仕方ないところもある。とはいえ、マルクスとの長年にわたる交流の成果、そしてエンゲルス自身の知見とその献身的努力がなかったならば、『資本論』全体の意義づけは勿論、生産価格、商業利潤、信用、利子、地代その他の剰余価値のブルジョワ的な配分機構や経済学批判で一貫して明らかにしようとしたマルクスのブルジョワ的経済カテゴリーの本質の暴露を理解することも出来なかったであろう。これらはエンゲルスの不滅の功績といって讃えても間違いなからう。しかし、だからといってエンゲルスの編集に問題を感じてその不備の原因を探る努力をわれわれがしないでもいいというわけではない。あらゆる権威を否定して自由に考えようとする科学的精神にとっては、対象の科学的検討は相手が「千年に一度の天才」と言われる巨人マルクスの言説であっても、その戦友の尽力の結果であっても、もし論理に難点があると思えば避けては通れ

ないだろう。

エンゲルスの前に置かれた膨大なマルクスの遺稿が不十分なままで、論旨も不徹底で展開の順序にも曖昧な部分があったとすれば、そこに問題が生じるのはいわば当然のことだ。そしてマルクス自身においてさえも思考が十分行き届かなかった部分が残っている可能性がありうることもさへも想像できる。最近の第三部の草稿自体の研究を参照しても、難解で各種の表現をとった記述からだけでは一貫した理解が難しい箇所も結構あるようだからである。そういう疑問から第三部を読み返してみると多くの問題が出てくることもあるだろう。ここでその全部には到底触れることはできないが、代表的な生産価格概念に関わる問題を取り上げて今は検討している。一つの問題に絞るといっても当然周囲の関連する多くの問題点にも関わらざるを得ないことはあらかじめ承知しないわけにはゆかない。といってもここで扱っている問題は主として現行の『資本論』第三部に既に存在していた問題点の一つで、その点で新しい発見がその草稿の中に見られるかどうかの話だとしたら、今迄のところでは多くを期待することが出来るわけではない。むしろマルクスの不十分さが明らかになることも多い。もちろん残された問題を解決してゆくことは研究の醍醐味である。とりあえずここでは、マルクスが何故価値の形態にすぎない生産価格概念をかくも決定的に重要視したか、という問題を検討している。

まだ私自身ではっきりした回答を得ているわけではないが、マルクス経済学にとっては重要な問題だと考えて手を着けてみた。

9

そのことはすでに説明を加えたことでもあるが、第三部の第2篇「利潤の平均利潤への転化」以下に入るとマルクスは、総資本を同量でただ資本の有機的構成だけ異なる五つの資本に分割して、投下資本の資本構成の違いに応じて別額の剰余価値を産出するものとした上で、それを改めて同額の投下資本量全体に比例するような割合で平均利潤として総剰余価値を再配分するのである。そしてその再配分された平均利潤を費用価格に加えたものをもって生産価格として改めて定義し簡単に解説する。マルクスが行なっている価値の生産価格への転化の説明はとりあえず以上のものでしかない。繰り返すように、生産価格が出来上がる仕組み、マルクスの言う価値から生産価格への転化の過程、つまり市場における各資本の競争の成立の問題には触れていない。当然、マルクスは等価交換なるものを前提することになる筈だが、そして他の場所で、それに触れている場合もあるが、ここでは触れず、結果だけ記すという非常に形式的な説明で終わっている。繰り返されるのは価値と生産価格のそれぞれの総計は一致するという命題である。

次の第10章は、周知のように「競争による一般的利潤率の平均化」という表題を持つのであるが、そこで展開されている説明の大部分が同一部門内の資本の競争であることは周知のとおりだ。生産価格論と「競争」論との関係は依然として謎めいているといつてよ

い。「資本一般」に対して「競争」論の存在感がどんどん薄れてしまう。生産価格論がなければ、以前のプランにあった「資本と利潤」のままでよかったのかもしれないが、それも実質的には放棄してしまった。そして最終的に採られたその方法は、結局現行の『資本論』第三部に示されるようなものになっているわけだ。

マルクス経済学への批判が労働価値説および価値と生産価格への「転化」の問題に集中している段階で、エンゲルスがいわばマルクスの代弁者として立って、さまざまな機会にそれらの批判に反批判を繰り返したことが、その後も広く影響を与えて、その追従者あるいはその批判者を輩出させつつそのまま現代に至っていることが、この問題を取りわけ根本的な問題として従来のマルクス経済学においても依然重視させているのである。

しかしある意味で今や総価値＝総生産価格の命題に関わるような無駄な議論にはここではあまり触れないことにしたい。ここではそのような論争以前の手続き問題の基本的な理解についての議論の範囲にとどめることにしよう。労働価値説の説明などについては、簡単なものから数学的に精緻な試みまで無数にあるが、ここではそのようなものにも触れない。マルクス経済学の議論の本質から離れていくばかりのように感じるからだ。

そこで、私の頭が多少でもまだ動いてくれている間に、繰り返しも多くなるが、できれば多少とも新しい知見も加えることが出来たらそれも含めて、議論をもう一度纏めておきたいということが今回の企ての目的となった。多くの論者は気になっていないのかもしれないし、あるいは、マルクス経済学の核心に関わる問題であるだけに、敢えて従来はあまり触れなかったという事情があったのかもしれない。何しろマルクスの言説が聖典化され、それを批評することさえもがタブーになって久しいからである。しかしすでにタブー化を排して新しい境地を早くから目指していた宇野派を別にしても、最近になると、マルクスの遺稿の解読者の率直な発言などに接することが出来るようになって、風通しも大分よくなり、事情がやや好転してきたような気もする。科学的な批判を妨げる理由などあるはずがない。もちろん宇野理論に学んだ私自身は、そのことをすでに何回も話したり書いたりしているが、私は別にマルクスの批判を目指してやっているのではなく、たんに科学的立場からする理論的興味だけからのものであることをあらかじめ断っておきたい。推測が入ってしまっているが、いってみれば、私はマルクスに何か勘違いがあるのか、とさえ思っている点があるからである。どうしてもマルクス自身が現行『資本論』第三部で説明する生産価格概念が、彼が本来構想していた価値概念の展開とは理論的に整合しない、という推測である。もちろんそれは私個人のものであって宇野理論とは関係ない。ただ、もともとは、マルクスから、そして宇野から学んだ結果からもたらされた帰結にすぎないものと考えているだけである。

研究はもともと個人で科学的見識に基づいて行なうものであって学閥、派閥で衆をなして主張するものではない。宇野理論は初めて経済学が社会科学であることの根拠を説明した理論であっても派閥、門閥の仕切りではない。何のためか知らないが、時々われわれの個々の主張についてそんなことを恥ずかしくもなく書いて平気な研究者を名乗る人間がい

るから、あらかじめ断っておく。大した推測ではないし、私が誤っていれば改めるにはばかる所はない。ただ正解を知りたいだけなのだ。自らの理解を示してその当否を問うているだけなのだ。実際、私はこれによってマルクス経済学は駄目だというつもりはない。むしろ逆で、マルクス経済学の理論こそ社会を対象として成立する唯一の科学・社会科学であると考えている者であるからこそ、検討は科学的に可能だろうと思っているだけのことである。

10

そういうわけで話を始めたのでそろそろ終わりにしたいのだが、そこに至る自分なりの理論的進化あるいは変遷の過程は、およそは触れたが、詳しくは省略する。すでに大体は他ですでに話したり論文などで書いたりしたことも多く、変化はあってもその研究の方向性は変わらず連続していて、基本的な論理展開も修士論文以来の問題意識に従って切れずに継続していると考えからである。

ここで最後に述べておきたいのは、問題の理解における要点としての社会的労働配分という概念の扱いである。私は本文の中でもすでに指摘したが、それがマルクスのいわゆる労働価値説の根拠になっていたのだと考えている。生産価格は価値に還元され、価値は普遍的な社会的労働配分の量的規定に還元されるという筋道だ。この考えの根本はマルクスの世界観としての唯物史観だと思うが、宇野理論で使われるあらゆる社会に共通の「経済原則」と言い換えてもよいと思う。社会的労働配分といっても、それぞれの社会あるいは地域がそれぞれのやり方で社会的な労働の有機的な配分をできるだけ均衡的に、事実上、行なっていることを指すのであり、それなりの特徴をそれぞれもって実施されていることであろう。それが社会的な自然原則を維持できるようなやり方で機能しなければ、社会的労働配分には失敗して社会は暴動や混乱そして戦争、さらには革命騒ぎなどによってより大きな改革を要求されるか、あるいは崩壊の道をたどっているだろう。そのいくつかの守るべき社会的原則を維持できてこそ、社会的労働配分が有効に実現されているということは明らかであるといっているであろう。

マルクスはそのような理解を前提した上で、社会的再生産過程の生産手段と生活手段の生産への総資本の二部門分割と相互の商品の交換による社会的に必要な生産手段と生活手段の確保を通じて、個々の様々な商品の生産とその交換、分配、消費を実現する、その特殊な資本主義社会が、全体として有効な社会的労働配分機能を有する一社会であることを、『資本論』第二部の第3篇「社会的総資本の再生産と流通」において、初めて明らかにしたのであった。それはマルクスの大きな功績とみてよい。

しばしば引用されているので今更繰り返すのも煩わしいことだが、マルクスは友人のクーゲルマン宛の1868年7月11日付の手紙で、こんなことを書いている。

「・・・いかなる国民でも、一年間はおろか二、三週間でも労働を停止しようものなら、たちまちまいってしまうということは、どんな子供でも知っている。また、種々の欲望の量に応じる諸生産物の量は、社会的総労働の種々のそして特定の分量を必要とするということもどんな子供でも知っていることである。このように社会的労働を一定の割合で配分する必要は、社会的生産の一定の形態によってなくされるものではなくて、ただそのあらわれかたがかわるにすぎないことは自明である。自然法則をなくすことは決してできないことである。いろいろの歴史的状態につれて変化しうるのは、それらの法則が貫徹される形態だけである。そして、社会的労働の連関が個人的労働生産物の私的交換としてあらわれる社会状態においてこの労働の比例的配分が貫徹される形態がまさしくこれらの生産物の交換価値なのである」(『クーゲルマンへの手紙』国民文庫版、87～88頁)。

資本主義経済の実現が商品の「価値法則の支配」によるものであることを『資本論』全体を通じて明らかにしたとマルクスが繰り返し主張する背後には、こうした考えが存在していることに間違いない。生産価格は価値に還元され、価値は社会的労働配分の成果に由来するという筋道だ。マルクスの労働価値説への思い入れはそこに根拠を持つのであろう。ちなみにマルクスの継承した古典派経済学の労働価値説には、このような資本主義の特殊歴史性に対する認識がまったく欠けていたことは、ここで改めて断るまでもないであろう。なおこの手紙の中の最後の「社会的労働の社会的連関が個人的労働生産物の私的交換としてあらわれる社会状態においてこの労働の比例配分が貫徹される「形態」がまさしくこれらの生産物の交換価値なのである」の末尾——「『形態』がまさしく生産物の『交換価値』なのである」という表現が、従来の使い方と相違するように感じて注目するのだが、マルクスがその表現をどう理解して使用していたのかは分からない。

ただマルクスにとっては、資本主義を支配する価値法則なるものが、生産価格という概念が新しく彼の経済思想の中に中途から登場した後では、彼のいう価値だけでなく生産価格も価値と同格のものとしてそのセットの中に入っている。しかし生産価格が、マルクスが述べているように、価値からの投下労働量の変化を含む概念として、ただの価値の形態としての価格でないとすれば、問題が出てくることは確かだ。価値法則の支配なるものが、一方で、商品の等価交換を前提しなければならぬのだとすれば、その場合、他方で生産価格が一般に成立しているという条件の下で、等価交換なるものがいかにして資本主義の下で恒常的に安定的に維持出来ると考えられたのであろうか。はっきりした説明はない。この問題について両者の関係について説明があった場合でも、あまりに簡単すぎてそこでの説明はあまりに明瞭さに欠けるのではないか、というのがここでの問題提起である。総計一致命題を繰り返しても説明にはならないだろう。

生産価格による「価値の修正」という問題が出てこない場合はまだ良かった。そのように価値通りの交換を前提するだけで、ただその「逆転」を論じれば、説明を一貫できたかもしれない。しかし、市場での他の商品との交換欲望という商品形態に特有で、かつ一般

的で抽象的なその価値概念に基づいた需給関係だけで、どうして一定の使用価値の量の均衡的確保を基準とする社会的生産編成が可能になるのか。結局それも無理な話である。

それに、『資本論』の場合、商品規定はそもそも労働生産物に限定されているのか。リカードははっきり限定していた。周知のように、マルクスは商品から使用価値を捨象すれば労働生産物という属性しか残らない、とも述べているから、商品を労働生産物に限定しているように読めるが、はなはだ特殊な見方としか見えない。その見方に対峙するのは、資本主義社会におけるもっとも特徴的な商品としての労働力商品を挙げれば十分である。これは労働の生産物ではない。これを人間の生活資料と読み替えて一つのフィクシャス商品として想定するならまだしも、その投下労働量を想定して総労働の配分量に読み込み、それをもって価値に基づく社会的労働配分が一義的に決定できるというのであろうか。そして甚だ特殊としかみえないその問題の根源は、大きくは従来の労働力商品の価値規定そのものにあると思われるが、それはそれで大きな問題になるので、今ここでそれを論じるつもりはない。

ここでの問題は、他物と市場で交換したいという期待が商品のもつ価値性格であり、その期待の大きさは、交換価値として、さらに統一的には価格で表現されて、初めて意識できるのであり、市場で実現されて初めてその事実が了解されるということである。もちろん生産物の生産に投ぜられた労働の量が交換比率に何らかの形で影響するだろうという想像は容易だが、それだけで決定されるものとは誰も思わないだろう。せいぜい例示されるのは一日の労働の成果として一頭とれるか二頭とれるかの、鹿とビーバーとの交換比率ぐらいの簡単な場合である。『資本論』第一部、第二部と、第三部との関係からいえば、むしろ、当初に規定されている価値の性格表現としての交換価値の、最終的には価格に統一的に実現される仮想的量的規定にこそ、価値なるものの実体をなす価値性格の正体があったのではないかということを私はここで言いたいのだ。

マルクスは労働の社会性をあらゆる社会形態に共通なものとして前提しており、そこでの労働の社会性が資本主義的商品の価値の社会性に直接置き換えられているのである。それはマルクスの言う「自然法則」、あるいは宇野の言う「経済原則」によって、いわばそれはア・プリオリに初めから公理化され、労働はいわゆる価値の実体として確認されていて、いわば労働価値説、価値法則成立の絶対的な根拠になってしまっているのではないだろうか。

しかし、商品の存在とはモノではなくて一つの社会関係性の存在であり、商品はある社会関係の中に置かれたモノである。しかもそれは使用価値から区別されたモノとしての関係でしかない。その関係は他物と交換したいという期待の関係なのである。単にモノとモノとの社会的関係であれば、前提の置き方によって、労働と労働の関係もありうるだろうし、技術的關係を主張できる場合もあるかもしれない。でも商品関係は市場における他物（他者の提供する商品）との交換希望を抜きにしては考えられない。他の商品との交換を通じる自らの期待が交換価値であり、それは一般に価格によって集約され、売れることに

よって実現される価値性格にほかならない。売れなければ交換価値が実現できないことはいうまでもない。

問題は、その「自然法則」あるいは宇野の定義する「経済原則」にしても、実は資本主義的経済社会からの安易な類推であり、資本主義経済社会こそ、その「自然法則」なり「経済原則」の暗黙のモデルになっていたのではないか、ということなのである。

11

なお、私はかつて宇野のいわゆる経済原則の理解について、解釈の変更を、「労働生産過程に関する一考察」（櫻井毅、山口重克、柴垣和夫、伊藤誠共編著『宇野理論の現在と論点』2010年、社会評論社）という論題の論文で主張したことがある。それは主として「経済原則」のいわば過度の抽象的一般性の強調を批判するものであり、商品価値の経済原則への安易な還元化を、それらの非対象性ゆえに私自身の自己克服をも含めて、反省・批判した内容であった。

それはすでに独立した論文として発表したものでもあり、今ではやや不十分であったと感じていることもあり、改めてここで触れることはしないが、ご参照頂きたい。今はさらに、マルクスのいわゆる「自然法則」あるいは宇野のいわゆる「経済原則」という概念の成立自体に、私自身一層疑問をつよく懐くようになってきていることをもあり、その問題について、この際、さらに検討を進めてゆきたいと考えている。

12

あと、多少の補足を加えておきたい。

価値法則の支配ということは、マルクス経済学にとっての最も基本的な命題とされているわけだが、マルクス経済学の教科書的説明では、それは、とりあえず「簡単にいえば、私的所有にもとづく商品生産社会において、商品の交換価値または価格が、商品のものの価値量によって規制されるということである」（大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』、岩波書店、1992年）というように説明されている。言い換えれば、商品の価格はその商品価値量（投下労働量）によって規定されている、それによって社会的生産の均衡が保たれるということが、その法則の内容だということである。

しかし、すでに示したように、マルクスの説明では実は商品の価値と同時に生産価格がそこでは同次元で比較可能なものとして混合的に扱われている。そのようなマルクスの主張が可能なのは、価値と生産価格の概念基準の故意の混同による以外にはないのではないか。生産価格は価値の形態であるが、マルクスによればそこに含まれている投下労働量は必ずしも同じものではない。だから別物の筈だ。だが、もともとは比較ができない両概念が総価値＝総生産価格なる命題によって表示されても、せいぜいそれはいわば同義反復にすぎないのではないか。本来、そのような等式は成立せず、なくて構わないのだが、マル

クスがこのような恒等式が必要であるはずと考えたところにこそ何らかの錯誤、あるいは何らかのためらいがあったとしか思えないのである。錯誤がなければ総価値＝総生産価格の命題を何度も繰り返す必要はないからだ。そうでなければ錯誤と思われてもあえてそれを強行するなんらかの理由があるからとしか考えられないのである。

私の理解では、価値の生産価格への「転化」を商品の価値の大きさが価格つまり生産価格として確定されたものと考えさえすれば、あるいは投下労働量の事実上の「修正」問題さえ生じさせなければ、第一部から始まったマルクスの商品の価値理論はそのまま第三部まで矛盾なく貫徹できると考えられるはずだった。マルクス自身、生産価格の構想がまとまってくる『23冊ノート』の中で、次のように述べているところがある。――「諸資本の競争は、およそ、資本の内在的諸法則の、すなわち資本主義的生産の、現実化にほかならない。というのは、どの資本も他の資本に対立してこれらの諸法則の執行者として登場し、外的なお互いどうしの強制を通して自分たちの内的な性質を認めさせるのであり、こうした強制を諸資本は互いに自分たちの相互の関係のなかで自分たちの内的性質に従って加え合うのだからである。しかし、競争のなかでは、資本の、資本主義的生産の、内在的な諸法則は、諸資本相互の機械的な発展の結果として現われる。したがって、転倒され、ひっくり返されるのである。成果であるものが原因として現われ、転化した形態が本来の形態として現われる」（『資本論草稿集』⑧「経済学批判」1861～63、大月書店、第5分冊140頁）と。これは、とりえず価値と生産価格との正当な関連をマルクスが述べたもののようには読める。ここでは（生産価格）は、「内在的な」価値として、対象化された投下労働量が修正されたものとされてはいないようだが、定かではない。問題は内的性質」「とか内在的」という意味である。そのことは最初に指摘しておいた。

13

すでに見たような価値と生産価格の関係をめぐるマルクスの混乱は、価値の生産価格への「転化」によってその「転化」が投下労働量の「修正」という理解を含んだために生じた問題であると考えられるが、もしも生産価格という概念が、予定通り『資本論』第三部の本来の方針に適応したただの新しい姿態（Gestalt）として登場しているのだとすれば、それは価値の価格表示以上のものではないだろう。元々を辿れば、マルクスの当初の価値概念の把握における曖昧さが原因になっていたように考えられる。商品における内在的価値すなわち市場における交換性を求める共通の内在的な価値性格なるものは、それ自身ではその量的範囲を決定できず、市場における競争の結果として、その生産物の生産に必要な費用と投下資本額に比例した利潤との組み合わせによって一定の価格、すなわち市場価格の均衡化の結果を得ることによって決まる、とされていた筈だ。すなわち費用価格に投下資本に対する利潤の平均的分与額が加わった「生産価格」だ。利潤は資本家が雇用した労働者の剰余労働によって資本が獲得した「剰余価値」がその源泉であることはいうまで

もない。それは「資本一般」での規定として、すでに資本の生産過程論で明らかになっている。ただその価値は市場の状況によって変動する。労働者を雇用する資本の生産力水準によって付加される利潤部分が増減するという影響を受けるが、この変動には何の問題もない。いわゆる価値から生産価格への「転化」には投下労働量による量的な変化は必要でないばかりか、定義的にも比較の次元が相違するので不可能である。価値なる概念が具体的な価格表示を与えられるだけの話で、『資本論』の第一部、第二部で剰余価値が可変資本とだけ直接対応するのに対し、その第三部では剰余価値は流動資本と一定の期間充用される固定資本を加えた資本額に対応した平均利潤という形で配分されるきまりになっているからである。

ただ一般に自らの費用価格に算入された他の部門からの購入商品もまたすでに「転化」の影響を受けているはずである。その部分は過去の「転化」の結果と考えれば、確かにマルクスが主張しているように、その費用価格について、購入する商品においてすでに投下労働量の変容を含んでいるという説明だから、これは生産の条件に違いのある各別資本の市場の競争の中での交換関係を示すもので、従来の生産価格の初歩的な競争論抜きの一般的理解よりは一段と進んだ見方といえるかもしれない。のち、「費用価格の生産価格化」として「転形問題」の争点になった点だ。とはいえ、マルクスはその場合、投下労働量によって規定される「価値」が、それとは量的に異なる労働量が投下されている「生産価格」に同一水準で「転化」されるという発想を継続したままで事態を考察している限りでの話にすぎない。しかもそれさえ深く追及することをマルクス意識的に途中でやめてしまっている。

しかし何度も繰り返し述べてきたように、生産価格が「内在的な」概念である交換価値なる想定を第三部で量的に受け止める具体的な姿態（Gestalt）であるとすれば、その価値との相違なるものはもともと存在せず、生産価格の中にすでに変容して吸収されているのであって、その問題も全体とすれば生産された総剰余価値以外には利潤の根拠がないことを資本の生産過程論ですでに証明されている「内在的」真理として承知していれば済むことである、と考えるのである。それが資本主義的な分散的な生産構造をうけとめている特殊な社会的労働配分の形式なのではないか。剰余価値の配分に少なからぬ時間的ズレが潜むとしても、順調な生産の継続と拡大によって、この社会が自然的な経済の原則にもなんら矛盾なく運行可能なことが、そこでも示されていると思うのである。その場合も、当然、資本の競争を抜きにして利潤の配分は不可能であり、そのためにこそ価値という表現ではなく生産価格が中心的な役割を演じることになるのは当然である。そして分散的な生産システムである資本主義的生産がそのような形で社会的労働配分を行なっていることも理解できるのだが、そこになぜマルクスが価値での交換という言葉にこだわったのか、実際のところ理解できないでいるわけなのである。なぜならこれが資本主義的生産社会における価値性格を有する商品の生産価格での現実の配分にほかならないことを示しているからである。

『資本論』の第三部では、生産価格こそがマルクスによると価値の「顛倒」した「ひっくりかえった」姿態（Gestalt）なのだ。こう考えれば生産価格は価値の公然たる現実の姿として市場に存在することもはっきりするはずである。マルクスのように価値と生産価格という二つの概念を価値法則の支配という事態の説明に同時に同じ次元で登場させなければならないことの意味がどこにあるのかが知りたいのである。生産価格の成立が市場における資本の競争の結果を表わしているのに対して、等価交換としての価値法則の支配というのは、暗示的な言葉だけで、具体的な内容の説明が見当たらないように思われるからである。

14

マルクスは論理を価値法則で一貫させることが出来なくなった。そこにマルクスの錯誤というより当惑と解決への困難さがあり、問題の発生にマルクスは苦慮していたのではないかと私は秘かに推察しているのである。生産の社会的均衡が資本の利潤率をめぐる市場の競争の中で決定されてくるとしても、そして平均利潤は利潤として結局剰余価値の総和の中からもたらされるものにすぎないとしても、それは商品の生産に投ぜられた抽象的人間労働の量が価値として資本主義的生産を法則的に支配していることになるわけではない。媒介しているのは明らかに資本の利潤率であり、それをめぐる個別資本の競争の結果としてもたらされる生産価格による均衡にすぎないからである。マルクス自身がはっきり言っているように、「商品の価値、またはただ外観的にのみこの価値から独立な生産価格が、直接に恒常的に現象面で商品の市場価格と一致していて、それがただ規制的平均価格として市場価格の不断の諸変動の不断の相殺によって実現される」（『資本論』大月版『マルクス＝エンゲルス全集』、25b、1111頁）という文言では、「価値」という言葉を残している点に依然問題はあるが、この文言は価値と生産価格との正しい関係を示すものであろう。ただその辺のマルクスの見解の表現的な曖昧さが、マルクスの主張を確固たるものから遠ざけてしまう。はっきりしないものにするのだ。根本はやはり価値と生産価格の規定の問題に戻ってしまうことになる。ただ断っておきたいのは、ここでいう資本主義社会とは商品経済の論理のみで構成されている純粋な資本主義社会であって、経済原則に対応するような対象ではないということだ。現実の社会は論理的に説明可能なものではないだろう。ただ資本主義だけが商品経済という人間にとって外的な対象性をもつ商品経済の圧倒的な存在をもって理論的な全面的社会性を想定するのを許すことによって、その限りで、ある程度の理論的な説明が可能な領域が存在しているに過ぎない。もちろん自然条件、歴史条件、政治情勢、権力構造などのような諸条件抜きには、資本主義社会さえ存立しえないことはいうまでもない。他の社会、あるいは地域の間人社会、あるいは地域の存立の条件について、自然原則、あるいは経済原則と呼ばれるようなものは、存在しないであろう。あるのはせいぜい純粋資本主義の想定からの類推にすぎない。

あらためて生産価格から価値への還元、そして価値の経済原則へのさらなる還元という安易な筋道について、考え直すことから次は始めなければならないかもしれない。(了)

時間の関係上、不備は免れないが、とりあえず以上をもって本論の概要とする。(2024 年 10 月)

論文 2

『資本論』 第三部における生産 価格論の混迷について

1. マルクスの価値と生産価格の規定

- (1) 商品の価値 = 生産手段移転分価値 + 可変資本価値 + 剰余価値
- (2) 商品の生産価格 = 費用価格 (生産手段移転分価格 + 労働賃金) + 平均利潤

2. 生産価格の規定をめぐる

- (1) 生産価格は価値の価格形態——『資本論』第一部、第二部において価値がその「内在的規定」として裏面で示されるに対して、その第三部に現れる市場の競争過程で個々の資本によって作り出されている個別商品の市場での均衡価格を表わす
- (2) 生産価格は価値の修正物で、それに含まれる労働量を異にする。但し、商品総量としては両者は一致する。したがって価値が生産価格を規定することは正しい

3. 生産価格に「転化」する「価値」とは何か

- (1) 商品にとって他の商品のどれだけと交換できるかが最大の関心事である。交換が偶然的でなくある程度安定的に行われるようになると、背後に労働の存在を感じるようになり、資本主義的生産になれば価値の実体が労働であることを悟る、というのがマルクスの最初の説明である
- (2) マルクスの説明で次に出てくるのは、商品から使用価値を捨象すると残るのは価値だという説明で、Boehm = Bawerk の蒸留法という命名で知られる通説だ
- (3) これに対して、商品の形態規定性を重要視する宇野弘蔵は、商品所有者が自ら持つ商品を他の商品と交換したいという商品のもつ性格を、自らの使用価値と区別された他の使用価値量で示される交換価値として、さらにそれを社会的・統一的に一つの貴金属に集中して表示される価格として捉え、価値実体としての労働を否定した
- (4) 宇野の言い方は、商品が労働生産物とは限らない、という点では妥当するかもしれないが、宇野自身も、その「資本の生産過程論」や「資本の流通过程論」では、マルクスと同じようにその説明の中では、価値という言葉で、労働時間をその実体とした価値の量規定を、商品の使用価値名と同時に、内容の説明にこだわらず積極的に用いている。
- (5) 他方で、またマルクスも、人間の抽象力を使って価値の世界を分析したというように説いているのかもしれない。マルクスが次のように述べているからである。「資本家的生産者たちは互いにただ商品所有者として相対するだけであり、また各自が自分の商品をできるだけ高く売ろうとする（外観上は生産そのものの規制においてもただ自分の恣意だけによって導かれている）のだから、内的法則は、ただ彼らの競争、彼らが互いに加え合う圧力を媒介としてのみ貫かれるのであって、この競争や圧力によってもろもろの偏差は相殺されるのである。ここでは価値の法則は、ただ内的な法則として、個々の当事者にたいしては盲目的な自然法則として、作用するだけであって、生産の社会的均衡を生産の偶然的な諸波動のただなかをつうじて維持するの

である」(マル=エン全集、25b、p. 1124-5)。

4. 内的法則とは何のことか

- (1) 内的法則といっても、「資本一般」のような総資本的な立場では無理だし、代表単数で資本の性格を明らかにできても、資本の相互の対立や競争関係、そしてその結果としての社会的な生産・配分の均衡の法則性は論じることはいできない。そのためには生産価格という概念の投影が不可欠である。つまり生産価格という現実的形態の分析の結果として内的概念としての価値があるという順序になる、と考えてよいのではないか。

5. 何故に、一方で、価値がその生産に投じられた労働時間で決定され、生産価格への転化が剰余価値の平均利潤による投下労働時間の量の修正として論じられながら、他方で、むしろ生産価格は価値の価格として、むしろ生産価格に対してはその内在的な規定だとする矛盾する見解と見える理解が共存しているのか。

- (1) マルクスにとって、労働価値説は絶対的なものであった。というのは彼は人間社会に共通な自然の原則が存在し、その基本が自然対象に道具をもって働きかける人間労働にあることを確信していたからである。人間の労働のもつ社会性は普遍的であり、商品経済においてそれは商品の価値に対象化されていると考えていた。有名なクーゲルマンあての書簡にあるように、労働をやめれば人間が生きていけなくなることは三歳の童子でも知っている。ただ資本主義商品経済社会では労働は主体ではない。商品が主体になっている。労働も賃金労働者が担っている。人間の行動に由来しながら、その成果としての資本が、逆に人間を客観的に支配している。今までの社会に見られない構図である。多分マルクスはそのことを自身で明らかにしながら、その資本主義の特殊な構図を基に、人間社会というものを一般化してしまったように考えられる。その発想そのものにはまったく根拠がないとはいえないかもしれない。

しかし資本主義以外の社会は人間が主体で、単一の構図で構成することは不可能だ。現実の資本主義社会ももちろん完全な商品経済だけで成り立っている筈はないから、いわば空想的な話ではあるが、それでも理念的に一社会として構想できるのは、商品経済というものが人間にとって外的存在で、自然に似た客観的に認識可能な対象であるために、それが人間の労働をも、労働力の商品化を通して包摂することによって、社会科学として一般化できることになったからだ。マルクスがその根拠を明らかにし、宇野がそれに理論的な説明を加えたものと私は考えている。

- (2) マルクスは、友人になって間もないエンゲルスが、マンチェスターの父親の会社勤務から帰国後、現地の経験をもとに執筆して『独仏年誌』に寄稿した「国民経済学批判大綱」(1844)を読んで大いに感服した。二四歳のエンゲルスの執筆したそれは、素朴ではあるが、従来の経済学のカテゴリーがそのブルジョワ社会の市場の競争の中に存在することを明らかにし、そのブルジョワ的カテゴリーの徹底的批判を通じてブルジョワ社会の本質を暴露し、社会主義社会への道を展望するという、後のマルクス主義を先取りするものであった。そして、その翌年、刊行された「イギリス労働者階級の状態」(1845)とともに、マルクス主義の先駆的業績とされている。マルクスも同じ頃、盛んに執筆活動は行っていたが、哲学的な手法のものが多く、二歳年下のエンゲルスに大いに刺激を受けた。以来、マルクスは、その問題意識を受け継ぎ、

ブルジョワ経済学のカテゴリー批判を自身の研究課題に据え、「経済学批判ノート」を書き始めることになる。

- (3) マルクスは Grundrisse から続いて『経済学批判』（1859）刊行後、「経済学批判体系ノート」を一貫して書き続けるが、その中の「23 冊ノート」（1881～3）と呼ばれる部分の中頃で、Rodbertus の地代論研究に啓発され、リカードの地代論を超える絶対地代を構想する過程で、生産価格（当初は費用価格と呼ぶことが多かった）という新しい概念の定立を図った。その後マルクスはリカードの研究を詳細に行いつつ、リカードの価値修正論に学んで自らの等価交換一辺倒の考えを改め、価値から生産価格への転化論を構想するに至る。

根拠を十分に明かに出来る草稿などの資料は見当たらないが、その時期は、やがてマルクスが自らの著作名に予定していた従来の「経済学批判」の名称を、新たに「資本」に変更する時期に当たっている。それがリカードに代表されるイギリスの古典経済学の「経済学原理」という伝統的手法の強い影響下にあったことは疑いないように思われる。ヘーゲル弁証法の影響が論じられることも多いが、実質的にはイギリスの古典派の影響の方が大きい。ある意味では従来の方法からの大きな転換である。そしてこの転換が、従来の「経済学批判体系プラン」とどうかかわるかが問題になる。

現行『資本論』の三部構成は、その変遷過程の結果として出てきたものであるが、草稿が未完成である。そこに各種の問題が生じた原因が潜むのではないか。

6. 結びに代えて

- (1) 周知のように、マルクスは『資本論』の原稿を未完成のまま遺して死んだ。生きていれば書き進めて、さらに推敲を重ね完成に近づけたことであろう。その結果がどうであれ、今のように矛盾した形のまま遺すことはなかっただろうと想像する。

しかし投下労働量をその価値実体とする商品の等価交換へのマルクスの執着は、彼の「自然法則」つまり宇野の言う「経済原則」をその根拠に据えるものであっただけに、捨てがたいものがあつたに違いない。したがって生産価格に「転化」後の労働量の修正も、総量をもってすれば価値法則は貫徹するという総計一致命題によって保障されると考えた。しかしこれは一種の自縄自縛でしかない。当然マルクスは当初の自らの原点に戻って考え直した筈だと思うが、勿論想像の域を出ない。しかし、彼はまだ「競争」論自体いまだ手を着けていなかった。ただ、「プラン問題」の中では、すでに「資本」という中項目の下に「資本一般」、「競争」、「信用」、「株式資本」という四項目が並んでいる。そして現行『資本論』第三部の冒頭の言葉の中に、第一部、第二部の内在的規定とは次元的に区別されるべき、第三部におけるその具体的で現実的な市場における姿態（Gestalt）が示されることが、明瞭に述べられているのである。

- (2) マルクスは第三部の表題として「総過程の諸姿態」を用意していたことが知られている。現在の「資本主義的生産の総過程」という表題は、エンゲルスのものであると思われるが、現行『資本論』にとってどちらが適切であったかは分からない。しかしマルクスの命名の意図だけはそこにはっきり見えているように感じるし、また同時に、エンゲルスの編集が、いままでのマルクスのプランには見られない地代論が纏めて加えられたことなどから、その意図もさらに別のところにあったということも容易に想像できるのである。

ただ、いろいろ想像しても限りないので、最後に私の勝手な思い付き的発言を記して終わり

にしたい。

- (3) というのは、エンゲルスの最初の問題提起に回帰してくるのではないかということだ。勿論ただ戻るのではないが、エンゲルスの問題意識は、そもそもブルジョワ経済学つまりアダム・スミスやリカードの生産費（労働）によって決定される価値は効用（使用価値）をめぐる市場の競争によって決定される、という逆転現象こそが、私的所有の下でのブルジョワ経済の本質であるということであった。

われわれが今まで見てきたところでは、マルクスの思考を辿ってゆけば、生産価格こそが市場における個別資本間の競争を通じて資本主義的生産を均衡的に社会的に配分する基準になるのではないかということであり、それこそがいわば資本主義経済の運動法則の基礎になるのではないかということであり、商品の生産価格こそが価値なるものを逆転させて、まさにマルクスの言う価値なるもの実体的な基準になっているのではないかということであった。

言い換えれば資本主義社会においては社会的労働の配分が、労働自体の配分ではなくて資本の配分になっており、労働は賃金労働者の配分の形を取らざるを得ないということである。したがって資本主義社会の廃棄には労働力商品に廃棄以外にはなく、逆にそれ以外の商品経済自体の存続は否定する必要はないということである。

（以上）